

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ～ 龍の影を纏いし騎士 ～

キラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 龍の影を纏いし騎士

### 【Nコード】

N1868N

### 【作者名】

キラ

### 【あらすじ】

かつて、戦いの中に身を投げた男がいた。彼はその戦いの中で悩み、苦しみ、それでも前に進もうとした。やがてすべてが終わり、人々はすべてを忘れた。しかし、彼 城戸真司の戦いは、再び始まる。今度は、異世界で。これは、一人の『馬鹿』が織りなす、新たな物語である。

この作品はユーザー登録をされていない方でも感想が書けるようにしています。お気軽にお寄せください。

## プロローグ 異世界からの誘い（前書き）

初めての方ははじめまして、そうでないかたはおはこんばんにちは、キラと申します。というわけで、1つ注意事項が。

最初に言っておく！この作品に、龍騎側は真司以外基本出ない！

それでもいいという方はぜひ読んでみてください。

## ブローグ 異世界からの誘い

その昔、幾度も繰り返された戦いがあった。選ばれた人間が仮面ライダーとなり、最後の一人になるまで殺しあった。

何故、彼らは戦ったのか？

ある者は、愛する者のために。

ある者は、ライダーの頂点に立つために。

ある者は、永遠の命を得るために。

ある者は、戦いを止めるために。

ある者は、楽しく遊ぶために。

ある者は、ただ暴れるために。

ある者は、英雄になるために。

ある者は、ただ幸せになるために。

ある者は、超人的な力を得るために。

ある者は、姉の敵を討つために。

ある者は、完全な肉体を得るために。

誰もが、自分の欲望のために戦った。

そんな中、仮面ライダーとなった一人の青年がいた。最初、彼は戦いを止めようとした。

だが、彼は知ってしまった。ライダーには、どうしても叶えたい願いがあつた。そして、戦わなければ彼のよく知る人物が死んでしまうことを。

彼は悩んだ。苦しみ続けた。様々な思いを受け止めながら、それで

もあがきつづけた。

……そうして、ようやく願いを見つけた時、彼の命は終わりを告げた。

「やっぱ！このままじゃ遅刻だよ！くっそ、なんでいつの間にか目覚ましが壊れてんだ！？」

戦いは終わった。すべてが元に戻り、死んだ者達は生き返った。同時に、皆が戦いの記憶を失った。

「おはようございます！城戸真司、ただいま出勤しました！」

だが、ただ一人、彼の戦いはまだ終わっていないかった。

「こおら真司！お前新人の分際で遅刻とはいいい度胸だなあ！」

OREジャーナルの事務所に入った途端、城戸真司は編集長の大久保大介に首を絞められ頭をぐりぐり押さえつけられる。

「痛っ！？へ、編集長痛い、痛いっす！遅刻って言っても三分くらいじゃないですか！？」

「三分でも一秒でも遅刻は遅刻なんだよ！大体お前この前の記事だつてなんだありゃ？あっちこちらからクレーム来てるぞ！」

反論する真司だが、大久保は取りあおうとはせず、彼の頭をポカリと殴る。

「とにかく、とっとと仕事行って来い！」

「は、はい！城戸真司、汚名挽回のために行つてまいります！」

ようやく首絞めから解放された真司は、荷物をまとめると敬礼して

事務所から出ていった。

「……それを言うなら汚名返上か名誉挽回でしょ」

事務所の稼ぎ頭である桃井玲子が記事をパソコンに打ち込みながら冷静にツッコむ。

「やっぱり馬鹿ですね」

こちらもパソコンとにらめっこしながら、真司と同じく新人の浅野恵がつぶやく。

「むっ、むむむ……真司君の今日の運勢、最悪の最悪、何がどうなるかわからないですね」

「っってお前も仕事しろ!」

どこから持ってきたのか、さりげなく水晶玉で占いをしている島田奈々子に大久保が怒鳴った。



「……それにしても、黄金のキノコとか絶対ハズレのネタだと思うんだけどなあ」

ぶつぶつぶやきながら、森の中をうろろろしている真司。この辺りで金に光るキノコを見つけたとかいう噂があるらしく、調査に向いたわけだ。が、正直見つかるとは思っていない。

今日は骨折り損かため息をついたとき。

「ん……………」

真司の視界の奥の方に、鮮やかな光があった。まるで、黄金の何かが輝いているかのよう。

「え？ひょつとして当たり？っしやあ！これで馬鹿新人からは卒業だ！」

思わぬ展開につきつきしながら、真司は光の方へ走って行く。

……だが、そこで見たものは。

「な、何だよこれ………？」

まさに、『光』そのものだった。何かが輝いているのではなく、ただ光が浮かんでいたのだ。信じられない光景に、真司は驚くばかりだ。

「……でも、これはこれでスクープだよな。よし、早速写真を」

開き直った真司がバッグからカメラを取りだそうとしたとき。

光が、輝きを増した。そして、真司を包みこんでいく。

「ちよっ、ま、タンマタンマ！」

必死の叫びも虚しく、真司は完全に光に取りこまれ、その空間から『消滅した』。

「ん…………あ…………」

真司が目を覚ますと、そこは一面真っ白な世界だった。一体、何がどうなったのだろうか。

「ここは……………」

「気がついた？真司君」

声のした方を振り向くと、そこには男性と女性が一人ずつ立っていた。

「どうして、俺の名前を……？」

真司は今しがた自分に声をかけたであろう女性の方へ尋ねる。

「時間がない。質問はするな」

すると男性の方がそれを制し、真司にあるものを手渡す。

「こ、これは………？」

黒い長方形の入れ物に、カードがたくさん入っている。そして、その入れ物には金色のマーク　　龍であろうか　　が刻まれている。

「お前に力を与える。戦え」

「え？」

いきなりの発言に啞然とする真司。

「っってお兄ちゃん！違うでしょ！」

と、女性の方が男性にツッコむ。お兄ちゃんということは、この二人は兄妹なのかと考える真司。

「ああ、すまない。つい昔の癖で」

「まったく……よく聞いて、真司君」

恥ずかしそうにうつむく男性。今度は女性の方が話すらしい。

「あなたは、これから異世界に行ってしまうことになったの」

「……………は？あの、何を言って」

さらなる爆弾発言に混乱する真司をよそに、女性は話を続ける。

「何度も世界が繰り返されたことによって、空間にひずみが出来てしまった。そして、あなたはそこに落ちてしまった。……ごめんな

さい。私達のせいなのに、あなたが異世界に行くのを止めることができない」

「……それ、本当の話？というか異世界って……」

「本当のこと。これからあなたが行く世界は、言ってしまうと危険なところなの。今渡したデッキは、身を守るためのもの。だから、無理に戦いの中へ飛び込む必要はないんだよ」

女性はそう語り終えると、小さく微笑む。

「……と言っても、きっと真司君はすぐに色々首を突っ込むんだろ  
うね」

その懐かしそうな顔を見て、真司の胸の奥から何かがこみ上げてくる。漠然としているが、前にこの人を見たことがあるような気がしてきたのだ。

「……ねえ、君は一体……どうして俺の名前を知ってるの？」

真司の言葉を聞いて、女性は少しだけ寂しそうな表情になる。

と、その瞬間、真司の体が光り始め、次第に消えていく。

「……もう時間みたいだね」

「そのようだな」

女性と男性がそうつぶやく。

「ちよつと待って！君達は……」

聞きたいことがたくさんある。そう思って真司は叫ぶが、体はどんどん薄くなっていく。

「……あなたは、もう私のことを思い出せないけれど……でも忘れないで。私は、ずっと真司君のことを覚えてるから。大切な友達だっと思ってるから」

最後に聞こえた女性の言葉は、なぜかとても心に響いた。

「死なないで」

「……ここは……！」

次の瞬間、真司の目に映ったのは、見たこともないような近未来的な都市だった。



## プロローグ 異世界からの誘い（後書き）

いかがだったでしょうか。へたくそなのは仕様ですが、これでも精一杯書きました。

白い世界の男女はもちろん神埼兄妹です。最終回の描写だとうなつたのか微妙にわかりにくいのですが、この作品ではミラーワールドで真司達を見守っているという設定にしています。

なんか色々強引ですが、よろしければこれからもお付き合いいただけるとうれしいです。

## 第一話 理由なんてどうでもいい（前書き）

い、いきなりお気に入り登録が10件以上！しかも評価してください！  
った方まで！みなさん、本当にありがとうございます！  
感想などあれば気軽に寄せください。

## 第一話 理由なんてどうでもいい

「……うん」

気がついたら公園のベンチに座っていた真司は、とりあえず街をうろつろしながら、非常に困った顔つきをしている。

なぜなら、現在置かれている状況が完全に常識の範疇を振り切っているからだ。

よく周りの人から馬鹿だと言われる真司でも、周りの風景を見て明らかにわかることがひとつある。

ここは、自分の知っている世界ではない、と。

建造物や道路など、様々なものが見たこともないような設計になっており、技術も発展しているように思われるのだ。一目見て、ここが今まで自分がいた場所とはまったく違うとわかる。どうやら、あの不思議な兄妹が言っていた通りのようだ。

そんなわけで、今からどこへ向かおうかと考える真司。さすがに手詰まりと言っにはまだ早いだろう。

「……とりあえず、交番にでも行ってみるか。さすがに全世界共通であるよな、多分。…そうだ、ついでに日本のお金が使えるかどうかも聞いてみよう……500円しか持ってないけど」

その後は、なんとか住み込みで働けるところでも探そうかなと、己の懐の寒さを嘆きながらも珍しく社会人らしい堅実な思考をする真司。

……だが、こういう時に限って、予想外の出来事が起きてうまくいかなくなるものだ。今回も、まさにそうだった。

ドガアアアアーン!!!

「っ!?! な、なんだ?」

真司が交番の場所を聞こうと通行人を引きとめようとした瞬間、突如向こうの方から爆発音が響いた。それを聞いた途端、周りにいた人々が取り乱しながら音と逆方向へ急いで逃げ出す。

だが、いまいち状況が飲み込めていない真司だけは爆発音のあった方へ走る。持ち前の好奇心と行動力が顔を覗かせた結果だ。

「すみません、ちょっと通してください、すみません」

必死で逃げてくる人々を押し分け、流れに逆らいながら進んでいく。

「早く避難してください！早く！」

やがて、ひとりの少女が混乱している人々に避難を促している姿が見えた。年は真司より下のように見え、茶髪をツインテールにして、白を基調とした変わった服を着ている。

「っ！そこで突っ立てる人！早く逃げてください！」

「え、俺？」

様子を探ろうとしている真司に気づいたその少女が大声で叫ぶ。

「なあ、ちょっと！一体なにが起こってるんだ？」

どうやら事情を知ってるらしい少女に真司が叫び返すと。

「そんなこと説明してる暇はありません！危険ですからとつとどこかに行ってください！！」

さらに大きなボリュームで怒鳴り返された。なかなか逃げない真司にイライラしているらしい。

そのとき。

ドガアアアン！！

再び轟音が響き、同時に向こうの道の曲がり角から何かが飛んできて店の壁に激突する。

「スバル！！」

少女が叫ぶ。よく見ると、今飛んできたのは……

「なっ……女の子！？」

あれだけの勢いでコンクリートの壁にぶつかったのに、その青髪の少女はまだ立ち上がる。さらに、彼女の視線の先にあるものを目にして、真司は驚きのあまり声を失う。

「あ……あ……」

もはや何なのか想像もつかない、カプセルに似た円錐型の機械が複数、そこにあつた。真司の中にわずかに残っている動物としての野生の勘が告げる。アレはやばい、と。

「スバル！くっ、とにかく、早く避難してください！！」

真司に対してそう告げると、茶髪の少女は機械の方へ向かっていく。あの青髪の少女の救援に行くらしい。そのものすごい身のこなしを見る限り、彼女達は一般人ではないのだろう。

真司も未知のものへの恐怖と、このままいても邪魔なだけだという気持ちから言われたとおり逃げようとする。

だが、その瞬間彼は見た。

自分と戦っている少女達の間ほど、道路の隣に建った店の入り口

でうずくまっている小さな女の子の姿を。目の前の事態に混乱しているのか、泣く仕草をしているだけで動く様子がない。そして、機械と戦う少女二人はそれに気づいていない。

「とにかく、早く逃がさないと!」

足は少しすくんでいるが、真司の決断は早かった。真つすぐに女の子のもとへ走って行く。

しかしそのとき、機械の内の一体の一部分が怪しく光る。次の瞬間、そこからレーザーが青髪の少女に向かって撃ちだされた。

少女はそれをすんでのところかわした。だが、レーザーはそのまま突き進んでいく。泣いている女の子の方向へ。

「……危ないっ!」

真司の体から冷たい汗が噴き出す。すでに彼は女の子に向かって飛び込んでいた。

「おおおおおっ!」



必死の叫びの甲斐あって、真司の体はレーザーより先に女の子にぶつかり、ぎりぎりそれを回避した。人間、追い込まれると信じられない力を発揮するらしい。

「大丈夫！？とにかく一緒に逃げ……………」

何が起こったのかわからないといった表情の女の子に呼び掛けているさなか、真司は飛び込んだ時にポケットから飛び出したものさっき渡されたカードケースを目にした。

「……………！！ねえ君、ひとりで逃げられる？」

真司がそう尋ねると、ようやく我に返った女の子は小さくうなずいて駆け出した。

「……………」

それを見届けると、真司はカードケースを拾い上げ、店のショールームの前に立つ。ウィンドウに映る自分の姿を見て、考える。

（……………どうして俺は、このケースの使い方を知っているんだ？）

不規則な息づかいをしながら、半ば無意識といった感じで、左手に持ったケースを前に出す。

すると、ショーウィンドウからベルトが飛び出し、真司の腰に巻きついた。

先ほどケースを見た瞬間、真司の頭に何かが流れ込んできた。……いや、正確には浮かんできたという方が適切だろうか。

ケースを見つめながら、真司は少しの間だけ目を閉じた。

（どうしてこんなものが存在するのか、どうして俺が使い方を知っているのか。理由は全然わからない）

だが、次に目を開けた瞬間、彼の瞳は決意の色に満ちていた。

（だけど、力があるのなら。何かを守る力があるのなら、俺は迷わない！）

右腕を左斜め上に突き出し、真司は叫んだ。

「変身!!」

カードケースをベルトに差し込む。次の瞬間いくつもの影が現れ、真司の体でひとつになる。その影は色を帯び、強靱な装甲に変化していく。

「っしゃあ!」

気合いの入った掛け声とともに、銀と赤で彩られた龍の騎士が今、異世界の地に誕生した。

## 第一話 理由なんてどうでもいい（後書き）

まず一言謝罪を。前回バトルやるとか言っておきながら変身しかしてない……誠に申し訳ありません。なんか思ってたより長くなってしまったのでここで一旦切ることになってしまいました。次回は絶対バトルです。

ちなみに、なぜこの作品を始めようかと思ったか、最大の理由は真司に普通のヒーローとしての活躍をしてもらいたかったからです。いや、確かに本編でも大活躍はしたけど、やっぱり出る番組が龍騎じゃなかったら絶対もつと……だったと思うんです。もちろん、作者は龍騎のストーリーが大好きです。王蛇さんかけーです。ですが、だからこそもつとストレートな戦いならどうなるのか？と考えたわけです。

というわけで、よろしければ次回も読んでみてください。

## 第二話 行先は機動六課（前書き）

お気に入り登録などしてくださった方、本当にありがとうございます。

感想などあれば、どんどん気軽に送っちゃってください。

## 第二話 行先は機動六課

「ティア、どうする？」

合計5体のガジェットを前にして、スバルはティアナに問いかける。

「…そうね、数が多いから、とりあえずは私の幻術で」

「だあああつ！！」

ティアナの作戦の説明は、ひとりの男の叫びとともに中断された。

「ティア、あれって一体……？」

「……私も知らないわよ、あんなの」

二人の言う『あんなの』は、突然横からガジェットの一体に体当たりをかまし、そのままそれを押さえつける。

「ねえ、君達！」

「っ、今の声、もしかしてさっきの……」

全身を装甲で包んだその男の発した声を聞き、ティアナははっとする。

「話は後だ！とにかく、この機械を倒せばいいんだよな！？」

「は、はい、そうです！」

「じゃあ俺も手伝うよ！」

ティアナの答えを聞いた男はガジェットを押さえこんでいた腕を放し、そのまま拳を叩きこむ。大きく後ずさりをするガジェット。どうやらかなり効いているらしい。

「す、すごい……ティア、あの人と知り合いなの？」

攻撃の威力、そしてがむしゃらではあるが力強い動きを見て、スバルは感心する。

「さっき少し話しただよ。それより、あんたここですつと突っ立  
ってるつもり？」

「あつ、そうだった！よし、行こうティア！」

「ええ！」

そうして、二人の少女も戦闘を再開した。

「らあつ！でりゃあつ！」



左を一発。相手の反撃のレーザーを軽くかわして今度は右ストレート。

「うおりゃああっ!!」

最後に真司が渾身の力をこめた右足蹴りを食らわせると、機械は内部を破壊されその機能を停止した。

「じゃあ!」

興奮して思わずガッツポーズをする真司。なぜかはわからないが、戦い方というものがなんとなく頭に浮かんでくるのだ。

「よし、次だ」

走って次の一体に一撃を加える真司。その際、向こうで先ほどの少女二人が見事なコンビネーションで戦っているが見える。

しかし、その一瞬のすきを突かれ、近くにいた一体の機械のレーザーが真司の背中を直撃した。

「ぐわああっ！」

うつぶせに倒れこむ真司。だが、ダメージはそこまで大きくはなく、すぐに立ち上がる。

「くそ、一体に手間取ってたらやられちゃうな……なら」

そうつぶやくと、真司はケース　カードデッキから1枚のカードを取りだし、左腕に装備されている『龍召機甲ドラグバイザー』に差し込む。

S W O R D   V E N T

するとバイザーから電子音が流れ、同時に真司の右手に刀『ドラグセイバー』が装備される。

「はあっ！」

こちらへ撃ちだされるレーザーを避けたりドラグセイバーで弾いたりしながら機械の一体を斬ると、あまりの威力に一撃で相手の装甲が割れる。

「だああっ!!」

続いてとどめの一振りをお見舞いし、あっという間に機能を停止させる。少女達が相手にしているのを入れなければ、残りは目の前の一体のみだ。

「おりゃああ!!」

もう、勝敗はついたようなものだった。先ほどと同じように強烈な切れ味を持つ斬撃を加え、機能を停止させる。

「はああ……ディバイイン……バスター……!!」

少女達の方を見ると、あちらも今戦闘が終了したところだった。最後の青髪の子の強烈な拳の一撃を見て、真司は思わず少し身震いする。

「すごいなあ……女の子なのに」

そうつぶやいていると、向こうから少女達が駆け寄ってくる。

「あ、あのっ！ご協力、ありがとうございました！！」

「あなたのおかげで、戦況を有利に運ぶことができました」

いきなりお礼を言いながら頭を下げてきたので、真司は戸惑う。

「いや、全然オッケーだから。というか俺が勝手に入って来たただけだし、そんなにかしこまらなくてもいいって」

真司がそう言うと、二人はおもむろに頭を上げて、自己紹介を始める。

「私は時空管理局機動六課スターズ3、スバル・ナカジマといいます！」

「同じく機動六課スターズ4、ティアナ・ランスターです。…それで、あなたは一体何者なんですか？」

青髪の子がスバル、茶髪の子がティアナというらしい。そして、ティアナの方から質問を受ける真司。

……これまた理由はわからないが、真司は今の自分の姿を表す名前を知っていた。

「龍騎。仮面ライダー龍騎だ。そして」

答えながら、真司はベルトからデッキを引き抜く。そうすると装甲が消え、『仮面ライダー龍騎』は人間の姿へ戻った。

「本名は、城戸真司っていうんだ」

「おお、すげー、本物のヘリコプターだ。俺乗るの生まれて初めてだよ。いや、やっぱ生で見るとスケールが違うなあ」

先ほどの真面目な様子とは打って変わって子供のようににはしゃぐ真司を苦笑いして見るスバルと、無表情で眺めるティアナ。

あの後「ところでここはどこ？ジクウカンリキョクってなにそれ？」などと真司が言いだしたため、先ほどの力のことも考え、彼は次元漂流者ではないかという結論がスバルとティアナの間で出た。そういうわけで、真司も連れて機動六課へ戻ることとなり、現在迎えのヘリが来ている場所まで移動したところだ。

「はじめまして、時空管理局機動六課スターズ1の高町なのはです。あなたが城戸真司さんですね？」

ヘリに乗り込むと、ティアナよりも少し濃い茶色の髪をサイドポニーにまとめた少女が、柔和な笑顔で出迎えてきた。見た目から、ティアナやスバルよりは年上だろう。

「あ、ああ、うん。はじめまして」

席に座りながら真司が挨拶した少し後、ヘリは飛び立って機動六課へ向かい始めた。

「先ほど何があったかは二人から聞きました。私の部下の者を助けていただき、本当にありがとうございます」

「うわゝ、やっぱり景色が全然違うなあ。まさに未来都市って感じ。そうだ、カメラで撮っとこ」

「にゃ、にゃはは……詳しい話は、目的地に到着してからお聞きしますので」

聞こえていないだろうと思いつつ、窓に張り付いて景色を眺めている真司に向かってそう告げるのはであった。

なんやかんやで機動六課へ到着した真司は、途中でティアナやスバルとは離れ、なのはの案内で部隊長室へ向かうこととなった。

「はじめまして。機動六課部隊長の八神はやてです」

「同じく機動六課所属、ライトニング1のフェイト・T・ハラオウンです」

「私はライトニング2の八神シグナムだ」

「スターズ2の八神ヴィータだ」

部隊長室に入ると、早速色々な人から挨拶を受ける真司。八神という姓が多いが姉妹だろうか。それにしても似ていないような気がするが。

「こちらこそはじめまして。俺は城戸真司。ジャーナリスト……って、この世界じゃただの無職だけど」



まあ、そんな細かいことは置いて、真司もとりあえず挨拶を返した。

「とりあえず、ここに来るまでの詳しい話を聞かせてもらえませんか？」

はやてがそう言ってきたので、真司は快くうなづく。

「もちろん。あ、でも話す前にひとつ。俺には敬語使わなくていいから、普通に話してくれないかな。堅苦しいのはあんまり好きじゃないんだ」

「そう、なら改めて。真司君、詳しい事情を説明してくれへん？」

「えっと、まず山で」

真司はここまでの大まかな出来事を説明した。

「なるほど。説明ありがとっ、わかりやすかったわ」

「…まあ、あれだけ身振り手振りすりゃあよくわかるよな」

「その分よくわからない擬音語も入ってたけど。どーんとかだーんとか」

はやての感想にヴィータとフェイトが小声でツッコむ。

「それで、俺は元の世界に帰れそうなのか？」

真司がそう尋ねると、はやては小さく笑みを浮かべる。

「多分帰れると思う。今の話に出てきた地球の日本って、私らが住んどったところやからな」

「本当！？よかった」

はやての答えを聞いてほっと胸をなでおろす真司だが、すぐに心にひっかかりを覚える。

あの白い世界の兄妹。あの二人の口ぶりから察すると、ここから元居た場所へはそう簡単には帰れないのではないだろうか？

（何か確かめる手段は………あつ）

そのとき、真司は持っているバッグの中に入っているものを思い出した。

「はやて、ちょっと調べてほしいことがあるんだけど」

「ん、何や？」

真司はバッグから取り出したものをはやてに渡す。

「それ、俺の名刺。隅の方に勤め先のOREジャーナルってところの郵便番号と住所、電話番号が書いてあるだろ？はやて達の住んだ地球にそれがあるかどうか、確かめてもらえないかな」

はやてはしばらく名刺を眺めていたが、やがて顔つきを難しいものに変える。

「……いや、その必要は多分ないな。なのはちゃん、これ見てくれん」

「え？私？」

突然の指名に驚きながらも、なのはははやての近くに移動して、真司の名刺を見る。そして、こちらも急に顔色を変えた。

「これ、翠屋の郵便番号と電話番号だよ！」

なのはの言葉にはやて以外の全員が驚愕する。はやてはやっぱりなという表情だ。

「やっぱり違うものがあるのか？翠屋って一体……」

「翠屋っていうのは、なのはのご両親が経営している喫茶店の名前。もちろん、今も潰れたりせずに続いている」

真司の質問にフェイトが答える。

「ついでに言うと、住所は全然違つとるんよ。翠屋は海鳴市にあるはずなのに、真司君の名刺に書かれてる住所には全く別の地名が書いてある。……郵便番号と電話番号が一致しているのに、住所は不一致。後で一応調べてはみるけど、まあ真司君の帰る場所は私たちの地球じゃないやろうな」

「私達の出身の地球以外で、『地球』って名称の世界は見つかっていないはずだし……今のところは元の世界へ戻る方法はわからないね」

「そうか……………」

はやてとなのはの言葉を聞いて、やはり簡単には帰れそうもないようだ、と真司は考える。

「まあ、気落とさんでな。真司君の世界を見つけようと努力はするし、それまではきちんとここで保護」

「あのさ」

はやての言葉を途中で遮って、真司は口を開く。

「俺も、はやて達に協力させてくれないか？今日みたいに役に立てるかもしれないし」

「…………え？」

真司のその言葉は予想外だったらしく、はやては目を丸くしている。

「真司君わかつとる？この機動六課は危険な任務を請け負うことも多い。場合によつたら死ぬかもしれんので」

「……それでもだよ。俺さ、元々何でも首を突っ込まないと、気が済まないんだ。俺の力で誰かを守れるなら、それもいいんじゃないかって」

真司はありのまま思ったことを告げる。そういえば、白い世界の少女も同じようなことを言っていたような気がする。自分はすぐ首を突っ込む、と。

「せやけど、今日初めて戦ったんやろ？そんな経験の浅い人間を使うわけにも」

「なら、私と城戸を戦わせてもらえませんか」

と、ここで名前を言って以来一言も話していないシグナムが急に口を開いた。

「私といい勝負ができるほどであれば、経験を補うことのできる実力があると考えてもよろしいのではないですか、主はやて」

そう語るシグナムの目はものすごく燃えている。今すぐ戦いたくて  
うずうずしているかのようだ。

「……まったく、しゃーないな。とりあえずそうしてみよかな」

はやてもその熱意に折れて、肯定の意思を表した。

「というわけだ、城戸。断りはしないだろうな。自分で協力すると  
言った以上、怪我をするのをいとわなくらいの気持ちはあるのだ  
ろっ」

シグナムはまるで品定めをするような視線で真司を見る。

「……あの、もしかしてシグナムって」

「お察しの通り、いわゆるバトルマニアってやつやな」

小声ではやてに尋ねると、小声で返事が返ってきた。

「……………」

正直、シグナムの視線は結構怖いのだが、だからといってこの勝負、受けない理由はない。

「わかった、受けるよその勝負」

こうして、龍騎初の模擬戦が決まった。



## 第二話 行先は機動六課（後書き）

真司が馬鹿っぽく見えるのは仕様です。早くなのは達に真司がそういうやつだということを知ってもらいたいからです。

シグナムと模擬戦つてもはやテンプレじゃないかと思うほど多いパターンなんですけど、この作品でもそういう流れになってしまっていた。いやだって未知の戦士と戦いたがらないシグナムなんてシグナムじゃないやい！

真司の他キャラへの呼称は悩んだのですが、もう一律呼び捨てでいいんじゃないかと考えました。真司は23歳なので。ただ、優衣はちゃん付けで呼んでたんですよね……でも「なのはちゃん」「スバルちゃん」「ティアナちゃん」てなんか嫌だ……ということです。

何か意見があればよろしければ伝えてくれるとうれしいです。次回もよろしく願います。

### 第三話 龍の騎士VS烈火の騎士（前書き）

模擬戦書く前に、とりあえず参考資料調べてたところ。

Wのダブルエクストリーム…80トン

龍騎のドラゴンライダーキック…300トン

……え？

### 第三話 龍の騎士VS烈火の騎士

「どうしたんですか、八神部隊長？急に模擬戦場に来てだなんて」

はやての召集で模擬戦を観戦する場所に呼びだされたフォワード陣を代表してスバルが尋ねる。

「リインもお昼寝してたのに眠いです」

はやてのユニゾンデバイス・リインフォース？は重そうなまぶたをこすっている。

「何、おもしろい模擬戦が見られるから、みんなも呼んであげようかと思うてな」

「模擬戦ですか？……でも、誰と誰が？」

「ここにいないのはシグナム副隊長ですけど……」

はやての答えを聞いて、エリオとキャロは辺りを見回す。とそのとき、ティアナがあることに気づく。

「そつえば、さっきの城戸真司さんは……まさか！」

「正解。今からやるのは、まあ入団テストみたいなもんやな」

はやてが悪戯っぽく微笑むと、フォワード陣は大いに驚く。

「い、いきなりシグナム副隊長と戦うんですか!？」

「しかも入団テストって……」

「城戸真司さんって、さっきスバルさんとティアさんが話してた……」

「……『仮面ライダー龍騎』というのに変身する人ですか？」

上からスバル、ティアナ、エリオ、キャラが言う。

「あつ、二人とも出てきたよ」

なのはが指さす方には、戦場に出てきた真司とシグナムの姿があつ

た。

「ま、お手並み拝見ってところだな」

ヴィータが真司に視線を向けながらつぶやく。

「……でも真司、鏡貸してくれてどういふことなんだろう」

フェイトは、先ほど別れる前に真司が言った言葉を思い出し、首をかしげていた。

「準備はいいか、城戸」

「ああ、多分ね」

向かい合う真司とシグナム。模擬戦とはいえ、互いの間にはピリピリとした空気が張り詰めている。

真司にとっては、機動六課に加えてもらうためのテスト。

シグナムにとっては、未知の力を持つ相手との心躍る一戦。

譲れないものが、そこにはあった。

「セットアップ」

シグナムの一声とともに、彼女の体は甲冑に包まれ、レヴァンティ

ンは待機状態から騎士が持つ剣へ変化する。

「うわあ…：すげえ強そう。でもここで引いちゃ男が廃るよな」

勇壮な姿のシグナムを見て、真司もフェイトから借りた手鏡を右手で持ち、それにカードデッキを映す。そうすると、先ほどと同じようにベルトが彼の腰に巻きつく。

手鏡をポケットに入れ、右手を左斜め上に突き出し、叫ぶ。

「変身！！」

デッキをベルトに差し込み、真司はその姿を仮面ライダー龍騎へと変えた。

「っしゃあ！」

気合いを入れる真司に、シグナムは好戦的な笑みを浮かべる。

「鏡を使つてとは思議な変身だな。だが、そんなことよりもお前の強さに興味がある」

「……そっか。じゃあそろそろ」

『あ、ちよい待ち』

真司の言葉は、突然入ってきたはやての通信で遮られた。

『真司君、戦う前にどうしても確認したいことがあるんやけど』

「え、何？」

『さっきの腕をビツと伸ばすポーズには、なんか意味があるん？』

はやての質問の内容を聞いて、真司は首をかしげて頭を掻く。

「いや、特に意味はないんだけど、なんか気合いが入るかな？って  
思っ。結構かつこよくない？アレ」

『……ノリがいいんやな、真司君。質問は終わりや。始めてええよ』



何だか微妙な反応をして、はやては通信を切った。

「よし。では行くぞ、城戸！」

「ああ！」

> S W O R D   V E N T <

剣には剣だ。そう考え、ドラグバイザーにソードベントのカードを入れ、ドラグセイバーを構える真司。

「はあっ！」

「うおおっ！」

互いに間合いを詰め、己の剣をぶつけ合う。

キーン！キーン！

剣と剣が凄まじい勢いで交差する。両者相手の隙をついて一撃を与えようとするが、実力は拮抗しており、どちらも突破口を開けない

でいる。

ガキイーン！！

力を込めた攻撃が激突し、剣のつばぜりあいとなった。ここまで完全な互角。超一流の技量を持った烈火の騎士に対して、龍の騎士は一步も引いていない。

「はあっ！（……なるほど、いい動きだ。これで素人とはな……だが！）」

「ふっ！！」

「おわっ！？」

一旦剣を引いたシグナムは、そのまま空中へと浮かびあがる。

「ちょっと待て！飛べるっでずるくない！？」

真司は目の前の光景に啞然とし、思わず文句を言う。だが、シグナムはそれを気にも留めない。

「レヴァンティン！」

> シュランゲフォルム<

レヴァンティンがその形を剣から鞭のようなものに変え、シグナムはそれを思い切り振りまわす。

「うわっ、やばい！！」

不規則に襲いかかってくる攻撃を必死に避ける真司。

「くっそ、あれ剣じゃなかったのかよ！？」

もちろんこちらのドラグセイバーには変形機能はない。そうになるとこのままでは真司の攻撃はシグナムに届かない。

「……………なんとかしないと」

「……シグナムが押し始めたね」

全員がその戦いに注目している中、フェイトがそうつぶやく。

「まあ、空を飛ばれると辛いだろうね。真司君は飛べないみたいだし。でも」

「……よう避けとる。あれで戦うのが二回目っていうのが信じられへんな」

なのはとはやてもそれぞれ感想を口にする。三人とも、真司の動きのよさに驚いているようだ。

「つてええ！？城戸さんつて戦いの経験あの一回しかないんですか！？」

何気なくはやてが言った言葉にスバルを始めフォワード陣はさらに驚愕する。当たり前だ。いくら見たこともないような力を使うとはいえ、素人のはずである人間が『あの』シグナムにあそこまで粘っているのだから。

「……だが、いくらなんでもそろそろ終わり……ん？」

「新しいカードを出しましたね」

真司が何かしようとしているのを見て、ヴィータとリイン？がそう言った。それを見て、場の全員が何となく感じる。

このままでは、終わらない。

> GUARD VENT <

鞭となったレヴァンティンが今にも真司に直撃するといつとき、電  
子音が鳴り響く。

次の瞬間。

「なっ………!!」

捉えた、と確信していたシグナムは目を見開いた。レヴァンティンは確かに直撃した。だがそれは突然真司の肩に装着された盾・ドラグシールドに、だったのだ。その防御力に、レヴァンティンは空しく弾かれる。

だが、真司の反撃はまだ終わらない。

「よっしゃ！」

ドラグシールドに弾かれて勢いを失ったレヴァンティンを素手でつかむ。元は剣の刃だったものだ、当然痛みは走るが、それくらい耐えなければこの勝負には勝てない。

「だありゃあああ……！」

渾身の力を込めて、真司はレヴァンティンを振りおろした。

「な、何っ……！！！」

鞭のようにしなるレヴァンティンに振り回され、シグナムは地面へ叩きつけられそうになる。何とか力を込めて踏みとどまるが、その位置はかなり地上に近い。

「うおおおっ!!」

そして、それこそが真司の狙いだった。重荷になるドラグシールドを捨てた後、ドラグセイバーを構え、体勢を整えきれていないシグナムに向かって真っすぐ跳ぶ。

「くっ……!!」

それを見てレヴァンティンを剣の形に戻すシグナムだが、間に合わずに鞘で受け止める。

だが、苦し紛れの防御ではドラグセイバーの一撃は止められない。

「がああっ!!」

強烈な衝撃によってシグナムは地面に背中から落ちる。数メートルの落下だが、それでもかなりの痛みが体に走る。

「今だ!!」



それを見て、さらにたたみ込もうとする真司。

だっ  
たが。

がっ

「あ、あれ……？」

真司は転んだ　　何もないところで。要は足がもつれたのだ。なぜか非常にキレのいい体の動きに、頭が追いつかない弊害が今ここで出てしまったのである。

そして、それを歴戦の戦士が見過ごすわけがない。シグナムは立ち上がり、チャンスとばかりに真司に突っ込んでくる。

「はああっ!!」

「うわあ、ちよっ、くそ!!」

真司もものすごい速度で復活すると、シグナムの猛攻を必死にしのいで距離を取る。

「ふふ……面白い」

仕留めきれなかったシグナムだが、その表情は心底楽しそうなものだ。

「自らが受けるダメージも省まないがむしやらかな攻撃……気に入ったぞ！私の必殺の一撃を撃とう！」

そう言い終わると、シグナムはキツと今日一番の真剣な顔になる。それを見て、真司は本能的にやばいと感じる。

「紫電………」

「（やばい、なんかでかいの来るぞ！）」

今にも放たれそうなシグナムの大技に焦りながらも、真司はデッキからカードを一枚取り出し、ドラグバイザーに差し込む。

> STRIKE VENT <

真司の右手に、龍の頭を模した形のドラグクローが装着される。

「はあああ……………」

真司が力を込めるにつれ、ドラグクローの口に炎がたまっていく。

「一閃!!」

「おりゃあああ!!」

互いの技が同時に放たれた。凄まじい威力がぶつかりあい、二人ともじりじりと後ろに下がる。

そして。

「うわああっ!!」「」

攻撃は相殺され、その余波で真司もシグナムも地面に叩きつけられた。

[illegible]

観戦席では、あまりに白熱した真司とシグナムの戦いに全員が絶句していた。その間も、真司とシグナムは手をかすかに動かすだけで、なかなか立ち上がれないようだ。

その様子を見て、はやてが言う。

「両者ノックダウン……ということは、規定に従い先に立ちあがって『優勝しちゃったもんね』と言った方が勝者やな！」

「それ何の規定！？いつ決まったの！？」

「いや、ドラゴンつながりで、今」

なのはのツツコミにも涼しい顔で答えるはやて。

「……テストなんだから、わざわざ勝敗をつける必要もないと思うけど」

フェイトがそう言つと、はやては笑いながら頭に手を当てて、

「はは、冗談冗談。無理に二人を動かすようなことはせんって。この勝負は引き分けや」

と言った。

「すごい……シグナム副隊長と引き分けるなんて」

エリオが尊敬の眼差しで真司を見る。他のフォワードの人間も真司の戦いぶりに驚き、感心していた。

「あゝ、シグナムに真司君？動けるようになったら夕食に行こうや」

はやてがそう通信を入れると、二人とも手を挙げて「了解」の意を示した。

こうして、真司VSシグナムは引き分けに終わった。

### 第三話 龍の騎士VS烈火の騎士（後書き）

ふう……疲れたぜ……

読んでもらえればわかる通り、引き分けにしました。シグナムはリミッターかけてるわけだし、真司も経験不足なんだし、これでちょうどいいんじゃないかと思います。今の真司は、戦いの記憶があいまいに体に残っており、それによってうまく戦えているわけですが、それと戦いを思い出せない頭との間で違和感が生じて転んでしまったという感じです。

さて、次回は真司が機動六課の仲間になれるかどうかの判定があります。まあ答えはもう出ているような気がします。

では、また次回。

#### 第四話 改めてよろしく！城戸真司です！

「おお……なんて豪華な料理なんだ……いただきまーす！」

スバル達に案内された真司は、現在食堂で夕食にありついている。周りの席にはスバルとティアナの他に、彼女達よりさらに年下に見える少年少女がひとりずつ座っていて、幸せそくにがつがつ食っている真司を見つめている。

「ところで、君達の名前は？」

それに気づいた真司が声をかけると、二人は緊張した様子で口を開く。

「は、はじめまして、エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです。それと……」

「キューー！」

キャロと名乗った少女の後ろから小さな生き物が飛び出し、真司の方へ寄っていく。



「わたしの使役竜のフリードです」

フリードはうれしそうに真司の胸にくっついてる。

「く、くすぐったいぞ、かわいいなあこいつ。よろしくな、エリオ、キャロ、フリード」

挨拶を終えると、真司は再び料理に手をつける。そのあまりの勢いに驚く四人。

「す、すごくおいしそうに食べますね。言っちゃ悪いですけど、この料理って学食並ですよ」

ティアナが尋ねると、真司は少し照れて答える。

「いやあ、色々あって朝も昼も食ってなかったからさ。というか、そもそもここしばらくまともな食事取ってなかったからね。ほとんどインスタントだったんだよ」

遅刻しかけたために朝食を抜き、そろそろコンビニでお昼を買おうかなと思っていたところでミッドチルダに飛ばされた。さらに

そこから謎の機械　ガジェットというらしいが　と戦い、その後シグナムと模擬戦。そういうわけで真司の空腹メーターはとくに振り切っていたのだ。

「そうなんですか。でもそれならちゃんとした食事を取ればよかったのに」

「そういうわけにも行かなかったんだよ。金欠でアパートの家賃も滞納してたし、そろそろ追い出されるんじゃないかとびくびくしてたんだ。いやゝ、社会の厳しさが身に染みるよ」

「……大変でしたね」

大人の生活の辛さを聞かされ、同情するエリオ。

「でも、本当は無職だったところを大学の先輩に拾われたんだからまだマシなだけだね」

「へえゝ、優しい先輩ですね」

真司に負けじと料理にがつつきながらスバルがそう言う。

「うーん、まあいい人なんだけど、ちょっと変わってるんだよね」

それから話は編集長である大久保や仕事仲間についてのものとなる。異世界なのをいいことに少々脚色したエピソードはフォワード陣に好評だった。少なくとも、シグナムとの模擬戦のことを聞こうと思っていたのを忘れてしまうほどには。こうして、真司はすっかり彼女達と打ち解けたのだった。

「さて、全員そろったところで、本題に入るか」

夕食後、部隊長室に再び集まったなのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ。話す内容はもちろん、城戸真司についてだ。

「シャーリーの解析によると、先ほどの模擬戦で真司君　龍騎からは魔力反応はなし。あの力は魔法以外の何かで動いとるってことやな」

全員が黙って聞いている中、はやては話を続ける。

「そして、それを魔導師ランクで表現するならA A Aクラス。さらに最後の一撃の時はA A A?にまで達したらしい。シグナム、戦った感想は?」

「……強いですね。動きはまだまだ未熟な点多いですが、十分に戦えるレベルです。戦力としては申し分ないと思いますが」

シグナムの言葉に、一同はうんうんとうなずく。観戦していた側にも、真司の強さは伝わってきていた。

「戦闘能力に関しては問題なし。次に人間性についてやけど……なのはちゃん、どう思う?」

とりあえず一番近くに立っているのはに尋ねるはやて。するとなのは顎に手を当てながら答える。

「うん、誠実そうで、いい人だと思うんだけど……なんて言うか……」

「なんて言うか、何や?」

「……ちょっと、おつちょこちよい？」

素直になのはが思ったことを口にとると、色々なところから賛同の  
声が。

「あ、それあたしも思った。なんかよくわからねえけど馬鹿だよな、  
あいつ」

「……確かに、ちょっと間が抜けてそうだね」

「私と戦っている時も突然何もないところで転んだからな。あれに  
は驚いたぞ」

「私もなのはちゃんと同意見やから……真司君〓馬鹿、ってことで  
決定やな」

全会一致。本人が見たらしもしかしくなくても絶対泣くだろう。

「でもまあ、それもチャームポイントってことで。基本は信用できそうな人やから、仲間に加えても問題ないと私は考えとるんやけど。誰か異議がある人はおらん？」

はやてがそう言つと、皆が彼女を見つめ、無言で賛成の意を示す。

「よし！決まりやな。真司君は民間協力者として、今から私達機動六課の一員や！」

これで少しだけ男女比が改善されたなどと考えながら、はやては宣言した。

一方その頃、話題の人物はと言うと。

「…うん、むにゃむにゃ……くか」

部屋に案内され、とつくに眠りに落ちていた。ちなみに、故郷の地

球を想った時間、わずか9・8秒。余程疲れがたまっていたのか、それとも神経が図太いのか。

とにかく、こうして城戸真司の異世界初日は終わりを告げた。

翌日。

「えー、というわけで、訓練の前に今日から民間協力者として私達に協力してくれることになった、城戸真司君から一言ご挨拶をいただきます」

フォワード陣の訓練前に、一同が集まって真司に注目している。

「えっと……改めて自己紹介しますが、城戸真司、23歳です。今

朝みんなの仲間として迎えてもらえることを聞いた時は、とてもうれしかったです。こんなたくさんの美人に囲まれてるし」

真司の発言に少し照れる女性陣。中には笑っていたり、無表情なものもいたが。

「というわけで、これからよろしくお願いします」

挨拶が終わると、ぱちぱちと皆から拍手が送られ、真司は照れる。

「よしっ！じゃあ始めようか！」

「」「」「はいつ！」「」「」

その後、なのはの言葉にフォワードの四人は元気に返事をして、これから訓練を始めるようだ。

「じゃあ俺は見学でも……」

「何を言っている城戸。お前は私と来るんだ」



「……へ？」

暢気にしていた真司に、突然シグナムから声がかかった。

「突然転んだりするのは鍛錬が足りない証拠だ。これから毎日、私  
がみっちり鍛えてやるからな。そしてまた本気の力をぶつけ合おう  
！」

シグナムの目は恐ろしいほど爛々と輝いている。真司と戦うのがそ  
こまで楽しみなのだろうか。

「いやいや待つて！俺昨日までただの社会人で、鍛練とか急に言わ  
れても……」

「その点はちゃんと考えてある。安心しろ、今日は控えめに……3  
0kmマラソンだけで許してやろう」

「全然控えめじゃないんですけど！そんなんできない……って引ッ  
張らないでっわあああ……」

ずるずるとシグナムに引ッ張られていく真司。

「あゝあ、シグナム燃えとるなあ」

「剣も使ってたし、自分と同じパワー型の人と出会えてうれしいのかも」

真司の断末魔を聞きながらはやてとフェイトがつぶやく。

二人とも、全然真司を助けようとはしなかった。

#### 第四話 改めてよろしく！城戸真司です！（後書き）

真司のこれからの苦勞が思いやられる……自分で書いたんですけどね。ちなみに時期的にはホテル・アグスタの警備のちよつと前です。皆のトラウマ、白い魔王様の降臨を真司は防げるのか！？

感想とか評価とかあれば気軽に寄してください。ひとつでもくればとても喜びます。

では、また次回。

## 第五話 猛特訓と重なる影

「ふゝ、毎度毎度のことだけどなのはさんの指導はきついな」

「でも、基礎だけじゃなくて少しだけでも実戦向きのことも教えてくれないかしら」

「キャロ、今日の動きよかったよね」

「え？そ、そうかなあ。ありがとう、エリオ君」

午前の訓練を終え、昼食を取っているフォワード一同。口々に言いたいことを話しあっていると、ふらふらとこちらにやってくる男性がひとり。精根尽き果てた様子のその男は、ぐったりとエリオの隣の席に倒れ込むように座り、机に突っ伏した。

「…えっと、真司さん？大丈夫……には見えませんね」

エリオがその男 城戸真司の顔を覗き込むように見ながら声をかけると、真司は首をガガガと機械のように動かして答える。

「…………死ぬ。マジで死ぬ。ジャーナリストは足が命だけどそうい

うレベルじゃないよあんなの」

それはまさに消え入るような声で、それを聞いた者に彼の受けたダメージをわからせるのには十分すぎるものだった。

「…確か、シグナム副隊長に訓練を受けていたんですね。なんか想像できるなあ、あの人の鬼特訓」

「……本当にひどいよあれは。ペースが落ちたら容赦なくしばいてくるんだぜ？もう食事ものに通らないよ………」

スバルの言葉を聞いて、真司はさらに愚痴る。というか、初日から30km走れという無茶な注文をつけられた拳句、無理だと言うと「プロのマラソンランナーは女性でも42kmを3時間以内で走るんだ。なら一日かければお前にもできるはずだ」などという無茶な理論で返されるのだから、真司としてはたまったもんじゃない。

そんな感じで、スバル達が食事を終えて食堂を出ていくまでの間、真司はずっと机に顔を乗せてぐたぐたとなっていた。

「城戸、そろそろ行くぞ」

そして、シグナムからの地獄への誘いがやってくる。

「……まだやるの？もう10km走ったんだし、今日はこのくらいで……」

弱気な態度の真司に対し、シグナムははあ、とため息をつく。

「……なるほど。確かに、主はやての提案に従った方がよさそうだな。城戸、走る前に少しだけフォワードの訓練を見学するぞ」

「え……………?」

「……………!!」

真司は、目の前で繰り広げられる激しい訓練に目を疑った。

「彼女達は毎日あの訓練をこなしている。それぞれの目標に向かってな」

シグナムが真司に語りかけると、彼は彼女の方を振り返り、こう言った。

「……………自分より年下の子があんなに頑張ってるのに、俺がへこたれてちゃ駄目だよな。やるよ、あと20km」

先ほどまでのやる気のない表情から、真剣な顔つきに変わっている。

「なら行くぞ。ついて来い」

真司を従えて歩きながら、シグナムは改めて主である八神はやての的確なアドバイスに感心していた。

『真司君みたいなタイプなら……年下の子が頑張ってるところでも見せたらやる気出すと思うけどな』

昼食ではやてのセリフより抜粋。まさにその通りとなった。

「……はあ、はあ、はあ、……は、走りきったぞ……」

もう夕方になろうかというところでようやく30kmを走破した真司は、その場にぐったりと倒れ込んだ。それを見て、シグナムは満足そうな表情をする。



「午後は精を出して頑張っていたな。明日からは走る距離を半分にする代わりに、私との組み手をするぞ」

「……はは、厳しそ〜。でもまあ、一応よろしく」

疲れ切った様子で乱れた呼吸をしながらも、真司は笑顔でそう言った。

「……………その意気だ」

それを見て、シグナムも少しだけ微笑んだ。男性のそんな顔を見たことがなかったので、少し戸惑ってはいたが。

翌日。

「悪いね、俺の買い物の手伝いしてもらっちゃって」

多くの人々が道を行き交う中、真司はスバルとティアナにお礼を言う。

「いえ、あたしは街に出るの好きですから」

「上からの命令なので仕方ありません」

スバルは楽しそうに、ティアナは素っ気ない態度で答える。

どうしてこういう状況になったかというと、簡単にいえば真司の服の数が足りなかったからである。ここに来た時の服と、機動六課に余っていたランニングシャツとジャージだけでは何かあった時困るのではないかということで、はやての提案で服を買いに行くことになった。

真司はもちろん道などを知らないため、スバルとティアナが派遣されたらしいが、もしかすると毎日厳しい訓練をしている彼女達を休ませる意味もあったのかもしれない。

「それにしても、ミッドチルダに来てから驚くことばかりだよ。…これを記事にできたら大スクープなんだけどなあ」

「馬鹿新人から脱出できる、ですか？」

真司のつぶやきにスバルがそう返す。真司の仕事については、先日本人から聞いているのだ。

「でも、真司さんが怒られてる様子って想像できるような気がしますね。結構おつちよこちよいみたいだし」

「…え！？もしかして俺って会って数日の人に簡単に見破られるくらいわかりやすい馬鹿なのか？」

ティアナの言葉にショックを受ける真司。

「……まあ、そうですね」

「どつちかというと馬鹿っぽく見えますね」

さらっと厳しい評価をするスバルとティアナだった。

「あ、着きましたよ。ここがデパートですから、大体のものはあるでしょ」

スバルを先頭にしてデパートに入り、一同は男性用の服売り場へ向かう。ちなみにお金はそこその量を預かっている。

「いっぱいあるな。とりあえず色々見てみるか」

数分間そのコーナーを歩いた後、真司はシャツとジャージを一着ずつ手に取る。スバルとティアナやそこらを歩く人の服装を見る限り、センスは日本とさほど変わらないようだ。

「これなんてどうかな？」

「あつ、いいんじゃないですか？似合いそうですよ」

「別に構わないんじゃないですか」

二人に尋ねるとOKが返ってきたので、真司はレジで会計を済ませる。

「二人も折角来たんだし、何か買ったらどうだ？」

「……ん、それもそうですね。じゃあ新しい服でも買っちゃおうかな？」

真司の言葉にスバルが賛成したので、三人は続いて女性用のコーナ―へ移動する。

「それでは行ってきましたーす」

スバルは服を探しに行くが、ティアナの方は真司と一緒に立つたまままだ。

「あれ？ティアナは行かないのか？」

「お金は計画的に使う主義なので」

にべもなく答えるティアナ。計画的というよりは、元々服とかはあまり買わないタイプなのかもしれない。

「ふうん……あ、俺ちょっとトイレ」

そう言つて、真司は走って行つてしまふ。

「ああ、トイレは逆　行っちゃった」

やっぱりおつちよこちよいだなと感じながら、ティアナはそのまま立って待っている。

数分後。

「ティア~~~~！」

スバルが服を買つて帰つてきた。

「あれ？真司さんは？」

「ああ、あの人なら　」

「お待たせ」

トイレに行ってたぶん迷子、と言おうとしたところで本人が戻ってきた。

「あ、真司さん…ちゃんとトイレには行け」

「はいティアナ」

唐突に何かが入った袋を差し出す真司。

「え？こ、これは……………」

「ひとりだけ手ぶらで帰るってのもあれだろ？だから、俺からのプレゼント」

ティアナが中を見ると、白いワンピースが入っているのが見えた。驚いて真司の顔を見ると、彼は二カつと明るく笑っていた。

「っ！！」

その笑顔を見て思わずはっとするティアナ。

「あゝ！いいな。ティアだけ。真司さん、私の分は？」

「たはは、ごめんごめん。ティアナの分買ったらお金無くなっちゃってさ」

スバルが文句を言い、真司は申し訳なさそうに頭を掻いている。

「えっと、それで、気に入ってくれた？」

恐る恐る真司が尋ねてくる。選んだ服に自信がなかったのだろうか。

「……ま、まあ……ありがとうございます」

そっぽを向いて、どもりながらティアナは答えた。それを見てにやにやするスバル。

「あゝ、ティア照れてる！」

「なっ……」



「えっ、そうなの？」

たじろぐティアナに追い討ちをかけるように無意識に質問する真司。

「ち、違いますよ！まったく、真司さんはやっぱり馬鹿です！そのバカスバルと一緒にで！」

「がーん！年下の女の子に面と向かって馬鹿って言われた……………」

「というかあたしもまるでついでのようなじられてるし……………ひどいよ」

小さな子供のようにすねる真司とスバルを見てため息をつくティアナ。

「まったく……………あんな人の笑顔が、どうして少しだけ重なったのかしら」

## 第五話 猛特訓と重なる影（後書き）

ティアナにフラグ……ではありませんが、何となくティードと重なる要素が真司にあるということにしました。とはいえ、真司とティードの性格は全然違うと思いますが。

## 仮面ライダー龍騎設定

今夏休み明けの試験に備えて勉強中なので執筆ができません。なので、この際説明し忘れていた龍騎の設定について書いておこうと思います。

城戸真司……本編最終回後の戦いの記憶を失った状態。だが真司は真司なので、当然性格は本編の龍騎として戦った真司と同じである。24歳。

### 仮面ライダー龍騎

基本能力は変わっていないので、所持カードのみ説明。

ADVENT……ドラグレッダーを召喚する。

SWORD VENT……ドラグセイバーを装備する。

GUARD VENT……ドラグシールドを装備する。

STRIKE VENT……ドラグクロウを装備し、ドラグクロウ・ファイヤーを発動。

FINAL VENT……ドラゴンライダーキックを発動する。

STRANGE VENT……その場に最も適したカードに変化する。

## 白黒の絵のないカード×2

とりあえずこんな感じです。絵のないカードはまだ使えません。なんでカードが全部ないのかという疑問の答えとしては、時空の乱れが起こったのが突然だったため、神埼の用意が間に合わなかったから、ということにしています。今のところはノーマル龍騎のカードにストレンジベントが加わっただけですが、このカード相当使えるのでまあいいでしょう。

## 第六話 それは生き物として当然のこと

「ん、こうかな……いや、ひょっとしてこう………?」

通路を歩きながら、真司は首をかしげて腕を様々な方向に動かしている。先ほどシグナムとの組み手での動きを思い返しているのだ。

すると、向こうからエリオとキャラが言葉を交わしながらやって来るのに気づく。

「よっ、エリオ、キャラ。訓練の帰り?」

「あ、真司さん。はい、いつものようにしごかれてきたところです」

「真司さんも、シグナム副隊長との訓練が終わったところですか?」

真司の質問にエリオが答え、キャラがこちらに聞き返してくる。

「ああ、こっちも相変わrazuの鬼特訓だよ。……ま、力がついてきているのは確かだとは思っけだね」

シグナムによる鍛錬も、今日でちょうど一週間。ここまで走り込みが中心だったが、明日からは実戦での動き方などに重きを置いて教えるらしい。この際剣技についても鍛えてもらおうかと考えている真司である。

「キュピーー！」

「おわっ！いきなり飛び込んでくるなよフリード。ほら、よしよし……」

キャロの周りを飛んでいたフリードが急に胸に突っ込んできて真司は驚くが、すぐに笑顔でその頭を優しくなで始める。

「ふふ。フリードは真司さんが大好きみたいですわね」

「いいな、僕なんて結構長い付き合いなのにそこまで好かれてないですよ……懐かれる秘訣とかあるんですか？」

エリオは羨ましげに真司とフリードのじゃれあいを見つめている。

「うーん、動物の好みとかはわかんないけどな」

真司が首をかしげるが、キャラはエリオの方を見て微笑む。

「真司さんはエリオ君にも懐かれていますからね。そういうオーラを持つてるのかもしれないよ?」

「そうなのかも……って僕はフリードと同格なの!? 一応人間なんだけど!？」

キャラの言葉にすかさずツッコむエリオ。

「えっと……というかエリオって俺に懐いてたの?」

全然知らなかったというような表情をする真司。確かに食事の時はよく話すが、それはスバル達も同じことだ。向こうが気を利かせて自分を輪の中に入れてくれているのだと考えていたのだが。

「それはそうですね。最近のエリオ君の話の内容の40%が真司さんのことですから」

「あはは……だって、僕の周りは女の人が多いから………」

エリオは照れくさそうに頭を掻く。つまり、珍しく男の知り合いが

できてうれしかったということだろう。

「なるほど、そういうことか。確かに女の子にばかり囲まれてた  
らな。しかも勝気な娘が多いし。ま、男同士でしか話せないことも  
あるだろうし、その時はいつでも相談してくれよな」

真司はそう言って、エリオの頭を軽くなでる。

「…は、はいっ！ありがとうございます」

すると、エリオはぱあっと笑顔になってお礼を言った。

向こうに歩いていくエリオとキャロの後ろ姿を見送りながら、真司  
は思う。

「……そうだよな。あの二人、日本じゃ小学校に通っているような  
年頃なんだよな……俺も頑張らないと」



「はやて、いる？」

それから30分後、真司は部隊長室を訪れていた。思わぬ人物の登場に、椅子に座ってペン回しをしていたたはやは驚いた拍子にそれを落としてしまう。

「ああっ、折角新技が完成しつつあったのに……！！ああああ……」

まるでこの世の終わりともいうようにずーんと沈み込むはやて。何故だか彼女の周りに土砂降りの映像が浮かび上がっているように真司には見えた。

「あ、あの……なんか、空気読めなくてごめん」

とりあえず真司が謝ると、机に突っ伏していたはやてもゆっくりと頭を上げる。

「……それで？わざわざこの絶妙のタイミングで来たってことは、当然それなりに重要な話なんやろうな？」

気のせいだろうか。はやては笑っているはずなのに、その背後にどす黒いオーラが漂っているのは。

その雰囲気気圧された真司は、思わず声が震えてしまう。

「いやその、大したことじゃないんだけど……」

「…大したことじゃない？ほーっう？」

「って違う違う！大事な話なんだ。龍騎にも関係があることさ」

「龍騎？……話してみ」

真司のその言葉を聞いた途端、はやての顔が真剣なものに変わる。  
……さっきまでも違う意味で真剣だったが。

それを見て少しほっとした真司は、先ほどあった出来事を話し始めた。

「ふう、さっぱりした」

トイレで小便を終えた真司が手を洗おうと洗面台の前に立つと、突然耳鳴りが襲ってきた。

「っ！な、何だ……って、お前は……！？」

目の前の鏡に、巨大な赤い龍の顔が映っていた。一瞬面喰った真司だが、恐怖は感じなかった。ずっと前から、この龍を知っている気がしたのだ。

「ドラグ……レッダー、だっけ？」

真司がそう言つと、龍は首を小さく縦に振る。どうやら正しいらしい。

「……それで、何か用か？」

そう聞いたところ、ドラグレッダーは無言で、微動だにせずこちらを見つめる。

すると、何となく真司には言いたいことが分かったような気がした。

「  
腹が減った、だつてさ」

ズテン、とはやてが椅子から落ちる。

「ちょい待ち！いきなり謎の龍が出てきてさあどうなると期待させていてそのオチはないやろ！？」

「いや、オチとか言われても…別に事実を話してるだけだし」

はやてのたたみかけるようなツツコミに戸惑う真司。はやてははあ、とため息について彼に尋ねる。

「大体、そのドラグレッダーって何者や？それに餌は何やればいいん？」

「ああ、それは今から話すよ。ドラグレッダーっていうのは、簡単に言つと龍騎の力を与えてくれる契約モンスターなんだ」

「……そんなものがあるって…やっぱり龍騎絡みは謎だらけやな」

真司の話に素直な感想を述べるはやて。

「それで、餌についてなんだけど……魔力が欲しいらしいんだ。だからその……分けてくれないかな」

手を合わせてお願いする真司。それを見て、はやては少しだけ考えて答えた。

「ま、とりあえず必要な量を調べてみんな。今から私が魔力をあげるから……と言っても、どうやって鏡の向こうのドラグレッダーに届けば……」

「ああ、それなら」

真司はポケットからカードデッキを取り出し、はやてに差し出す。

「こいつに流し込んでくれればいいってさ」

「そうなん？じゃあ早速やってみるわ」

「ありがとう、助かるよ」

真司がそう言うと、はやてはカードデッキを持った右手に魔力を込め、それをデッキに注ぎ始めた。その手とデッキが光る神秘的な様

子を、真司はじつと見つめる。

と、しばらくした後、部屋にあった手鏡から耳鳴りが聞こえてくる。

「あ、はやて、もういいってさ。これをたまにやってくれたら十分なんだけど……大丈夫？」

真司が聞くと、はやては少し笑って答えた。

「このくらいでええんなら、まったく問題ナッシングや。私、魔力の量だけなら馬鹿でかいから」

「そっか、じゃあこれからよろしく頼むよ」

「その代わり、シグナムの特訓頑張つてな。鍛えがいのあるやつが来たって喜んでるから」

はやてがそう言つと、真司は苦笑いをしながらもうなずく。

「はは、まあ期待に応えられるようにするよ。それじゃ、ありがとうな」

そう言い残して、真司は部隊長室を出て行った。

ひとりになったはやては、小さくつぶやく。

「……………元気やな、真司君。いきなり異世界に放り出されたっていうのに、前向きに頑張れるなんて。……………私も負けてられんな。とりあえず、この書類の山を片づけるとしますか」

ペンを手に取り、やる気を出して仕事に取りかかるはやてだった。



## 第六話 それは生き物として当然のこと（後書き）

明日テストなのに書いてしまった……これから地獄です。でも来週からのオーズに期待を込めてそれを糧に頑張ります、多分。

今回ドラグレッダーの餌の問題を解決しました。とりあえずこれでいいと思います。次回はおそらくホテル・アグスタの話に入れると思いますので、よろしくお願いします。

感想などあれば、気軽にお願いします。

では、また次回。

第七話 ホテル・アグスタ前篇（前書き）

ここからようやく原作の話に入ります。

## 第七話 ホテル・アグスタ前篇

「はあ……………」

『ホテル・アグスタ』という日本でたとえるならロイヤルなんとかと名前がつくような大きなホテルの近くで、真司はため息をつく。

今回の、そして真司にとっては初となる機動六課の任務は、このホテルで出品される『ロストロギア』なるものの保護らしい。

ロストロギアというのは……………失われた世界の技術だとか何だとかで、下手をすれば世界ひとつ滅ぼせる……………要するにヤバイものだ、と真司は認識している。本当はもっと詳しくはやてから説明を受けたのだが、難しくて忘れてしまった。

そういうわけで、真司となのは、フェイト、はやてがホテルの中に潜入し、残りのメンバーが外の警備を行うことになったのだが。

「……………やっぱりこういうのは慣れないな」

黒のスーツを堅苦しそうに身につけている真司。ため息の原因はこれだ。彼の生活および性格上、こんな真面目な服装はお手上げなのである。

それでも、任務ならば仕方がない。何とか身だしなみを整え、ホテルのロビーに入る真司。確か、ここでののは達がいるはずだが……

「あつ、真司君。こつちだよ」

「お、そっちか。ごめん、ちょっと手間取っちゃって      おおう

……」

後ろからなのは声が聞こえたので振り返った瞬間、真司の動きが止まった。

目に入ったのは、もともと端正な顔つきをしている少女達が、綺麗なドレスを身にまとっている姿。

たら〜と、鼻から口に何かが垂れる。

「真司、鼻血出てるよ」

「うえ！？あ、いや、これはその……」

フェイトの指摘で顔を真っ赤にした真司は、あわててティッシュを取り出して鼻を押さえる。

「あはは、真司君つぶやな〜」

そんな彼の様子を見てはやてが面白そうにそう言う。一応真司の方が年上なのだが、彼女が彼をからかったりするのはよくあることだ。

「だ、だってさ、3人ともあんまり綺麗だから、思わず見とれちゃって……俺の体は正直なんだよ」

「……なんか、そうストレートに言われるとちょっと照れてまうな」

「にゃはは……ありがとう」

「……真司も、似合ってるよ」

が、今回は真司の無意識なカウンターが決まったらしい。はやてもなのはもフェイトも、彼氏などというものは持ったことがないため、こついった言葉は効果てきめんなのだ。

しばらく後、4人は二手に分かれ、オークションの警備を始める。  
真司はフェイトとともにあちらこちらを徘徊中だ。

「もう、六課の生活には慣れた？」

「ああ、訓練の方も大変だけど充実してるし、みんなとも仲良くやっていけてると思うし、いまのところは問題ないよ」

真司の返答を聞いて、フェイトは安心する。新しい仲間が、この場所に順調に溶け込んでいるようだ。

「シグナムの指導ってどんな感じなの？」

「鬼だけど、丁寧に教えてくれることは確かだなあ。……たまーに

めちゃくちゃな根性論を叩きだしてくることがあるけど」

「そうなんだ、あはは……（それってもしかして……）」

先日、はやてが笑みを浮かべてシグナムに渡していた『熱血！男の鍛え方とは！』とかいうタイトルの本を思い出し、苦笑いするフェイト。

今だからわかる。あの時のはやての笑みは『黒』だった。

「あ、そうそう。おとといはザフィーラと一緒に朝まで飲み明かしたんだよ。男同士、すっかり意気投合しちゃってさ。ザフィーラは二日酔いしちゃったみたいだけど」

「昨日ザフィーラが気持ち悪そうにしてたのはそれが原因だったんだね……」

どつりで理由を聞いてもあいまいな返事しかなかったわけだ。酒を飲みすぎたなどとは恥ずかしくて言えなかったのだろう。

というか、真司はいつの間にザフィーラが人間の姿になれると知ったのだろうとフェイトは疑問を覚える。

「それにしても、エリオとキャロって仲いいよな。将来結婚しちゃったりして」

「それは私も思っな。本当にいつも一緒って感じだよな」

楽しそうな表情で語る真司につられて、フェイトも自然と笑顔になる。

普段、真司はフォワード陣と一緒に食事をとったりしているため、フェイトはあまり彼と話す機会がなかった。一対一で話したのは、今日が初めてだ。

それで、改めて感じたことがある。それは、真司が本当に気さくだということだ。これなら、10日ほどでみんなと仲良くなっているのも当然かもしれない。

コミュニケーションがあまり得意ではないフェイトとしては、城戸真司という人間のすごさを見たような感じがしたのだった。



ホテルの外の警備に当たっているティアナ・ランスターは、機動六課の人間のことを考えていた。

高町なのはは、時空管理局のエース・オブ・エースの異名を持つ実力者。フェイト・T・ハラウンは、魔導師としての実力もさることながら、執務官としての仕事も上手にこなしている。八神はやては、SSランクの上、4人の守護騎士までも従えている。

自分と同じフォワード陣に目を向けてみると、スバル・ナカジマは訓練校を首席で卒業。エリオ・モンディアルは幼いにも関わらず陸戦Bランクで、キャロ・ル・ルシエは竜を操ることができるレアスキルを持っている。

そして、少し前にやってきた、次元漂流者の城戸真司。

謎の道具で『仮面ライダー龍騎』なるものに変身し、戦闘2回目にもかかわらずシグナムと模擬戦で引き分けるほどの実力の持ち主。

しかも、ひとりで異世界に迷い込むなんて心細いはずなのに、この10日でどんどん六課のメンバーと親交を深めている。

自分を含むフォワードのメンバーとはよく一緒にいて話している。なのはとは、よく喫茶店とか料理とかの話をしている。はやてにはよくからかわれているようだが、それも仲がいい証だろう。

シグナムとはいつも訓練をしてもらっていることもあって会話が多く、その鬼訓練によってできる傷を治療してもらう関係でシャマルともよく会うつらしい。ヴィータとはこの前なぜかアイスクリームを取り合って大乱闘を繰り広げていたし、ザフィーラとも一緒に酒を飲む仲のようだ。

なぜこんなに詳しいのかというと、スバル達がそういう情報をたくさん持ってくるからだ。なので、嫌でも耳に入ってしまう。

そついうわけで、ティアナは真司に他の人にはない何かを感じてい

た。普段は馬鹿っぽい言動が目立つのに、戦闘になると実力は確かなのだ。

ここまで考えて、気づく。

結局、何も取り柄がないのは自分だけなのだ、と。

「（……でも、そんなこと関係ない。私は今まで通り、私の……兄さんの力を証明するだけよ！）」

拳を握りしめる力を強めながら、ティアナはそう強く思うのだった。

## 第七話 ホテル・アグスタ前篇（後書き）

オーズ！オーズ！オーズ！オーズ！

やべえ、映司かつこいいよ映司。真っすぐすぎるよ。4話でもまた熱いセリフが聞けそうです。今回のキックもかつこよかったですし（不発だったけど……）

さて、いよいよホテル・アグスタの話に入りました。ティアナの苦悩、そして彼女を教える立場なのは。真司には何ができるのでしょうか。とりあえず次回は龍騎がいっぱいカード使います。

感想とか評価とかあれば、いつでも気軽に寄せください。ひとつでももらえればヤッフリー！！です。

なんかいつのまにかはやてのキャラが変な方向に進みつつありますが、大丈夫でしょうか……なんて考えながら、次回に続きます。

## 第八話 ホテル・アグスタ後篇

真司達がおしゃべりしながらもホテル・アグスタを警備している時。

そこから少し離れたところに、大柄な男と小さな少女がいた。

少女の周りには、小さな虫が飛び回っていて

さらにその向こうに、たくさんの機械      ガジェットの群れがいた。

戦いが、始まる。

ホテルの周辺に、大量のガジェットが出現した。

外ではすでに戦闘が開始しているという情報が、ホテル内にいる真司達にも入ってくる。

「フェイト、オークションの方は頼む！俺は外に行くから！」

こういう時、助けに行かずにいられないのが城戸真司という人間だ。

「わかった、お願いね！」

フェイトも彼の真剣な眼を見て、強くうなずいた。それを確認して、真司はホテルの外へ駆け出していく。

人目につかないところまで来て、ビルの窓にカードデッキをかざす。

「変身！」

いつものポーズを取ってからデッキをベルトに差し込み、真司はその姿を龍騎へと変える。

「っしゃあ！」

向こうを見ると、すでにスバルとティアナがガジェットと交戦中だ。

> S W O R D   V E N T <

ドラグセイバーを構えながら、真司はそこへ向かって一直線に走る。

「シグナムから教わった剣技、見せてやる！」

「だりゃあっ!!」

大きなかけ声とともに戦いに入ってきた真司を見たティアナは、彼の動きが以前よりよくなっていることに気づく。

流麗な、それでいて激しさを持つ剣の扱い方は、まさにシグナムのそれと非常に似ている。確実に、レベルアップしているのだ。

「（っ！弱気になるな！私はただ、力を証明するだけ………！）」

頭の中の雑念を振り払い、ティアナはクロスミラージュのカートリッジをいくつも消費し、それを構える。

それは無謀な行為で、通信でなのはから制止の言葉が入ってくるが、ティアナは止めようとはしない。

「クロスファイヤー・シュート!!」

クロスミラージュから大量の弾丸が撃ちだされ、狙い澄ましたよう



に次々とガジェットを破壊していく。

だが。

一発だけ弾道が逸れ、真つすぐにウイングロードの上を走るスバルへ向かつて突き進む。

「え……………？」

スバルはティアナに背を向けていたため、それに反応しきれない。

さらに援護に駆けつけたヴィータが弾丸を弾き飛ばそうとするが、それも間に合わない。

「くそっ……………！！」

『あの時と同じか』と、仲間を助けられない自分のふがいなさをヴィータが痛感した時。

>STRANGE VENT<

> A C C E L   V E N T <

「ハアッ!」

その場にいた全員が、自分の目を疑った                      城戸真司を除いては。

「大丈夫か、スバル!」

電子音が2回聞こえてから、地上にいたはずの真司が空中のウイングロード上のスバルのところに現れ、弾丸をはじき返すまで、まさに一瞬の出来事だった。

今しがた真司が使用したのは、『ストレンジベント』というカードだ。これは特殊なカードで、使うとその場に最も適したカードに変化し、その効果を発揮するというものである。

今回は、空中のスバルにまで弾丸より先にたどり着くためのカード  
一瞬だけの超高速移動を可能にする『アクセルベント』に変化したというわけだ。

まだ隠されていた龍騎の力を見たヴィータは少しの間呆気にとられ

ていたが、やがて我を取り戻し、怒りをあらわにする。

「ティアナ、この馬鹿」

だが、真司が彼女の前に手をかざし、制止のポーズを取ったことで、ヴィータは思わず言葉を途中で引っ込める。

「今は叱ってる場合じゃない。もう向こうからガジェットがどんどんやって来てる」

迫りくる敵の方を見ながら、静かに言う真司。仮面に覆われたその顔は、きつといつもの馬鹿面からは想像できないものになっているのだろうとヴィータは感じる。

ちらつとティアナの方を見ると、彼女は手を小刻みに震わせていた。今、それにわざわざ追い討ちをかける必要もないだろう。

「……ああ、そうだな。言い忘れてたけど、スバルを助けてくれてありがとうな」

「ありがとうございます！」

「どういたしまして」

ヴィータとスバルが礼を言うのに対し、大したことではないというふうに軽く返す真司。彼は続いて、彼女達にある提案をする。

「みんな、できるだけガジェットを一箇所に固めるように戦ってくれないかな？」

地上のティアナにも聞こえるよう、大きな声で真司はそう言った。

「なんか策があるのか？」

「まあ、ちょっと取っておきがね。それで、頼める？」

「……まだ隠し技があんのかよ」

龍騎の引き出しの深さに驚くやため息をつくやらした後、ヴィータはガジェットの方を見据える。

「スバル、ティアナ！真司の言った通り、ガジェットを一箇所に集中させろ！いいな！」

「はい！」

「……はい」

ヴィータの命令にスバルが反応し、1テンポ遅れてティアナも返事をして動き始める。それを見て、真司とヴィータもガジェットの群れに向かっていく。

> GUARD VENT <

「おりゃああ！」

ドラグシールドを身につけ、ガジェットの反撃を受けながらも真司は強引にそれらを決まった地点に追い込んでいく。精神的に危うい状態のティアナの負担をできるだけ減らすためにも、この作戦を成功させる必要がある。

他の皆も次々とガジェットを追い詰めていき、やがてガジェットがぎゅうぎゅうひしめき合う光景が出来上がった。

「っしゃあ、行くぜ！」

今だ、と思った真司は、デッキから1枚のカードを取りだす。

カードに描かれているのは、デッキと同じ龍の紋章。

その『龍騎最大の切り札』を、ドラグバイザーに挿入する。

>FINAL VENT<

電子音が鳴り響いた瞬間。

「ウオオオオオオン!!!!」

「っ！な、なんだあれは!!」

ヴィータを始め、スバルもティアナも息をのむ。彼女達を視線の先にあるのは 巨大な紅の龍が、ホテル・アグスタの窓から雄たけびを上げて飛び出す姿だった。

その龍 ドラグレッダーは真司のところまで移動し、彼の周りを包むように回り始める。

「はああああ………!!」

それに応じるように、真司も独特のポーズを取りながら力を集中させていく。

「たあっ!!」

真司は空高く飛びあがり、ドラグレッダーが飛びまわる中空を回転し、そして蹴りの姿勢になる。

「はあああああ!!」

狙いはもちろんガジェットの群れ。向こうもレーザーで反撃してくるが、勢いのついた真司とドラグレッダーは止まらない。

「だあああああ!!」

巨大な爆発音とともに、龍騎の必殺技『ドラゴンライダーキック』が、すべてのガジェットを破壊した。

「…す、すっい………」

「……あれが、真司さんの力………」

そのあまりの威力に、スバルとティアナは放心状態だ。

「おい真司！今の龍は一体」

ただひとり、ヴィータだけが変身を解除した真司に詰め寄る。ドラグレッダーは、ドラゴンライダーキックの直後に消えてしまった。

真司はその問いにうーんと数秒唸った後、

「ドラグレッダーっていう、俺の相棒みたいなものかな」

と答えた。



その後、皆が今回の事件の後始末をしている中、ティアナはひとりベンチに座ってうつむいていた。

ぺたっ

「つつ!？」

そうしていたとき、突然頬にヒヤツとした冷たい感覚が伝わってくる。

「おっす。炭酸とコーヒー、どっちがいい？」

顔を上げると、笑いながらそう尋ねてくる真司の姿があった。右手には炭酸、左手にはコーヒー。おそらく今の冷たい感覚は炭酸を頬に当てられたのだろう。

「……じゃあ、コーヒーで」

「おっ、大人だな」

そう言いながらコーヒーを渡し、ティアナの隣に座る真司。

「ビールもいいけど、炭酸にも違った味わいがあるよなあ」

「……私、未成年なんですけど」

「あ、そうだった。ごめんごめん」

飲酒の話を振ってしまったことを謝る真司。

しかし、その表情は急に真剣なものに変わる。

「ティアナ……何かあったのか？」

「……どうしてそんなこと聞くんですか？」

コーヒーを飲むのを止め、ティアナはそう聞き返す。

「いや、なんていうか、ティアナっていつも落ち着いてるのに、今日はなんか焦ってたかなって思ってたさ。何か理由があるんじゃないか？」

ティアナの方を真つすぐ見て話す真司。対してティアナは、彼の顔を見ようとせず、ずっと前を向いている。

「あつ、もちろん、話したくなきゃ話さなくていいんだ。誰にだって秘密のひとつや2つくらいあるし」

真司が付け加えるように言う。

「…………私の兄は、フェイト隊長と同じ執務官でした」

しかし、ティアナはぽつりぽつりと昔話を始めた。何となく、答えない気になれなかったのだ。

「私は、そんな兄が誇りで、尊敬してました。でも……ある時兄さんは、違法魔導師を取り逃がして、殺されてしまったんです」

話しているうちに過去を思い出し、自然と目に涙がにじんでいく。

「そして、上層部は兄さんを『役立たず』と言った……だから、私は証明したいんです。私が強くなつて、執務官になつて、兄さんは役立たずなんかじゃなかつたつて！」

真司は、黙つてその話を聞いていた。そして、ティアナが言葉を終えても何も言わなかった。

しばらくの間、静寂が訪れる。

「……私、みんなのところに行きます」

コーヒーを飲み終えたティアナは、そう言つてベンチから腰を上げ、去つて行った。

「……………」

真司は、ティアナが去った後もベンチに座ったままだった。炭酸の量は全く減っていない。

ティアナに、かける言葉が見つからなかった。彼女が抱えているものは、およそ自分が経験したこともない、少女が背負うにはあまりに大きすぎるもので。

「…どうすればいいんだ？」

真司の小さなつぶやきは、誰にも聞かれることなく虚空に消えていく。

自分は、彼女に何ができるのだろうか？

## 第八話 ホテル・アグスタ後篇（後書き）

普通の世界で、普通に生きてきた真司が、ティアナの普通でない過去を知る。龍騎本編の真司なら何か言えたのかもしれないが、この真司は最後の平和な世界の真司なので、こんな暗い話と向き合うのは初めてなのです。だから戸惑う結果になりました。

話は変わって戦闘の方ですが、今回初めてストレンジベント、そしてファイナルベントを使用。一部のメンバーにドラグレッダーの姿が明らかになりました。

アクセルベントはオルタナティブしか使ってませんでした、たぶんイケると思って使わせました。てかストレンジベントってなかなかチートなカードですよ…

次回はいよいよ模擬戦！……ではなく、真司がその前にいろいろ頑張ってみる話です。次回の彼のバカに期待（え

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。目標は仮面ライダー龍騎でタグ検索した時にトップに来ることです！（できるかなあ……

では、また次回。

## 第九話 俺に出来ること

「よし、午前の訓練はここまでだ。昼食にしよう」

ホテル・アグスタでの戦闘の翌日。いつものように、真司はシグナムの訓練を受けていた。

「あ、シグナム。フォワード達の訓練も、そろそろ一段落ついているかな？」

シグナムが昼食の時間を告げた後、真司は彼女にそう尋ねる。

「だと思うが……どうかしたのか？」

「うん。ちょっとしたのはに話があっただけ」

「なのは、ちょっといいかな」

「あ、真司君。何かな？」

割と簡単に通路でなのはを発見した真司は、彼女を呼び止める。用件はもちろん。

「ティアナのことなんだけどさ。訓練の様子とか、どんな感じ？」

昨日聞いた彼女の過去。真司はそのことをずっと考えていたのだ。

「うん？ティアナ？どんな感じって、ちゃんと真面目に頑張ってるよ」



それがどうかしたの、という表情のなのは。いまいち真司の言葉の意図がつかめないようだ。

「本当？なんか不満そうにしてるとか、ない？」

念を押して真剣に聞くと、なのは何かを思い出したようだ。

「……そういえば、最近たまに訓練中に暗い顔する時があるの。特に失敗したとかそういうわけでもないんだけど……」

やっぱりか、と真司は感じる。昨日のミスから考えても間違いない。

「多分、ティアナは焦ってるんだ」

「…焦ってる？」

「ああ。早く強くなりたいって、そう思ってるんだ」

真司の話を聞いて、なのはうーんと数秒唸る。

「……ひょっとして、私が基礎の分野しか教えていないからかな」

「え、そうなの？」

魔法のことについてはまったくの素人である真司は、当然そのあたりのことはよくわからない。

「うん。少し、基礎を固める期間が長いって感じてるのかもしれない」

答えらしきものに行きついたらしいなのは。真司も何となく理解し、少しほっとする。

「だったら、そろそろ応用を」

「それは無理だよ」

その瞬間、なのはの雰囲気が変わった。今までとは明らかに違う、まるで何か暗いものにとらわれているかのような……

「大きな怪我をしないように、もっとちゃんと基礎を固めないうちは、駄目だよ」

なのは言葉から、有無を言わさぬものが伝わってくる。真司の知っている温和な彼女からは想像もできない、はっきりとした拒絶だ。

「なのは……」

「……食堂に行こうか。今日は、私と食べる？」

「あ、ああ……」

話を無理やり切り上げられ、真司はそれ以上尋ねることができなかつた。

数時間経ち、すっかり日も暮れたころ。

「あれは……」

たまたま通りがかった真司が見たのは、訓練が終わった後、ティアナがひとり残って居残り特訓をしている姿。

「おい、ティアナ」

少し大きめの声を出すと、向こうもこちらの存在に気づいたようで、ちらりと真司の方を見る。

そのまま彼女の方へ歩み寄ると、真司はティアナの息遣いが激しく乱れているのに気づく。素人目にも無理をしているのがわかる。

「ひょっとして、毎日残って訓練してるのか？」

「……ええ、まあ」

にべもなく答えるティアナ。当然、なのはに許可を取っているわけではないのだろう。

「……あんまり無理するなよ。怪我しちゃうかもしれないから」

軽く諭すように言った真司だが、ティアナはそれを聞いてうつむく。

「……強い真司さんには、私の気持ちなんてわかりませんよ」

「へ？おいおい、俺が強いって……それは龍騎のカードデッキがあるからで」

「そうだとしても、龍騎の力を手に入れて、それを使いこなしていること自体がすごいんですよ。違いますか？」

語調を強めて言うティアナ。言葉の陰には苛立ちが見える。

「そ、それは……………」

「私はただの凡人なんです。だから、多少無理をしたって、努力しないと駄目なんですよ」

真司を睨むようにして、ティアナは強く捲し立てる。

「…………それは、そうかもしれないけど。でも、お前が無理してるのを見ると俺は心配だし、あ、でも別にお前の夢を追う気持ちを否定してるわけじゃなくて、その、あの……………」

しどろもどろに気持ちを伝えようとする真司だが、うまく言葉にならない。よく考えれば当たり前のことだ。

「何か言うつもりなら、せめて考えを整理してからにしてください」

そもそも、気持ちがまとまっていないのだから。

ティアナは立ちあがると、真司の方を見ないですたすたと歩き去って行った。

「はあ……………」

ふらふらと歩き、気がつけば自動販売機の前。折角だから何か飲もうかと思った真司は、とりあえずお金を入れる。

が、再び思考の迷宮に入りこんでしまい、しばしそこに立ちつくす。

「……………俺は……………」

「真司？」

「うわっ」

急に声をかけられたので振り返ると、そこにはフェイトがいた。

そこでようやく、真司は自分が自販機を使う人の邪魔になっていることに気づく。

「ああっ、ごめんごめん！ちょっとぼーっとしてたさ」

あわててそう言いながら、テキトーにボタンを押す真司。

「……え、真司、それ飲むの？」

それを見て、フェイトは眉をひそめる。

「へ？」

何を押したのだろうか、真司は出てきた缶を拾い上げる。そこに書かれていた文字は

『いちごおでん』



「（うつわー、なんだこれ。嫌な予感しかしないぞ……）」

とはいえ、このまま捨てるのももったいない気がするので、とりあえずベンチに座り、缶を開ける。

「本当に飲むの？」

そうしていると、コーヒーを買ったフェイトが心配そうにこちらをのぞきこんでくる。彼女のこの様子、おそらく結構な評判となっているのだろう。

「ま、まあね。ちょっと冒険してみようかな？みたいな」

まあそれでも、飲めないことはないだろうと、真司は缶を傾け口に中身を流し込んだ

まず、どろりとした重たい感触が舌を包み込む。そして、メインのいちご、そして味噌、じゃがいも、こんにゃく、がんもどきなどなどが複雑に混ざり合った非常に濃厚な味が口の中全体に広がっていく

「ぶーーーー！！！」

結論。思わず吹き出すほどにまずい。

「ゴホッ、ガホッ」

「だ、大丈夫!？」

せき込む真司を見て心配するフェイト。あまりの反応に焦っているようだ。

「と、とりあえず、水……」

一気に体力を奪われた体を引きずり、500mlペットボトル入りの水を買う真司。まさにいちごおでんは無駄遣いとなってしまった。

ごくごくと水を飲み、ぷはーと息をつく。

「ふう、やっと落ち着いた」

「……そっか、よかった」

そんな真司の様子を見て、フェイトはほっと胸をなでおろす。

それにしても、どうしてあんなまずいものが売っているんだと真司は考えるが、よく考えればここはいろんな世界の人が集まる世界、ああいうのを好む人もいるのかもしれないと思い直した。

いちごおでんについての思考が終わると、再びティアナ、そしてなのはのことが思い起こされ、真司は深く考え込む。

「はあ………」

「真司、何か悩みごとでもあるの?」

「え?……どうしてわかるの?」

そんなにわかりやすい表情をしていたらどうかと考える真司。

「……うーん、普段元気だから、ちょっとわかりやすいのかもしれない」

「……そんなもんかなあ」

「それで、何を悩んでいるの？」

フェイトがこちらを覗き込んでくる。単純に興味があるのか、それとも心配してくれているのか。

「……実はさ」

いずれにせよ、誰かに話してもいいかなと思った真司は、先ほどこら考え込んでいる事柄について語った。

「……そう。そんなことになってたの」

真司の話（一応ティアナの居残り特訓は秘密にしておいた）を聞いて、フェイトはそうつぶやく。そして、真司は続いて自分の本心を話し始めた。

「少しでも早く夢を叶えるために頑張ろうとするティアナの気持ちも、まだ子供なフォワードのみんなに怪我をさせないために基礎を

重視するのは気持ちも、どっちもなんとなくわかるんだよ。…だから、どっちかの味方するってわけにもいなくて」

それぞれの考えることの奥には、きっと譲れない想いが潜んでいるのだろう。ティアナは兄のことだし、なのはについても何かあるということとは先ほどの彼女の様子でわかる。

そこまで言って、真司は再び大きくため息をつく。

「……とかなんとか考えてるけど、さっきティアナにはうっとうしがられちゃったし……俺、おせっかいなのかな？」

ひよつとすると、これは自分なんか介入する問題ではないのか。そんな思いが、真司の頭をかすめていた時。

「……真司は、それでいいんじゃないかな」

「え？」

いきなり口を開いたフェイトの言葉に、真司は一瞬戸惑う。

「私は、真司のそういつとこ、真司らしくていいと思うけどな。だって、それ、みんなに出来ることじゃないから」

フェイトはそのまま、真司に優しく語りかける。

「何事にも首突っ込まないと、気が済まないんでしょ？」

それは、真司が六課に協力することを願い出た時に言ったセリフ。

フェイトの言葉を聞いて、真司の心が固まっていく。

「（……そうだ、そうだよ。もともと考えるのは得意じゃないんだ）」

もちろん、考えることも大切だ。だけど、行動が伴わなければ意味がない。

「（とにかく進む！そうしないと、何も変わりはないんだ！）」

今までの人生だって、そうやって生きてきたのだ。ちょっと暗い話を聞いたからって、それを変える必要なんてこれっぽっちもない。

「そうと決まれば行動あるのみ！ありがとうフェイト、俺ティアナの部屋に行ってくるよ！」

勢いよく立ちあがり、水を一気に飲み干してゴミ箱に捨て、そのままダッシュする真司。

「あつ、真司、ちょっと！」

あわてた様子でフェイトが呼びとめる。

「え、なに？」

「ティアナの部屋は逆方向だよ！」

「ありやうや〜」

どうしてこう肝心なところでミスをするのかと自分で自分に苦笑いしながら、真司は再びフェイトの前まで戻り、

「んじゃ、今度こそ行ってきます！」

今度は正しい方向へ走って行った。

残ったフェイトは、コーヒーをゆっくり飲みながらつぶやく。

「少しおっちょこちょいだけど……真っすぐだね、真司は」

その顔には、小さな笑みが浮かんでいた。



## 第九話 俺に出来ること（後書き）

いちごおでんの元ネタはなのでもライダーでもありません。とあるラノベからの引用です。アニメ二期やるのはうれしいけど、ゲームは対戦じゃなくてギャルゲ風にしてほしいなあ……っと、脱線しましたね。

悩む真司はフェイトと会話。そして吹っ切れました。本編でも編集長をはじめとして真司は周りに助けられて成長していったので、やっぱり今回もこんな感じになりました。

感想や評価などあれば、いつでもお寄せください。

では、また次回。

## 第十話 ティアナと真司と始まる模擬戦

コンコン

「ティアナ、いるか？城戸だけど」

訓練の疲れを癒すため、すぐにも眠ろうと思っていたティアナは、自分の部屋のドアがノックされる音を聞く。

まだ何か言うつもりなのかと、ティアナはけだるそうに立ち上がってドアに向かう。たまった疲労も手伝って、かなりイライラしている状態だ。

「…何でしょうか、大した用じゃないんだったら」

そう言いながらドアを開けるや否や。

「ティアナ！一緒に特訓しよう！」

「……………は？」

いきなりの真司の言葉に面喰らうティアナ。真司はそれに構わず話し続ける。

「ほら、俺魔法に関して全然知らないど素人だから、色々知りたくて。それに、ティアナも他の人の意見もあつた方がいいんじゃないかな〜って」

「ちょ、ちょっと……いきなり捲し立てないでください」

「というか、ひとりより2人の方がいいに決まってるしな！」

言葉を返そうとしたティアナだが、真司が笑顔でそう言ったのを聞いて、はっとしたように押し黙ってしまう。

「……………兄さん」

「ん？何か言つた？」

「っ！いい、いいえ、何も言ってますん。…そうですね、確かに真司さんみたいなタイプの人の意見は欲しいかもしれません。だから…いいですよ。明日からは、一緒に残って訓練しましょう」

一瞬焦ったティアナだが、何とか調子を戻して真司に返事をした。実際、自分とは違う接近戦タイプの人間の考え方も参考になるかもしれない。

「本当！？よっしゃ！ありがとな、じゃあお休み」

ティアナのOKの答えをもらってガッツポーズを取った真司は、挨拶をすると元気よく帰って行った。

その後ろ姿をしばらく眺めてから、ティアナは部屋のドアを閉め、ベッドに倒れ込む。

「……あゝもう、なんで重なるのよ！全然違うじゃない！」

うつぶせになって枕に向かって言葉をぶつける。彼女の心は戸惑っていた。

真司が見せる笑顔が、まれに兄のティーダの笑顔に似ていると感じてしまうのだ。もちろん、彼ら2人の顔が似ているわけではない。ただ、何となく笑顔の雰囲気似通っているというか

ティードと真司は全く違う人間だ。ティードの方は、ティアナが尊敬するような真面目な人間だ。それに対して真司は、よくドジなことをするし、ひょうきんな性格の持ち主である。

それなのに、重なってしまう。

「……………ほんとに、変な人」

仰向けになり、寝る姿勢に入ったティアナは、最後に天井に向かってそうつぶやいた。

「へえ、幻術って厄介だな。全然見切れないや。気配とかでわかるものかな？」

「よほど熟練した魔導師なら可能かもしれませんが、そう簡単にはいかないでしょうね」

翌日。約束通り、真司はシグナムにしごいてもらった後、ティアナと居残り訓練を行っている。

「やっぱり、俺みたいな人間に一番困る攻め方は」

「……なるほど、そういう考え方もありましたか」

しばらく動き、その後色々話し合いを行う。魔法の詳しい効果についてや、ティアナの動き方についてなど、お互いが思ったことをこ

と細かに言い合う。

幻術など、わからないことがたくさんある真司にとっては当然プラ

スになるし、ティアナにとっても真司の意見は役に立っているようだ。意外と素人による考えというのが功を奏しているのかもしれない。

「ですから……」

「（…よし、いい感じだ）」

ティアナの言葉に耳を傾けながら、真司は心の中で喜ぶ。

話し合いに時間を割いているため、疲れた体をあまり動かさずに済んでいる。その証拠に、真司もティアナも特に息遣いが乱れているということはない。

ティアナにできるだけ無理をさせない、それが真司の目的だ。彼女があくまで居残り訓練をやめるつもりがないなら、せめて自分が加わって見ていよう、そう考えて昨日あんなことを言っただけだ。

「…真司さん、ちゃんと聞いてますか？」

「ん、ああ、もちろん」

「そうですね？今目が明後日の方向に向いてましたけど」

「あ、あはは……すみません」

こんな感じで訓練および話し合いは続いていった。

「……あちゃー。やつちゃったな」



「……思わず話に熱中しすぎましたね」

食堂の中に入り、2人は困ったため息をつく。時間が経つのも忘れて話しあっていた結果、気がつけば食堂のおばちゃん達の勤務時間を越えてしまっていたのだ。

くくく

「お、ティアナ、お腹の虫が鳴ってるぞ」

「……っ！？」と、とりあえず、コンビニで何か買いましょう、そうしましょう」

真司に恥ずかしいことを指摘され、赤面するティアナ。顔を見られないようにそっぽを向いている。

「それなら、悪いけど俺のぶんもテキトーに買ってきてくれ。その間にちよつと厨房拝借してるから」

「え？真司さん何か作るんですか？」

「今度使おうと思った食材が部屋にあるんだ。折角だからティアナにもおすそわけ。だから、ちょっと少なめに買って来て欲しいな」

首をかしげるティアナに説明する真司。料理はある分野だけなら自信があるのだ。

「それで、その作るものは……」

「それは後のお楽しみ」

そうはぐらかして、真司は厨房に入った。ティアナもコンビニへと向かう。

「完成！城戸真司特製餃子だ！」

「…餃子ですか」

「あれ？もしかして嫌いだった？」

「いえ、別に好きでも嫌いでもありません」

コンビニで弁当を買って戻ってきたティアナがしばらく待った後見たのは、自信満々に真司が持ってきた餃子だった。まあ、短時間でそう手の込んだものは作れないので、この辺りが限界だろう。

「さ、食べてみてよ」

箸を手渡し、にこにこ笑って真司が言う。こういう笑顔には、兄の影はさっぱりない。

「…ありがとうございます。じゃあひとつだけ」

皿に盛ってある6個の餃子のうちひとつを箸でつかみ、口に運ぶティアナ。

「……………!!」

だが、なんとという気もなく食べたそれは、予想をはるかに超える

「……………おいしい」

とんでもないうまさを持っていた。なんとというかもう、空腹なのも相重なって、表現できないほどおいしい。

「すごくおいしいです、この餃子!」

「だろ? 餃子には自信あるんだよ俺。どんどん食べていいからな!」

ひとつだけという言葉はどこへやら、ティアナはそのまま次の餃子へ箸を伸ばす。真司も自分の料理をおいしいと言ってもらえて喜んでいるようだ。

ぱくぱくぱく。

「……………あ」

気がついたら、餃子は残り1個。すっかり5個も食べてしまったことを申し訳なく思うティアナ。

「じ、ごめんなさい。つい……………」

「いいんだよ、むしろそれだけ喜んで食べてもらえたんならこっちもうれしいから」

真司は特に気にも留めず、笑顔で許してくれた。

「……………それに、ティアナの見たことない顔もお目にかかれたし」

「え……………？」

真司の放った言葉に困惑するティアナ。

「普段俺より大人びてるティアナも、腹の虫鳴らして恥ずかしがったり、うまいもん思わず夢中になったり、普通のかわいい女の子なんだって」

「…………ふえ？…な、な何を言ってるんですか！私帰ります、ごちそうさまでした！」

なんで顔を赤くしてるんだと自分に叱っても、一向に火照ったままだ。なので、このままとつとと帰ることにしたティアナは立ち上がり、食堂を足早に去ろうとする。

「あ、ティアナ！」

その時、真司が彼女を呼び止める。

「これは真面目な話なんだけど、俺、ティアナは絶対凄いと思うよ。だって、幻術とか使って、いつも自分にできることを冷静に考えられるんだから！」

「……………」

その言葉には何も返さず、ティアナはそのまま食堂から出ていった。

その後も2人の居残り訓練は続いて、数日後、スバルとティアナの模擬戦が行われた。相手は、普段指導しているのはだ。

真司は、フェイトやヴィータ、エリオ、キャロとその様子を観戦していたのだが。

「……まずい！」

ティアナとスバルが無茶して突っ込んだ瞬間、なのはの雰囲気が変わった。それは、先日真司が見た『あの』なのはと同じだ。

「真司さん！？」

エリオの呼びとめる声も聞かずに、真司はその辺の建物の窓に向かってデッキを構える。

「変身！」

「誰も傷ついて欲しくないから！誰も死なせたくないから！私は…強くなりたいんです…！」

「……少し、頭冷やそうか」

涙を流して叫びながらクロスミラージュを構えるティアナに向けて、右手に魔力を集中させるなのは。



「クロスファイヤーシュート」

無表情で放たれた魔力弾は、真つすぐティアナに向かって飛んで行き

「うおおおおー!!」

その瞬間、龍騎に変身した真司がティアナに飛びつき、魔力弾を回避した。そのままティアナを守るように背中を着地する真司を見て、バインドで縛られた状態のスバルが駆け寄ってくる。

「ティアア！」

「スバル、ティアナと一緒に離れてろ」

バインドを引きちぎった真司はそれだけ言うと、こちらを冷たい目で見つめているのはの方に向き直る。

「真司君……私が指導してたんだよ、邪魔しないでくれるかな？」

その目は、どこまでも暗くて、やはり何かあったのだと真司は確信を得る。

「……俺は」

ティアナとなのは。2人の考えは違っているけど、どちらの気持ちも真司には理解できる。だから、はっきりした答えは全然出ていないけれど。

「こんなやり方、認めるわけにはいかない」

だけど、これだけは言える。ただ傷つけるだけじゃ、絶対に駄目だ。互いに歩み寄ろうともしないうちに、こんなこととしていいはずがない。

真司は、そう強く感じていた。

「……真司君も、少し頭冷やそうか」

なのはが戦闘態勢に入る。向こうは空を飛べる上、遠距離攻撃が主流。普通に戦えば真司が圧倒的に不利だ。

「……人相手に、龍騎の力を本気で使いたくはないけど……」

だが、真司には1枚、まだ使っていないカードがある。

> A D V E N T <

「それでも、この勝負だけは負けられないんだ」

「ウオオオオオオオオン！！！」

息をのんで真司となのはのやり取りを見つめていたフェイト達は、突如ビルの窓から出現した龍に驚愕する。

「な、なんだあれ！？」

「フリードよりも大きい……」

エリオとキャラが言葉を発し、フェイトが無言で紅の龍に目を奪われている中、かつてそれを見たことのあるヴィータだけは多少落着いた様子でいる。

「……ドラグレッダー。真司の相棒みたいなもんだとさ」

ドラグレッダーは空を飛び、真司の後ろに陣どり、なのはを睨みつける。

「ドラグ、レッダー……」

真司　　龍騎の姿を見て、フェイトは小さくつぶやいた。

「…まさに、龍を従えし騎士」

## 第十話 ティアナと真司と始まる模擬戦（後書き）

ああ、ついに始まっちゃいましたよ模擬戦。真司も頑張りましたが、魔王降臨を避けることはできませんでした。でも、その努力が無駄だというわけでは決してなく、後々生きてきます。

さて、次はいよいよ真司VSなのは。ついにアドベントを使用した真司に勝機はあるのか！？

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第十一話 龍騎VSエースオブエース（前書き）

スランプの中何とか投稿……激しく不安です。

## 第十一話 龍騎VSエースオブエース

街中を模した模擬戦場の中、互いに向き合う二つの人影。

時空漂流者・仮面ライダー龍騎と、時空管理局のエースオブエース・高町なのは。

空には、龍騎が契約している巨大龍・ドラグレッダー。

どちらが、いつ動くのか。どうであれ、ひとたび場が動けば熾烈な戦闘が始まるのは間違いない。

「…ひょつとして、真司さんとなのはさん、このまま戦うつもりなんでしょうか……？」

緊張した面持ちでエリオが周りに尋ねる。ただの模擬戦だったはずが、とんでもないことになりそうなのだ。

「馬鹿野郎、そんなことさせるか！あたしが止めてくる！」

そう言って模擬戦場に向かおうとするヴィータ。

だが。

「っ！？何すんだよフェイト！」

彼女の行く道を手で遮るフェイト。ヴィータが怒鳴るが、フェイトも真剣な表情で彼女の顔を見つめ返す。

「……今は、真司に任せてみようよ」

「はあ！？何馬鹿なこと言ってんだ、大体あいつはなのはの過去を知らねえんだろ！？」

「多分、そうだね」

「だったら」

「でも」

普段おとなしいフェイトの強い調子の言葉に、ヴィータは思わず黙ってしまう。



「何かあったってことくらいは、わかってると思う。それに……真司は一生懸命だった。あの事故に責任を感じて手を出そうとしなかった私達と違って、本気でなのはティアナのこと、何とかしようとしてた。だから……賭けてみたいんだ」

ここ数日、真司がティアナと一緒に訓練している光景を、フェイトは目にしていた。ティアナのことについて話した後、気になったのでこっそり彼の様子をうかがっていたのだ。

出会ってそれほど経っていない人間に、そこまでする人間はそうそういないと思う。

だから、彼の思うとおりに行動させるべきだ。フェイトはそう考えていた。

「……………くそっ、わかったよ」

渋々ながらヴィータが彼女の意見を受け入れた時、模擬戦場に目を向けていたエリオとキャロが声をあげる。

「あっ、真司さんが龍の上に乗った!」

「二人とも、動き始めた……！」

「ドラグレッダー！」

ドラグレッダーに飛び乗った真司が叫んだ瞬間、止まっていた空気が一気に動き出す。

「アクセルシューター」

空中に浮かんだのはは、すぐさま攻めに入ってくる。いくつもの魔力弾が形成され、真司とドラグレッダーを囲むように位置どられる。

「シュート」

先手必勝とばかりに降り注いでくる桃色のエネルギー体。

だが、真司とて無警戒なわけではない。

> GUARD VENT <

真司がドラグシールドを装備する一方、ドラグレッダーは猛スピードで魔力弾の包囲網を突っ切る。

「…ふう、ギリギリか」

ほつとしたようにつぶやく真司。体が大きいドラグレッダーには多少当たってしまったが、さすがはモンスターというべきか、ダメージを受けている様子はない。

「…さすがにこのくらいは平気みたいだね」

品定めするようにこちらを見るなのは。今の攻撃は牽制で、ドラグレッダーの実力を測るためのものだったのだろう。

真司も真司で、これから取るべき行動を思い浮かべる。頭の出来を褒められたことは一度としてないが、それでも今はフル回転させるしかない。

だが、いつまでもボーっとしているわけにもいかない。

「ドラグレッダー、頼むぞ」

「ウオオオオオン！！」

今度は真司の方から仕掛ける。ドラグレッダーの口から火炎弾が何発も発射される。大きさはなのはものといい勝負か、あるいはそれ以上だ。

対してなのはさして焦った様子も見せず、回避行動を取りながら、避けきれないものは、

「オーバルプロテクション」

彼女を包み込むようにして張られたバリアによって防ぐ。必要最低限の魔力しか使用しない。自分の力を過信せず、かといって信じな

いわけでもない。理想的な動きと言って相違ないだろう。

「やば……」

「デイベインシューター」

なのはの流麗な動きに内心びびっていた真司に、不規則な弾丸が襲いかかる。重いドラグシールドを装備したままでは対処が厳しいと判断した真司は、すぐにカードを取り出す。

> S W O R D   V E N T <

「だりやつ！」

あちこちから飛んでくる魔力弾を弾き飛ばす真司。その間にドラグレッダーはなのはに向かつて火炎弾を打ち出すが、なのはの対処も速く、有効打は与えられない。

「す、すごい闘いだ……」

一方、離れた場所で戦況を見守る4人。エリオがつぶやいた言葉に、一同うなずく。

「真司さん、シグナム副隊長と闘ったときよりもずっと……」

「強くなってるな。剣さばきもそうだけど、なのはの攻撃に対する動きに迷いがねえ」

キャラとヴィータが素直に驚く中、フェイトは無言で遠くの真司を見つめる。

先ほどの、デイバインシューターを剣ではね返した場面。なのはが呪文を唱えると、真司は魔力弾が打ち出される前から、すでにカードを1枚取り出していた。

だが、ディバインシューターの不規則に動くという特性を知っていなければ、そのまま盾で防ごうとしたはずだ。つまりそれは、真司がある程度術の知識を頭に入れているということ。

シグナムは剣の訓練をしているだけだから、どこで情報を仕入れたかの答えはひとつ。

「多分、そこまで深くは考えてなかったんだろうけど……」

ティアナが無茶しないように一緒に訓練したことで、自分も大きく成長した。そういうことだろう。

そう考えて、フェイトは小さくうなづく。今はもう、彼女の胸に心配の気持ちはない。

真司は、なのはを止めることができる。

そんな彼女の想いに応えるように、真司は次の瞬間大きく動いた。

「ウオオオオン!!」

「っ!」

ドラグレッダーの今までで最も大きな咆哮を聞き、なのはは身構える。現在の互いの位置は、なのはが地上3m、真司とドラグレッダーがそれより4mほど高い。

瞬間、ドラグレッダーが連続で火炎弾を打ち出す。防御魔法を展開しようとするのはだが

「っ、これは……!?!」

火炎弾は次々と降り注いでくる　　すべてなのはを避けるように。

標的は、彼女の周りの地面、そしてビルの数々。



真司の狙いは、視界を奪うこと。そうなのはが気づいた時には、すでに彼女の周りは土煙に覆われていた。

まんまとはめられた形となったが、相手の姿が見えないのはあちらも同じ。真司が仕掛けた作戦だが、同時になのはにとっても大きなチャンスとなり得る状況。

「（次の一手で、決める）」

レイジングハートを強く握りしめ、なのはは感覚を研ぎ澄ませる。

>STRANGE VENT<

>TRICK VENT<

「っ!!」

砲撃の体勢に入るが、なのははその動きを一度止める。今聞こえてきた電子音は初めてのものだからだ。

「（今までの傾向から考えて、カードの効果はストレートに英語になってるはず！だとすると、ストレンジは…奇妙、トリックは…そのままトリック　　）」

なのはが一瞬思考の海に入ったそのとき。

「うおおっ！！」

土煙の中から人影が飛び出てきた。雄たけびをあげながらその影  
龍騎は、一直線にこちらに走って来て、飛び蹴りの体勢に入る。

一見、どこも変わりがないように見えるが、迎えうつより他に選択肢はない。レイジングハートを迫りくる真司に向け

「ディバイン……バスター！」

大技である砲撃を繰り出した。桃色の光線は、そのまま真司を呑み込んで行く。

「（勝った！）」

だが。

> STRIKE VENT <

「え……………！？」

別の方向から電子音が聞こえたかと思うと、デイバインバスターが捕らえていた真司の姿が塵気楼のように消え失せた。

「だああっ！」

直後、大きなかけ声とともに背後からエネルギーを圧縮した強力な火炎弾が飛んできたのに気づくも、もう遅い。

「プロ」

防御魔法も間に合わず、火炎弾はレイジングハートに直撃、それを十数メートル彼方に吹き飛ばした。

「うつ！」

火炎弾のあおりを受けて尻餅をついたのは、それでもレイジングハートのもとに向かおうとするが。

「っ……………！！！」

その方向には、待ち構えるように空中に浮かんでいる巨大な紅の龍。

後ろを振り向けば、凜として立つ龍の影を纏いし騎士。

「（やられた……………）」

トリックベントは、幻影を作りだすカードだったのだ。その幻影を囷にし、それに向かって放ったデイベインバスターの光によって土煙の中のなのはの位置を掴み、必殺の一撃を放ったということだろう。

すべてを理解し、真司を見上げるなの是对し、彼は

「立てる？」

そう言つて尻餅をついているなのはに右手を差し伸べてきた。

「……………え？ど、どうして…攻撃してこないの？」

そんな真司の意図がつかめず、困惑するなのは。

「…当たり前だろ。俺は君を傷つけるためじゃなくて、君を止めるために戦つたんだ。これ以上は必要ない」

その答えを聞いて、なのはは黙つて真司の顔を見つめる。

「なのはに昔何があつたのか、俺は知らない。そりゃそうだ、まだ会つて半月くらいだもんな。……………だけど、何かとても辛いことがあった、それくらいはわかるさ」

「……………」

「なのはがどうしてティアナ達に基礎しか教えないのか。それにはきつとちゃんとした理由があるんだと思う。でも、まだそのことを話してないんだろう？」

「……………うん」

優しく語りかける真司に、なのはは素直にうなづく。

「だったら、伝えればいいんだよ。なのはの気持ちを伝えて、ティアナの気持ちも伝えてもらって。お互いがお互いの想いを受け入れて。その結果、どうなるかはわからないけど……………これだけは言える。ひとりで背負い込む必要はないんだ。なのはにはフェイトやはやてや、たくさん友達がいる。……………頼りないだろうけど、俺もいる。……………だから、な？」

真司の発する一言一言が、なのはの胸に染みわたり、つつかえていたものが取り除かれるように感じられた。

仮面越しに、彼の笑顔が見えたような気がして。

「……………うん。ありがとう……………」

目から何かが流れ落ちるのを感じながら、なのはも小さく笑い返した。

## 第十一話 龍騎VSエースオブエース（後書き）

苦しみながらも書きあげましたが、いかがだったでしょうか。戦闘描写は苦手で、決してうまく書けたとは思いませんが、とりあえず気持ちはいこめました。

まあ、それはおいといて。何とか真司が勝利、トリックベントによる不意打ちでした。レイジングハートだけを弾き飛ばしたのも、なのはにできるだけ傷をつけないためです。

幻術と言えばティアナの得意技。それも踏まえてこのような展開にしました。特訓の中で彼女に教わったことも活かしたおかげで勝ったので、決して真司ひとりの力によるものではないと、まあそういうことです。

後、複数の方からサバイブについて質問が来ていますが、もちろん出します。ただ、まだ先の話です。出そうなポイントのひとつとしてはこの模擬戦だったでしょうが、リミッターも解除してないなのはにサバイブ使っちゃうと……と思ったので。

次回はいよいよティアナ篇（？）完結。その後はギャグも交えたほのぼの話です。今まで忘れてた真司の特徴も思い出しましたし。

そして「仮面ライダー龍騎」で検索した結果総合評価が一番上に！本当にありがとうございます！

感想や評価などあれば、気軽に寄せください。

では、また次回。

## 第十二話 たいせつなこと（前書き）

なんかこの前からポイントの伸びが異常なんです。が一体どういことなんでしょう……もう400間近だし。お気に入り登録とかしてくださっているみなさん、本当にありがとうございます！



## 第十二話　たいせつなこと

「シャル先生」

医務室に入ったなのは、ベッドの横に置いてある椅子に腰かけているシャルに声をかける。

「なのはちゃん。…ティアナなら、さっきから眠ったままよ」

ベッドの上ですうつと寝息を立てている少女を見つめながら、シャルはそう告げる。

「……………」

「…そんなところに立ってないで、こっちに来たら？コーヒーでも淹れようかしら」

入口のあたりで立ちつくしてなかなか動こうとしないのはに、シャルが優しく呼び掛ける。

「……………」  
「お願いします」

「心配しないでね。ティアナの体に、特に大きなダメージなどは見受けられないわ。ただ、ちょっと疲れがたまっていたみたいね。スバルの話だと、模擬戦場からここに来る途中で急に眠り始めちゃったらしいわ」

「そうですか……」

コーヒーをゆっくり飲みながら、なのははシャルルの話を聞く。

「疲れが、溜まってた……」

数日前、真司がティアナについて尋ねてきたことを思い出す。

考えてみれば、ティアナの様子が少しおかしいということは、あの時からわかっていたのだった。

……なのに、自分は彼女に対して何のフォローもしてあげなかった。  
拳句の果てには、他の人から諭される始末だ。

「駄目ですね、私……ティアナの近くにいると思いこんでて、実際は全然あの子のこと、わかってなかった……ううん、わかるうとしてなかった。真司君に、いっぱい言われちゃいました」

うつむくのはに対し、シャルは一呼吸置いて、静かに彼女に語りかける。

「……なのはちゃんは、強くて、優しい子よ。だから今までも、フイトちゃんやはやてちゃん、私達を助けてくれた。……でも、だからこそ、ひとりで何でも抱え込んでしまうところがあるのも確か」

はつと顔をあげてシャルを見つめるのはに、彼女ははつきりと言った。

「……忘れないで。あなたが誰かを助けたいと思っているように、あなたを助けたいと思っている人がいることを。そして、誰かが傷ついた時にあなたが悲しむように、あなたが傷つけば、悲しむ人がたくさんいることを」

医務室から出たなのは、自販機のあるところまで向かい、そこにあるベンチに座って、真司やシャマルに言われたことの意味をゆっくり噛みしめる。

「  
　　なのは」

その時、彼女の前に現れたのは。

「真司君……………」

「ごめん、ちょっと腹壊しちゃって、トイレ行ってた」

「…大丈夫なの？」

「へーきへーき。さっきのなのはが怖い顔してたから、ちょっとびびって腹の調子がおかしくなったただけだから」

……その言われ方は、少し傷つく。

「……………」

「あつ！ご、ごめん。別に今のなのは怖くないからな。……やっぱ俺ってデリカシーないなあ」

いつも通りの態度で話す真司だが、やはり2人を包む空気はどこかぎこちない。

「ティアナ、あの後すぐに眠っちゃったらしくて、まだ起きてないの」

「……………そうか」

そう言いながら、真司はなのはの隣に座り、そのまま虚空を眺める。

彼の方から話しかけてくる雰囲気はない。なのはが何か言うのを待っているようだ。

……真司は、自分とティアナのために一生懸命やってくれた。彼がいなければ、自分が持っている問題にも気づかず終いだっただろう。

「……………ごめんね、真司君」

結局、口から出た言葉はそれだけだった。頭の中がいろいろ混乱していて、うまく言葉を紡ぐことができなかったのだ。

それを聞くと、真司ははあ、と息をつき、なのはの方を振り向く。

「あのさ。ジャーナリストって、色々取材したりするのが仕事だからさ、コミュニケーションって大事なんだよね」

「……………え？」

どうしてここでジャーナリストの話が出てくるのだらうと戸惑うのは。だが、それには構わず真司は言葉を続ける。

「そういつわけで、俺が編集長に教わったことがあるんだ」

そこで一呼吸置くと、真司は笑顔になってこう言った。

「こういつ時は『ごめん』じゃなくて、『ありがとう』って言うんだってさ」

「あ……………」

その言葉と笑顔につられて、なのはの表情も少し緩む。

「そうだね。じゃあもう一回。…ありがとう、真司君。ティアナが目を覚ましたら、フォワードの皆に話すよ。私の過去と、今の気持ち」

「ああ、頑張れよ」

幾分柔らかくなった空気の中、なのはは真司の顔をじっと見つめる。

彼に教えてもらった。何でも一人で背負い込むのではなく、時には周りを頼っていいのだと。

だから、早速だけでも頼らせてもらおう。

「ねえ、真司君」

「ん、何？」

「……皆に話す前に、あなたに聞いて欲しいんだけど……いいかな？」

「え？…ああ、リハ―サルってこと？いいよ、俺でよければ」

迷うこともなく承諾する真司。……もつとも、なのはが先に彼に話そうとした理由は別にあるのだが。

「ありがとう。…じゃあ、話すよ」

すうーっと深呼吸をしてから、なのはの『お話』が始まった。

9歳の時に、偶然魔法少女になり、事情によりフェイトと戦ったこ



と。

紆余曲折の末、なのはの願いが叶い、2人が『友達』になれたこと。

半年後、はやてやシグナム達が大きく関わった『闇の書』事件の際も、当時安全性が危うかった『カートリッジシステム』の使用により、辛くも危機をくぐり抜け、彼女たちとも親しくなったこと。

……だが、幼いころから高威力の魔法を使ってきた彼女の体には、当然ながら見えない疲労が蓄積していて。

時空管理局に入って2年目、その疲労のせいで少しでも動きが鈍り、重傷を負ってしまったこと。地獄のようなリハビリを経て、今のようになんか飛べるようになったこと。

フォワードの皆には、自分と同じ思いをさせたくない。だから、多少しつこいくらいに思えても、怪我をしないように基礎をしっかり固めておきたい、ということ。

「……以上、高町なのはの失敗談でした」

なのはは冗談を言うように話を締めくくったが、それを聞き終えた

真司は、しばらくの間何も言えなかった。

ティアナと同じく、彼女の抱えているものは、自分より年下の少女が背負うにはあまりに大きすぎるものに違いない。

「（シリアスだ……本当に、シリアスだ）」

『大変だったんだな』などという言葉では、とても彼女に対してかけるものとしては不適切だ。そんな陳腐な表現で、自分の気持ちを伝えられるとは思えない。

だから。

「……決めたよ」

自分の決意を、真つすぐ語ることにした。

「俺は、普通に生きてきた一般人だから、他人がなかなか味わったことのないような苦しみとかを感じたことはない。……だけど、そんな俺でも、周りの人の支えになることくらいはできるはずだ。こつちの世界に来てから、皆に色々お世話になってる代わりに、俺がなのはや、六課の皆を精一杯支えていくよ」

そう言って、なのはの顔を見つめる真司。

「……うん。じゃあ、これからもよろしくね！」

そう答えたなのはの頬は、なぜだか少し赤く染まっていた。

「……………ん」

「目が覚めたようね」

まず視界に入ってきたのは天井。続いてティアナが声のした方を向くと、そこには安心した表情のシャルが立っている。

しばしの間、寝起きでぼーっとしていたティアナだが、壁にかかっている時計を見て、一気に意識が覚醒する。

「え！？もう9時って……一体、あの後何が……」

「なのはちゃんは、真司君が必死になって止めたそうよ」

「っ！？真司さんが……？実力勝負で、ですか！？」

シャマルの言葉を聞いたティアナは驚きを隠せない。

「……詳しい話は知らないわ。だけど、その辺はじきになのはちゃんが直接話してくれると思うから。今は、多分心の準備中かな」

「心の、準備……？」

「そう。彼女だってまだ19歳。悩んだり、間違ったりすることだってあるのよ」

シャマルの言葉の真意がいまいち呑み込めず、ティアナは首をかし

げるしかなかった。

だが、数時間後。機動六課のメンバーは、事件を告げる警報を聞くこととなった。

ティアナを除く残りのフォワード陣と一緒にいた真司は、彼女達とともにヘリポートへと向かった。

今この場にいるのは、なのはとフェイト、ヴィータ、シグナム、ヘリの中にいるヴァイス、フォワードのみんなだ。ティアナも、明らかに元気はないがきちんと集合している。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の3人」

「みんなはロビーで、出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

なのはとフェイト、ヴィータが今回の任務の説明をして、

「「はい!!」「」」

スバル達が引きしまった返事をするのだが。

「はい……」

ティアナの返事だけ、他の3人よりもワンテンポ遅れた、霸気のな  
いものとなる。

そんな彼女の様子を、一同は黙って見つめている。

「なのは」

だが、ここで真司が口を挟んできた。みんなの視線が彼に移る。

「俺がなのは代わりに出る、ていうのじゃ駄目かな」

「え……………」

「やんなきゃいけないことがあるだろ？心配しなくても、ドラグレスダーと協力すれば、空戦だって何とかできるよ」

驚くなのはに、真司はにべもなくそう告げる。今の彼女には、みんなと向き合う時間が必要なのだ。

「確かに戦えるだろうけどよ、今更メンバー変更って、ちゃんとはやてに許可取らねえと」

「だったら、今から聞いてみてくれないか。俺となのはの交換がOKかどうか」

ヴィータの洪る言葉にもすぐさまそう返す真司。それを見て、ヴィータも彼が本気だということを悟る。

「わかった、今から聞いてやるよ。はやて、聞こえるか。急な頼

みで悪いけど、出撃メンバーからなのはを降ろして、代わりに真司を入れてもいいか？」

はやてとの念話を始めるヴィータ。真司はそれを神妙な面持ちで見守る。

なんやて！？何で急にそういう案が出てきたんや！？

そう言われてもな…ほら、色々あるんだ。色々

……はあ、ちょっと私が目を離れたすきにえらい話が進んでいるようだ。まったく、これやから部隊長なんて立場は……ま、ええよ。その代わり、後でちゃんと話はしてな

ああ、サンキュー

念話を終え、ヴィータは真司の方に向き直る。

「オッケーだ。そうと決まればさっさと行くぞ！」

「っ、ああ！ありがとな！」



そうしてすぐに、真司とヴィータ、フェイトを乗せたヘリが飛び立った。

それを見届けた後、なのははフォワード陣を見て、こう告げた。

「みんな。ちょっと話があるんだけど、いいかな」

一方、こちらはヘリの中。戦闘態勢を整えながら、ヴィータは真司に尋ねる。

「なあ真司。お前、なのはの過去……」

「さっき聞いたよ。だから、後はティアナ達が教えてもらっただけだ」

「そうか……」

しばしの沈黙。誰もしゃべらない時間が流れ続ける。

やがて、その沈黙を破ったのはフェイトだった。

「真司、本当にありがとう」

「ってあゝ！それはあたしが先に言おうとしてたのに！！」

なかなか言葉を切りだせなかったヴィータが悔しそうにフェイトを睨む。

「え？なんで2人が俺に礼を言うことになるの？」

そして、感謝される側は状況を理解できていなかったりする。

「当たり前だろ。お前はあたしらの大切な友達を止めてくれたんだ」

「私達ができなかったことをやってくれた。それだけで、感謝の理由にはなるよ」

「……そっか」

ヴィータとフェイトの言葉を受け、真司もようやく納得したようだが。

「それにしても、お前すげーよな。リミッターがあつたとはいえ、なのはに勝っちまうなんて」

「……………へ？」

次の瞬間、信じられないとでもいったような表情になる真司。たつた今、聞き捨てならない言葉を耳にしたような……………

「あれ？お前知らなかったのか？あたしらは普段事情があつてリミッターをかけてるんだ。なのはの場合、そのせいで魔力量だけで考えりゃ初めて魔法を使ったときよりも低いんだぞ」

「……………おっそろしー」

想像もつかない、なのはをはじめとする皆の『本気』に、真司はそうつぶやくことしかできなかった。

「……………」

そう言っ、なのはは隣にいるティアナの方に顔を向ける。

なのはによる昔話と、彼女の気持ち語られた後。なのはは、ティアナひとり呼び出した。2人きりで話があったからだ。

……まあ、なのはとティアナは気づいていないが、少し離れたところで茂みに隠れるスバル、エリオ、キャロ、フリード、そしてシャ

ーリーがいるため、全然2人きりではないのだが。

「…私が色々お話したから、今度はティアナの気持ち、聞かせてくれないかな」

大切なのは、互いの気持ち受け止めること。だからなのは、ティアナの想いを知らうと、彼女に語りかける。

ティアナも、先ほどののは教導の意味を知ったため、素直に問いに答える。

「私は……やっぱり、一刻も早く執務官になるっていう夢を叶えたいと思っています。そのために、とにかくがむしゃらに前に進みたいという気持ちがあることは、確かです」

「…そう。でも、私のみんなに無茶をさせたくないって気持ちも本物なんだ」

「それは、もちろんわかってます。なのはさんが、私たちのことを想って、基礎を固めようとしてくれていたこと……だから、今日は本当にすみませんでした！」

勢いよく頭を下げるティアナ。だが、なのはもそれに対し、深く頭

を下げる。

「私も、本当にごめんね。ティアナや他のみんなと、しっかり向き合おうとしなくて」

「いえ、私の方が悪いです!」

「いやいや、私も……って、こんな譲り合いはやめた方がいいね」

謝罪合戦というわけのわからないものになりそうだったところを、  
なのはが強制的にストップさせた。

そして、2人は無意識に空を見上げ、星を眺める。現在交戦中であるメンバーは、うまくやっているだろうか。

そんなことを少し考えた後、なのはは再び口を開く。

「でも、一応は考えていたんだよね」

「え?」

「クロスミラージュ、貸してくれない？」

「は、はい……」

言われるがままにクロスミラージュを渡すティアナ。それを受け取ると、なのははそれに呼び掛ける。

「システムリミッター、テストモードリリース」

Y e s

「命令してみて。モード？って」

クロスミラージュを返してもらったティアナは、よくわからないままそれに従う。

「モード、……」

S e t   u p   D a g g e r   m o d e

「っ……………」

直後、ティアナは起こったことに絶句する。

クロスミラージュから魔力で造られた剣先が出現し、接近戦用に変化したのだ。

「…執務官志望のティアナは、いずれここを出て行けば、個人戦も当然多くなる。そう思って、用意だけはしておいたんだ」

そう言いながら、なのははティアナに向かって微笑んだ。

「…う、うわああああ………!!」

そこで、ティアナの感情が爆発した。泣きじゃくる彼女を、なのはは優しく抱きしめ続けた。



10分ほど経って、ティアナはようやく泣きやんだ。

「落ち着いた？」

「…は、はい。すみません、取り乱しちゃって……………」

恥ずかしそうに顔をうつむけるティアナ。

「いいんだよ、そんなこと。誰だって、周りの人に甘えたっていいんだよ。…………これ、真司君の受け売りなんだけどね」

「真司さんの……………」

その名を聞いた途端、ティアナははっと顔をあげる。

「うん。真司君がいたから、私は大事なことに気づけたんだ」

「……私も。真司さんのおかげで、あまり無茶をしすぎることもありませんでした。ここ数日、ずっと見守ってくれて……」

「……優しいよね」

「料理も上手ですし」

「大切なこと、教えてくれるし」

「いざって時には本当に頼りになるし」

「「なんか、素敵だなあ」……」

言い終わった後、互いのセリフが被ったことに気づき、なのはとデアナは互いを見つめあう。

「これは……ちょっと負けられないかな？」

「魔法に関してはまだまだ敵いませんが……」  
「こっちに関しては、譲るつもりはありませんよ」

そんな火花バチバチの様子を見ている野次馬達は。

「うわあ…なんだか予想外の展開に…」

「いや、でも逆に予想通りだったような気も……」

「お、大人の恋……なのかな？」

「ど、どうなっちゃうのかな……」

「きゅ……」

スバル、シャーリー、エリオ、キャロ、フリードと、それぞれが困惑しながら言葉を発する。

だが全員、何だかんだでこの展開をおもしろがっている節もあったとか、なかったとか。

## 第十二話　たいせつなこと（後書き）

結論：「ライダーは助け合いでしょ！」てことですかね。互いが互いを支えること。本編 *Strikers 9* 話を見て一番ひつかかったのは、「あれ？結局なのはひとりが無茶することになるんじゃない？」てことですし。つーか今回僕にとっては史上最長の文字数だったので、もう限界です……詰め込み過ぎた。本当は真司とティアナの会話も入れる予定だったのですが、次回に回します。

そんな次回は真面目じゃない展開です。いわば夏の井上脚本です。つて、W以降これなくなっちゃったんだっけか……まあいいや。

では、また次回。

### 第十三話 欲望渦巻く戦い・前篇（前書き）

大変長らくお待たせしました。ようやっと続きです。

### 第十三話 欲望渦巻く戦い・前篇

「……………ここは」

城戸真司が気づいた時、彼は人ごみの真ただ中にいた。せわしなく歩いて行く人々。周りには見慣れた建物の数々

「……………元の、俺のいた世界!？」

まさか、という期待感が一瞬頭をよぎったが、それはすぐに混乱へと変わる。

「っ!?!体が動かない……………」

どこにどれだけ力を加えても、棒立ちのまま体が言うことを全く聞かない。まるで見えない糸にがんじがらめにされているかのようだ。

「くそ、夢なら早く覚めて」

「

と、その時。

少し向こうに立っている人間の瞳が、じっとこちらを見つめていることに真司は気づく。10秒、20秒経ってもまったく視線をずらすすぶりも見せず、ただ、まっすぐに。

「……君は」

瞳の主は、ひとりの少女だった。なのはより少し低いくらいの背丈に、黒髪はティアナのように2つくりになされている。いわゆるツインテールという髪型だ。

そして何より特徴的なのが、右目につけられた白の眼帯。なぜだか真司は、その隠された瞳に引き込まれるような感覚を覚える。

「君は、一体……」

真司の声は、届いているのかそうでないのか。少女はただ小さく笑うと、ゆっくりとこちらに歩み寄って来る。

一歩、また一歩。体の動かない真司は、そんな彼女の動きをじっと見つめている。

そして、真司の目の前で足を止めた少女は、その手をゆっくりと上げ、真司の顔に

「ハッ」

ベッドの上で辺りを見回す。間違いなく機動六課の宿舎の自分の部屋の中で、午前3時半を示した時計が目に入った。

「……夢か」

会った覚えもない少女が夢に出てくるなんて変だなと思いつつも、真司はもう一度眠ろうと布団をかぶる。

ちゃんと睡眠を取っておかないと、シグナムの鬼訓練に耐えられそうもない。



「……うだう、疲れたあ」

ようやくと訓練が終わり、夕食にありつくために食堂に向かう真司の足取りは、いつも以上に重い。

夜中に起きてしまったのは、おそらく直接の原因ではない。問題だったのは

『城戸、今日はこれをつけてランニングだ』

『……あの、シグナム？俺の目がおかしくないんだとしたら、君が指さしているのは20kgくらいありそうな亀の甲羅なんだけど』

『ほう、見ただけでよく重さまでわかったな。主はやてがお前のために用意してくれた。ありがたく使わせてもらうんだな』

『はやて達のいた地球にも超有名漫画はあるんだな……』

というような会話の後、本当に20kgの甲羅を背負って走らされたのだった。これから毎日こんなことが続くなどということは、考えただけでぞつとする。

「というか、これは明らかにはやてが漫画のネタを面白半分で作ってるだけだろ……シグナムさん。少しは部隊長の言うことを疑ってください……」

「部隊長が、何やて？」

「いや、だから……ってうおわぁ！？はやて、いつの間に!？」

まったく気づかないうちに隣を歩いていた機動六課部隊長に驚き、すっとんきょうな声を上げる真司。

「ふっふっふ。部隊長には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わっとるんやで？」

「何それ……てか、シグナムに滅茶苦茶なこと吹き込むのやめてくれよ。俺は別に天下一武道会に出る気はないんだぞ？」

「…あれ、迷惑やった？」

「当たり前だろ」

呆れたように言った真司だが。

「……そっか。すまんすまん、ちょっと悪乗りしすぎたわ」

そのときはやての顔つきが急に暗いものになる。

「……私、小さい頃足が不自由でな。その時読んだ漫画に出てくる、大空を縦横無尽に駆け巡る無敵の主人公ってやつに憧れとったんや。せやから、今もその気持ちが残ってしもてて、つい……な」

なぜか哀愁たつぷりのBGMが流れているような感覚を覚えつつ、真司ははやての言葉を聞き

「そ、そうか……大変だったんだな。そういう事情があったなんて知らずに、頭ごなしに文句言っちゃってごめん」

「別に真司君が謝ることやあらへんよ　（ふっ、ちよろいもんやな）」

ちやっかり彼女の言葉に踊らされてしまつのであつた。

「あつ！そうそう、言い忘れとつた。夕食が終わつたら、真司君の部屋にみんな集まるから準備しといてや〜」

「……………え？」

「とゆーわけで！これより第一回『集え歴戦の猛者たち！人生ゲームat城戸真司の部屋』を開催しまーす！！」

「「「」……………」」」」

「あれ、どうしたんみんな？まるで『ツッコミどころが多すぎて何言えばいいのかわからない』て思っとなるような顔して」

「わかってんじゃん……………」

他の人間を置いてきぼりにしたはやての突然の宣言に対し、ようやく真司が口を開く。

現在地は真司に与えられた個室の中。はやてが言った通り、結構な人数が狭い室内に集合している状態である。

既に名前の出た2人を除くと、なのは、フェイト、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ヴィータ、シグナムといった面子だ。

「それで、これからみんなで何をするの？さっき人生ゲームって言ったみたいけど」

なのはの質問に、はやてが待つてましたとばかりに説明を始める。

「その通りや。今からここに集まってもらった10人で人生ゲーム

をプレイする。…この中で人生ゲームがわからんって人はおる？」

「……えっと、ルーレットを回して結婚とかいろいろ通してお金を貯めるボードゲーム、で合ってる？」

果たして異世界でも同じ代物なのかと不安を抱きつつ尋ねた真司の言葉にうなずくはやて。

「正解や。やっぱり違う地球でもそこそこ共通しとるところがあるんやな。ドラ ンボールネタも伝わったし」

真司の他にルールに不安を持っている者がいないことを確認し、はやては説明を続ける。

「せやけど、もちろんただ人生ゲームで遊ぶためだけにわざわざみんなを呼んだわけやない。……ズバリ、この勝負で1位になった人は、ゲームの参加者ひとりに好きなことを命令できるっていうのはどうや！」

はやての提案にざわめく一同。当然だろう。勝てば文句なしに得をすることができるが、2位以下になればとんでもない命令をされる可能性があるのだから。

「おもしろそうじゃねえか。その勝負乗った」

一番に名乗りを上げたのは、いかにも好戦的な表情になっているヴィータだ。彼女が勝って命令しようとしている内容は

「お前も参加しろ真司！あたしが勝ってギョーザアイスを作らせてやるぜ！」

「何そのいかがわしい食べ物！？……でも、アイスで思いたしたぞ」

そう、あれはホテル・アグスタの警備よりも前の日のこと。

「あ、真司君。やっと見つけたよ」

「ん、何か用、なのは？」

食堂でたむろしていた真司になのはが駆け寄ってきたかと思うと、彼女はひんやりとした感触がするものを手渡す。

「アイスクリーム……？」

「有名なところで作ってる高級品がたまたま安く売ってたからって、シャル先生がみんなにひとつずつ買ってきてくれたんだ。真司君で最後の1個だよ」

「本当に！？うわあ、太っ腹だなあシャル先生。今度会ったらお礼言わないと」

「にはは、そうだね。じゃあ、私行くところがあるから…」

「わざわざ届けてくれてありがとう」

走り去るなのは背中を見送った後、真司は食堂の椅子に座り、しばらく高級バニラアイスクリームをうっとり眺める。

「……………こういうの食べるの生まれて初めてだから、緊張するな、はは…」

ややあって、そろそろ食べようかと机の上のアイスクリームに手を伸ばそうとした瞬間。



ひょいっと誰かの腕が伸びたかと思うと、机の上のアイスが忽然と消えていた。

「……………え？」

腕が出てきた方を振り向くと、そこにはアイスを持って澄ました顔ですたすた歩いて行くヴィータの姿が。

「っておいイ！？ちよつと待てえ！」

あまりに自然な動きだったため一瞬呆けた真司だったが、すぐに椅子から腰をあげ、ヴィータの元へ走る。

「……………何だよ。先に言っておくけど、このアイスは食堂の机の上に落ちてたのを拾っただけなんだからな」

「俺が置いてたの！だからこれは俺の物」

ひょいっと真司がヴィータの手からアイスをかすめ取る。

「あっ！？何すんだテメエそれはあたしのもんだ！！」

ヴィータが真司の手からアイスを奪い返す。

「いや、だから俺のアイスだって」

真司が取り返す。

「いや、あたしが拾ったんだからあたしのだ」

ヴィータが奪い返す。

「だーもう！だから違っって言ってるだろ！子供か！」

「うるせえ！アイスはあたしの大好物なんだ！しかもこんな高級モノ、ひとつ食っただけじゃ物足りねえ！」

そう言いながら真司の手をはねのけ、ヴィータは逃走を始める。

「あつ、待てヴィーター！」

真司も走り始め、追いかけるこの開始だ。

「待てって言って待つ馬鹿はいねえよ！」

「ここで待たない方が精神的に馬鹿だよ！」

ぐるぐる食堂の中を回り続ける2人。その表情は必死そのものだ。

「  
ねえエリオ君。真司さんとヴィータ副隊長、何してるんだ  
ろっ？」

「……さあ？ものすごい形相で追いかけてっこしてるけど」

そんな中食堂に立ち寄ったエリオとキャロは、目の前で繰り広げられる謎の光景にぼけーっと突っ立っていることしかできなかったのだった。

「あ。ヴィータ副隊長が転んだ。真司さんが追いついたぞ」

「……って、今度はヴィータ副隊長が真司さんを引っ張って転ばせたよ」

「…あ、真司さんのお腹にすごいパンチが……………」

「あの時に結局奪われてしまったアイスクリーム…人生ゲームで勝つておごってもらうぞヴィータ！」

「上等だ！やれるもんならやってみな！」

「おう、早くも2人がノリノリやなあ。さあ、他のみんなも、勝つたら何でも言うこと聞いてもらえるんやで？」

はやてのその言葉にぴくりと反応したのは。

「……………わかりました。私も参加します」

先ほどからちらちら真司の方を見ているティアナだった。

「あつ、ティアが参加するなら私も！」

「オツケー、ティアナとスバルやな。他には？」

「…じゃあ、私もやろうかな」

今度はなのはが、ティアナの顔を1度見てから参加宣言。

「よっしゃ、なのはちゃんも参加つと。後残つとんのは……シグナム。シグナムは参加せんのか？」

先ほどから黙ったままのシグナムにはやてが気づき、声をかける。

「……私は、こういったものはあまり得意では」

「ほう、では逃げると」

「いえ、逃げるとかそういうことでは」

「アカンなあシグナム。本当に強い人間は、人生ゲームやろうが何やろうが、絶対逃げたりはせんのかで。……シグナムはええんか？強くなれんままでええんか？」

「…そういうものですか。それならば、参加させていただきましよう」

はやての口車に乗せられてシグナムも参加決定。

「……さて、フェイトちゃんは」

「わ、私は遠慮させてもらおうかな」

はやてが何か言う前に回避しようと、フェイトが先に断りの言葉を入れる。

入れたのだが。

「……なんやて？このタイミングでやらんって……楽しみにしてるのに、まだ小さなエリオとキャロが残念がるで」

「…いや、2人とも真司とヴィータのやり取りにむしろ引いてたよ  
うな」

フェイトがそう言いながらエリオとキャロの方を振り向くと。

「う、うわあー、人生ゲームって楽しそうだね、キャロ（棒読み）」

「そ、そうだねー、わくわくするよねーエリオ君（棒読み）」

「ほら、やる気満々やる？」

「……明らかに周りから威圧されてるだけに見えるんだけど」

「そんなことあらへんよ」

「……参加します」

結局根負けしたフェイトは、深く深くため息をつくのだった。

### 第十三話 欲望渦巻く戦い・前篇（後書き）

というわけではやて大暴走回でした。ライセンス云々のセリフは中の人つながりです。久しぶりに更新したと思ったら完全ギャグ回で申し訳ありません。

ですがまあ、一応冒頭の真司の夢は大きな伏線です。夢の中の少女ももちろんオリジナルキャラです。うまくストーリーを展開できるかが勝負ですね。

今回は人生ゲームプレイです。それぞれが叶えたい願いにも注目。

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。

では、また次回。



## アンケートと雑談（前書き）

本編はまだ投稿できません。すみませんが、もうしばらくお待ちください。

## アンケートと雑談

あー、最近寒い……これからまだまだ気温が下がると思うとぞっとしますね。

クライマックスヒーローズオースは楽しいです。ちびちびラグナロクモードを進めて、もう少しで橘さんが出せそうです！何かもずくに浸かった時の状態らしいけどまあいいや！てか剣崎のセリフに「俺は今、無性に腹が立っている！」とかあるあたり、スタッフは狙っているのか……？一方龍騎はドラゴンナイトのおかげで全ライダー参戦、しかも超必ありの優遇っぷり！え、オルタナティブ？だってあれはライダーじゃないし……

まあ、雑談はこのくらいにして。

実は、2つばかりアンケートがあるのですが、よろしければお答えいただけると思います。

1つ目はこの作品の恋愛についてです。現在なのはとティアナにラグが立っており、これから増えるかもしれませんが（もちろんオリキャラも含む）。そこでお聞きしたいのですが、最終的に真司と誰かがくつつくのはアリなのか、そうであれば誰がいいのでしょうか？ちょっと迷っているのですが、よろしければご意見を頂きたいです。

2つ目はこの作品とは関係ないのですが……今完結に向けてスパートをかけている作品が終わったら、オリジナル作品を始めようかなという気持ちが少しあるのです。2つ候補があって、概要は以下の通りです。

1つ目：何かよくわからないうちに全然知らない赤の他人の体に魂

が入りこんでしまった主人公が繰り広げる、学園コメディ＋能力バトルもの。ヒロインは「クール系のバトル少女」「活発な同級生」「ませたロリキャラ」を予定しています。

2つ目：特にこれといった特徴もない男子高校生である主人公の日常を描く完全学園コメディーもの。ヒロインは「小難しいことを言うちょっと一般女子からずれた女の子」「主人公にやたら厳しい体育会系委員長」「優しくて気が利く眼鏡っ子」の予定です。

仮に始めるとしたらどちらがいいでしょうか？この質問は活動報告にも書いたのですが、よく考えたら僕の活動報告なんて読んでる人はそういないということに気づきました……

アンケートは以上です。ご回答をいただけると、これからの励みになります。気が向いたらでいいのでよろしくお願いします。

#### 第十四話 欲望渦巻く戦い・中篇（前書き）

ミッドチルダの通貨がわからなかったので、人生ゲーム内のお金は単位なしです。ご了承ください。

それともうひとつ、今回は史上最大のカオス具合です。

## 第十四話 欲望渦巻く戦い・中篇

そんなこんなで始まることとなった人生ゲーム。

以下、参加者の心内状況。

「ふふふ……なぜフェイトちゃんとシグナムを強引に参加させたか。それはこの勝負に勝ってどっちかの胸を存分に揉ませてもらうためや！」B Y機動六課部隊長

「必ずギョーザアイスを作らせてやる……楽しみだなあ、真司！」B Y幼そうに見えて意外と頭の切れる守護騎士

「今こそリベンジ！ヴィータに敗者の屈辱を味わわせてやるぞ！」B Y迷子の民間協力者

「……勝って強者に一步近づく」B Y主に忠実なバトルマニア

「なんか異常に気合いが入ってる人たちがいるけど、私はとりあえず真司さんの餃子を目指して頑張ろうっと！」B Yフォワード陣一の元気娘

「……ここで勝って、罰ゲームとして真司君と一緒に出かけて……  
負けられないね」BY管理局のエースオブエース

「……となのはさんは考えているはず。だけどその作戦は私が実現させる！」BYフォワード陣の頭脳

「……み、みんな怖い……」BY純真無垢な年少ズ

「……もうどうにでもなれってとこかな」BY音速の執務官

「とまあこんな感じで、やる気のある人もいれば怯えている人、既に諦めている人もいる状況ですが、皆さん頑張ってください！実況は私リインフォース？がお送りいたします！」

『じつきよーせき』と乱雑に書かれた段ボールの上で叫ぶリイン。  
こういうことに関してノリがいいのは主に似たのか。

「解説にはなんと！あのXV級艦船『クラウドディア』の艦長であるクロノ・ハラオウン提督にお越ししていただいています！クロノ提督、今日はよろしく願います」

「ああ、よろしく……って違う！僕は噂の『龍騎』がどんな人物かを見に來ただけなのに、どうしてこんな状況になっているんだ！？」

「まあまあ、いいじゃないですか。ほら、妹さんも楽しそうですよ？」

「いや、むしろ一番やる気無さそうに見える」

「おっと！ルーレットを回す順番が決まったようです。いよいよ激戦の火蓋が切って落とされます！」

クロノの言葉をあっさりスルーし、リインが試合開始を宣言する。

「ちなみにスローガンは『その欲望、解放しろ』です！」

「もっとましなスローガンにはならないのか……」

兄妹そろって振り回されているハラウン家だった。

「というわけでプレイする順番を決めようと思っんやけど……今日の夜カレー食べた人おる？」

「え？あ、はい……」

はやての一見脈絡のないその質問に戸惑いながらも、今晚カレーライスを食べたキャラがそろそろと手を上げる。

「あ、じゃあキャラから時計回りってことで決まりや」

「ってえええっ！？という決め方なんですかそれ！？」

驚くキャラだが、最初にルーレットを回すのは多分有利だろうと思いなおし、素直にプレイを始める。まわりに気圧されてはいるが、始めた以上は一番を目指してみようと考えるのはいるのだ。



「私は専門職コースに進みますね。えいっ」

カラカラとルーレットが回る。その様子をじっと見つめる一同。

ルーレットが動きを止め、指した数字は『6』。それに従い、キヤロは『専門職コース』へ駒を進める。

人生ゲームは、最初の10マスほどが2つの道にわかれている。『ビジネスコース』では初期の職業はサラリーマン（月給8000）に固定され、一方『専門職コース』では止まったマスに応じて様々な職業になることができる。それらの職業はどれもほとんどサラリーマンより優秀なのだが、ほかのプレイヤーが先にその職業になってしまっていたり、大きすぎる数字をルーレットで出してしまうえば、フリーター（ルーレットを回してでた数×1000）になってしまつたため、順番が後ろの人間にとってはリスクが高い選択となるわけだ。当然、どちらのコースに進むかはルーレットを回す前に決めることになっている。

キヤロは一番手だったので迷わず専門職コースに進み、『プログラマー（月給15000）』の職業をゲット。

「うーん…まあまあかな」

「じゃあ次は私の番だね。専門職コースで行くよ」

2番手はフェイト。こちらでも早い順番なので、特に思慮もせずコー  
スを選び、ルーレットを回す。

が。

「……10？」

駒を10マス進めると、そこは『給料日』マス。……つまり、職業  
獲得マスをぶっちぎってしまったわけである。

「あーっとフェイト選手！10%のアンラッキーを引いてしまった、  
これは痛い！」

「早めに職を取らないと危険だな……どんどん差が開いてしまう」

実況席ではリインとクロノが誰に向けて発しているのかわからない  
実況および解説を行っている。クロノも渋々ながら役を引き受けた  
らしい。

「……まあ、絶対1位にならなきゃいけないわけじゃないし、まだまだいけるよね」

気を取り直して自分に言い聞かせるフェイト。他のプレイヤーが本気のガッツポーズを連発していても、気にしない気にしない……

その後も続々とルーレットを回して行き、とりあえず一巡が終了。

「さて、一巡目が終了して全員の職業が決定しました。一番手のキヤロ選手がプログラマー、二番手のフェイト選手がフリーター、三番手のなのは選手が先生（月給12000）、四番手のはやて選手が政治家（月給30000）、5番手の真司選手がスポーツ選手（年俸120000、職を変えない限り月給なし）、6番手のシグナム選手がサラリーマン、7番手のティアナ選手が医者（月給25000）、8番手のスバル選手がサラリーマン、9番手のヴィータ選手がタレント（月給がルーレットを回して出た数×5000）、10番手のエリオ選手がサラリーマンとなりました。解説のクロノ提督、これをどう思いますか」

「やはり後半の人間はリスクを恐れてサラリーマンを選んだ者が多いな。その中で高月給の医者とタレントを引き当てた2人はなかなか幸運だと言えるだろう。現時点で有利なのはこの2人に加えて、はやてと次点で城戸君といったところかな」

すっかり冷静に解説しているクロノ。というのも、昔フェイトがハ  
ラウン家の養子に來た直後のころに兄としてどう接していいかわ  
からなかったためにたまたま母が買ってきた人生ゲームをやりまく  
っていたという背景があるため、このゲーム自体にはかなり精通し  
ているからだ。

……その時から気づいていたことなのだが。

「よっしゃ、大食い大会優勝で20000ゲットだぜ！」

とヴィータが歡喜すれば。

「スリにあつて20000損失、か……」

その傍らでフェイトはただでさえ少ない所持金をさらにすり減らし。

「おつ、株価がアップで1枚ごとに10000の利益や！儲け儲け  
」

とはやてがガッツポーズを取った次の番では。

「火災で自宅が全焼……全財産を失う。お金がなかったから火災保

険にも入ってないし…折角さっきサラリーマンになれたのになあ」

フェイトが完全な一文無しになっていた。

「……何かを賭けている時のフェイトの勝負運のなさは、まさしくSSSランクだ………！」

戦慄の表情を浮かべるクロノ。最初のやる気のなさはどこへ行ってしまったのだろうか。

「おおっと、ここで兄から衝撃的な事実が明かされた〜！もはや勝利は絶望的なのか、フェイト選手！」

実況席はフェイトのことで勝手に盛り上がっていたのだが、その頃ルーレットを握る手に汗がにじんでいる者がひとり。

「……………（ゴクリ）」

「どうしたのティア？早く回しなよ」

いつまでたつても動かないティアナを気にして、スバルが声をかける。

「……ええ。今、回すわ」

現在の状況……ティアナの駒は、いわゆる『ギャンブルマス』に止まっている。

内容は、『10000支払った後ルーレットを回し、7が出たら所持金の5倍の金額をもらえる』というもの。

「（ここで7を出せば、圧倒的優位に立つことができる。勝利に向けて、大きな一歩を踏み出せる……！）」

ティアナが思い出すのは、数日前の真司との会話。

なのはと和解し、直後に宣戦布告することとなった日の翌日のこと。

「あつ…真司さん！」

「ティアナ。どうしたの？やけに真面目な顔して」

通路を歩いていた真司をティアナが呼びとめると、彼は不思議そうな顔をしてそう尋ねてきた。どうやら無意識の内に顔が強張っていたらしい。

「……本当に、本当にありがとうございます！なんてお礼を言ったらいいか……」

勢いよく頭を下げると、真司はあわてて首を横に振る。

「わわ、ちょ、ちょっと待つてよ。そんな風に頭下げてもらうようなことした覚えはないよ。ティアナが大事なことに気づけたのは、なのはと話しあったからだろ？」

「…確かにそうかもしれません。だけど、そこまでの道を作ってくれたのは真司さんです。私なんかのために毎日特訓に付き合ってく

れて、私のことをなのはさんに伝えてくれて……真司さんがいなかったら、私はまだ悩んでるままだったに違いありません」

感謝の思いを伝えようと熱心に話したところ、ようやく真司も自分のやったことの重要さを認めたらしく、照れが混じった表情でうなずく。

「まあ、とにかくティアナが元気になってくれてよかったよ。これからは、困ったことがあったらどんどん言ってくれよな」

「あっ……」

彼の笑顔に、再び兄の面影を見つけるティアナ。

その時、ようやく彼女は理解した。

城戸真司は、兄に似ていて、かつ兄とまったく異なる人格の持ち主なのだ。守ろうとする強さと、時に相手を無警戒にするその雰囲気。いい意味で、『馬鹿』なのだ。

「あの、真司さん……」



「ん？」

この先の言葉を口にしようとする、緊張が体全体を支配する。頬が火照り、あまりの熱さに今すぐまわれ右したくなってしまうそうだ。

「（……それでも、言わなきゃ）」

気づいた気持ち。なのはとともに確認し合った想いを、目の前に立っている青年に伝えよう。

「私、真司さんのこと……………」

ティアナ・ランスターは、城戸真司のことを

「馬鹿だと思います！」

間違えてとんでもないセリフを口にしてしまった。

「（って違うー！！確かに真司さんのことはすごくいい意味での馬鹿だと思ってるけど、こんな風に言ったらただの罵倒になっちゃう

うじゃない！」

「そ、そんなあ……いきなりそんなことをぶっちゃけないでも……」

「予想通りに落ち込んでるし！真司さん違うんです、今の言葉はです  
すね」

心に深い傷を負った真司に対して、ティアナが弁解しようとしたその時。

「真司さん！餃子作るのが上手ってティアに聞いたけど本当ですか  
！」

大食い少女・スバルが目を輝かせて勢いよく乱入してきた。

あの後結局真司との会話はうやむやになり、ついでにスバルを通し

て機動六課全体に真司の餃子のことが広まったのだった。

「（あの時は失敗してしまい、それ以来恥ずかしさが先行して真司さんには気持ちを伝えられずじまい。だからこそ、この勝負に勝ってデートに誘い、何とかタイミングをつかむのよ！）」

そのために、この人生ゲームには絶対に負けられないのだ。

「おっとこれは！ティアナ選手、なんと回想戦法を使ってきました！」

「…なんだそれは」

「回想戦法……それは今までの出来事を思い出すことによって負けれない理由を提示し、勝利を呼び込む高等な技なのです！」

クロノの質問に丁寧に解説するリイン。本当にそれは戦法と言えるのだろうか。

「……私は、負けない！」

そんな中、ついにティアナがルーレットを回す。

「す、すごい回転……！これは……」

スバルが驚くように、渾身の力が込められたルーレットは、ティアナの思いの強さを表すかのようにものすごい回転数で回り続ける。

やがて、ルーレットが回転を止め、指した数字は

「……6、ですって……？そんな、馬鹿な……」

打ちひしがれるティアナ。神は思いを聞きいれてくれなかったようだ。

「……まあ、はっきり言って回転数は関係ないしな」

今更な感じのクロノのツツコミが、空しく宙に響いた。

「はい、というわけで今回はここまでです！さあ、次回はいつたいどのような展開が待ち受けているのでしょうか！」

「ま、待て！まさかこの話を次回まで引つ張るつもりか」

「？そうですよ、何か問題でも？」

「……大丈夫だろうか」

#### 第十四話 欲望渦巻く戦い・中篇（後書き）

というわけで終わる気配すら見せずに次回に続くことになってしまいました。なんでこんな力オスになったんだろう……不思議です。さて、まあさすがに次回で終わらせますが、果たして勝者は誰になるのでしょうか。後々につながる伏線も入れようと思っていますので、物語の本筋の方にも期待しておいてください……一応。

感想や評価などあれば、気軽に寄せください。作者が大喜びします。

では、また次回。

……年を越せなかったガメルとメズールに黙祷。

## 第十五話 欲望渦巻く戦い・後篇（前書き）

新年あけましておめでとございます！今年もよろしく願いします！

## 第十五話 欲望渦巻く戦い・後篇

「さあ、ゲームが中間あたりにさしかかったところで、現在の状況を確認しておきたいと思います！」

というわけで、リアルの人生に影響を与えかねない人生ゲームの実況が再開される。

「まず1位を走っているのはこの勝負を提案した八神はやて選手！やはり政治家という職業が効果的に働いているのでしよう。しかし駒が一番進んでいるのはヴィータ選手！最も高価な家を購入しており、どちらが有利かは判断しがたい状況です！」

「2人以外の選手も引き離されないようなんとかついて行っている。まだ半分終わったただけだ、逆転の芽は十分残っていると見えるだろう……」

と、なぜかそこで意味深に言葉を切るクロノ。彼の視線の先には

「……未知の管理外世界で遭難だつて。あはは……」

ひとりだけ借金を作り、おまけに駒も完全に遅れているフェイトの



姿が。…あまりの不運ぶりに自嘲の笑いまで出ている。

「……ひとりを除いては、だが」

「おおつと！ここで解説のクロノ提督がフェイト選手の負けを確信しました！ですが私リインフォース？はあえて彼女に賭けてみたい！舞台は整った、今が逆転の時だ〜！！」

一方こちらは選手サイド。

「（ふっふっふ……ここまではとりあえずトップや。フェイトちゃんは今早くも脱落確定やし、他のみんなも引き離してやるで！）」  
「B  
Y 邪悪な笑みを浮かべる部隊長

「（2位だが下地はこちらが有利！フェイトの不幸ぶりには同情するけど、勝つのはこのあたしだ！）」  
「B Y 好戦的な目つきの守護騎士

「（3位か……でも最後まで勝負がわからないからこのゲームは人気なんだ。それを今から見せてやる！……ところで、さっきからリインの隣にいる人は誰だろう？）」  
「B Y 首をかしげる民間協力者

「（9位……私もまだまだということか。テストロッサはそれ以上のようだ……）」B Y何かを勘違いしているバトルマニア

「（6位だけど、まだまだ優勝を狙える位置だ！頑張るぞ）」B Y周りの殺気などどこ吹く風の元気娘

「（4位かあ。でも、私には負けられない理由があるからね）」B Y静かに闘志を燃やすエースオブエース

「（くっ……5位はなかなか厳しいけれど、諦めたらそこで闘いは終わりよ！絶対真司さんと……！）」B Y欲むき出しのフォワード陣の頭脳

「（……フェイトさん、大丈夫かな）」「B Y上司の心配をする年少ズ

「（あ、あはは……これは、ちょっと予想以上だなあ……）」「B Y笑うしかない執務官

若干例外はいるが、まだまだ皆やる気満々である。

「5か……はい、次はフェイトさんの番ですよ」

「うん……」

キャラに声をかけられ、おもむろにルーレットを回すフェイト。もはやぶつちぎりのビリが確定的になった状況で、一体何のために駒を進めるのか？そんな感じで心が折れそうになりながらも、一度始めたからには最後までやるのがルールだと思いなおし、彼女はプレイを続行する。

……そう、彼女は自身のゲーム運のなさに絶望していたのだが。

「……あ、サラリーマンの平社員から部長に昇進だ」

「よかったな」フェイトちゃん（せやけど、時既に遅しやで。もうフェイトちゃんと私の間には越えられない壁ができあがってるからな）

給料アップを喜ぶフェイトに対し、まったく危機感を抱かないはやて。

次の周回。

「あ、宝くじが当たって80000獲得。やっと風向きがよくなってきたかな」

「（ほう、なかなかやるやないか。でも今更80000手に入れたって、所持金700000の私には到底……）」

さらに周回が進み。

「臨時ボーナスで50000獲得だ」

「ルーレットを当てて100000プレゼント。やった」

「偶然油田を掘り出して200000の利益……すごい」

「フェイト選手またも大金ゲット！現在第5位、これは勝負がわからなくなってきましたー！！」

「……し、信じられない。あのフェイトが……まるで、今まで溜めていたゲーム運を一気に吐き出しているようだ」

大いに盛り上がる実況席。

「……おいはやて。なんかまずくないか、これ」

「そつやな……いつの間にか差が大幅に縮まっとる」

一方、上位陣はまさかの猛追に気が気でない。ヴィータとはやては、ひそひそとフェイトの危険性を語り合っている。

「すごいですよフェイトさん！勝てるんじゃないですか？」

「…うん、自分でもびつくりだよ」

興奮して声をかけてくるエリオに、フェイトは多少照れが入った返事をする。

「…と、とにかくや。ゴールまではあと少し、へまをせんかったら追いつかれることは多分ない！」

追い上げられているとはいえ、まだ差はそこそに残っている。こち

らが大幅に金額ダウンしない限り、負けはないはず　　はやては  
気を取り直してルーレットを回す。

……だが、彼女は失念していた。

その思考は、負ける人間が頭に浮かべるものだということを。

「……は？『大地震発生。自分を含め、前後10マスのプレイヤー  
は100000失う』……嘘やろ」

「って俺達も巻き添えかよ!？」

「何してくれてんだはやて!」

とんでもない地雷マスを踏んだはやて。ほとんどの駒が固まってい  
たため、真司やヴィータなど、大多数のプレイヤーに被害が及ぶ。

「……はあ、よかった」　11マス後ろ

「っ、やられた……管理外世界で遭難したのも、ここで損失を免れ  
るための伏線だったんだ……」

ティアナの解説が入り、そんな馬鹿なと打ちひしがれる上位陣。

そんな中、ひとり奮起してルーレットを回す真司。

「くっ、でもまだ終わってないぞ！ここからいいマスを踏めば、俺の『大地震発生』……………嘘だろ」

結果。

「なんとなんと、まさかまさか！あれほどぶっちぎりで最下位を走っていたフェイト選手、大逆転勝利です……！！」

「……いい試合だった」

リンとクロノの拍手が部屋に響き渡る。それを聞き、さらに負け

た事実を痛感するはやて達。

「…えーと、それでは見事1位になったフェイトちゃん。あなたの望みはなんでしょうか」

「……本当にいいのかな」

戸惑いを見せるフェイトだが、彼女に対してはやてを始め、一同が首を縦に振る。勝負は勝負、潔く負けを認めるのが筋というものなのだ。

「えっと、それじゃあ……」

フェイトも誰かにお願いをすることを決めたようで、ぐるっとまわりを見渡し

「…よかったら、今度買い物につきあってくれないかな…真司」

申し訳なさそうに頼み込んだ。

「へ？俺？」



「「「ちょっと……むぐむぐ」」」

フエイトのご指名に驚く真司。一方、思わず立ち上がりそうになったのはティアナは、口をはやてに塞がれる。

「うん。ちょっと買う物について聞きたいことがあるんだけど……いいかな」

「そんなんでいいんだったら全然OKだよ」

「ありがとう。そう言ってもらえると助かるよ」

というような感じで、罰ゲーム(?)は真司に決定。

「あゝ、ところで……そろそろ彼に自己紹介させてもらってもいいかな」

「あれ？クロノ君、いつからおったん？」

「絶対気づいていただろう……」

真司の前に歩いてきたクロノに、はやてのからかいの言葉が飛んでくる。

「『クラウドディア』という、時空を移動する船の艦長をしているクロノ・ハラオウンだ。よろしく」

「ご丁寧に、どうも。俺は城戸真司って言います。こちらこそよろしく願います、クロノさん」

「敬語はよしてくれ。はやてからの報告によれば、君と僕は同年代のようだから」

何かすごそうな役職の人だと思って丁寧な言葉づかいをした真司だが、どうやらそれは杞憂に終わったようだ。

「じゃあ改めて…これからよろしく。なのは達から聞いてたよ、フエイトには頼りになるお兄さんがいるって」

「……そんなことはないさ」

そう答えるクロノの顔は、若干照れているように真司には見えた。

光あるところには、必ず影がある。それは世の中の摂理だ。

機動六課が人生ゲームに興じていたその頃。

誰も寄りつかないような廃ビルの地下に作られた大きな部屋に、  
2  
人の男がいた。

「…おい、奴の『同期』はどうなった」

「うん?…ああ、失敗したと思うよ」

片方の長髪の男の質問に、もう一方の短髪の男は軽い調子で答える。

「……なぜわかる」

「なぜって……いつも言ってるだろう？『俺の占いは当たる』……さつきあいつが不機嫌そうな顔して出て行くのも見たしね」

「そついうのは『根拠のある推測』というんだ」

「あらそつ」

長髪の男の呆れたような調子の言葉にも、短髪の男は動じない。

「……まあ、急ぐ必要はない。今の段階では、『龍騎』は泳がせておいても構わないからな」

「悪役みたいなセリフだな。しかもそんな悪そうな笑みまで浮かべちゃって」

「当然だ。……待ち望んでいた大願成就の時が、着々と近づいているのだからな。……ふ、ふふ……」

闇は、着実に動き始めていた。

## 第十五話 欲望渦巻く戦い・後篇（後書き）

ギャグ回の最後に思いつき重要そうなシーンを入れる……まるでカブトの黒包丁回のようなですね。

予想していた方もいたとおりフェイトが勝利、真司とお出かける約束を取り付けました。彼女はまだなのはとティアナの気持ちに気づいていません。おかげでこんなことになりました。

感想や評価などあれば、どんどん送っちゃってください。

では、また次回。

P・S・真司の年齢について補足です。というのも、以前書いた設定で23歳と僕が言っていたんですが、すみません、あれ間違いです。ちよつと勘違いしていたんです。

確かに龍騎本編では真司は23歳ですが、実は最終回の「少しでも幸せになった世界」での新聞の日付が1年進んでいるんです。おそらく北岡先生の病気が治ったということを示すためなのでしょうが、これによりあの場面での真司は24歳ということになるのです。よってクロノと同年。Q・E・D（ちよつとかっこつけてみた）

第十六話 シゲナムのシゲナムによる真司のための特訓（前書き）

柏原さんマジ化け物。

## 第十六話 シグナムのシグナムによる真司のための特訓

様々な思いが交錯した人生ゲームから数日後。

「……さて、お前を鍛え始めて3週間ほどになる」

いつものように開始するかと思われたシグナムによる真司の訓練だが、今日はなんだか様子が違った。

「今まで下半身の強化を中心に行ってきたが、正直に言うと少し厳しくやりすぎたような気もする。よく着いてきたな、城戸」

「俺も心からそう思うよ……結局亀甲羅を背負ったまま走る羽目になったし」

ジャーナリストとしてあちこち走り回ったりはしていたものの、毎日日本格的な走り込みをさせられて、真司としてもそろそろ体にガタが来るんじゃないだろうかと本気で心配していたのだ。

「身体的基础はできあがっただろう。…だから、ここからは実践のための訓練に移る」



「よし! どんと来い!」

それでもやる気はあるらしく、真司は威勢よく返事をする。シグナムも心なしが表情が緩むが、すぐに真剣な顔つきに戻り、口を開く。

「城戸。……お前が今最も苦戦するであろう敵は、どんなタイプだと思う?」

「へ? 苦戦って……そりゃいっぱいあるだろうし……」

うーんと考え込む真司を見て、シグナムは

ヒュンッ

「うわっ!?! いきなり何するんだよ」

いきなり鼻先数ミリのところに拳を突き出され驚く真司だが。

「……反応できなかったな。私が敵だったなら、お前は殴り飛ばされてた」

シグナムの言わんとすることを理解し、そしてハツとする。

「それってつまり……速さが足りない？」

「というより、速い敵に対する対処ができない。そう言った方が適切だ」

拳を引つ込めたシグナムは、そのまま説明に入って話を続ける。

「『龍騎』が使えるカードは、どれも高い効果を持っている。実体のある分身を作りだす。一時的に高速状態になる。龍 ドラグレッダーと言ったな 奴を呼び出す。……だがその反面、カードを使う戦法には大きな欠点がある」

「……同じカードは、一度しか使えない」

真司の回答に頷くシグナム。

「そうだ。連戦になればなるほど、お前はどんどん不利になっていく。…特に危険なのが、スピードのある相手だ。パワーで分があったとしても、圧倒的なスピードの差の前では無意味に等しい。カードがなければ勝ち目はないだろう」

……この欠点は、真司も薄々感じていたことだった。1対1なら、シグナムともなのはともいい勝負ができた。なぜなら、カードを温存する必要がなかったからだ。

だが実戦となればそうはいかないだろう。いつ新たな敵が襲ってくるかわからない。素人である真司でもそれくらいはわかる。

「もちろん、常にお前ひとりで戦場に乗り込むわけではないが……できるだけカードを使わないで勝つに越したことはないだろう」

「……そうだな。よし、ご教授お願いします、師匠！」

「……その呼び方はやめないか」

どさくさに紛れて試してみた新しい呼び名は速攻で却下された。

「で、具体的にはどうすればいいんだ？」

気を取り直して講義が再開される。

「スピードのある者　ひいては攻撃を当てにくい者全般に有効な対処法……そうになると、やはりカウンターということになる」

「カウンターかあ。何かカッコ良さそうだな」

憧れるような仕草を見せる真司に対して、シグナムは目を細める。

「…何を想像しているのかは知らないが、カウンター自体はお前もやっていただろう」

「え、俺が？……いつ？」

覚えていないのか、とため息をつきながらも、シグナムはそれを説明する。

「相手の攻撃の隙について強烈な一撃を加える。これがカウンター

の基本だ。……まず1回目は私との模擬戦の時。空中を移動できる私に対し、お前は盾で防いだ後にレヴァンティンをつかみ、私を強引に地上に落とした。……2回目は高町を止めようとした時だ。あいつのデイベインバスターが分身を攻撃している間に、お前はレイジングハートをはね飛ばした。やや特殊ではあるが、これも十分力ウンターと呼べるものだ」

「なるほど。……でも、両方ともカード使ってるな」

「やっぱ駄目か、と呟く真司。そして、シグナムはまよめの言葉を口にする。

「カウンターの本来の形は、当然『攻撃を受ける前に相手の勢いを利用して叩く』だ。そのためには相手の動きを目に捉え、次の動きを予測する必要がある。お前にはこれからその力を鍛えてもらう」

「なんか難しそうだな……」

「後ろ向きに考える前に実践だ。うってつけの相手が来てくれることになっている」

シグナムがそう言った直後。

「ごめん。ちょっと仕事があつて来るのが遅れちゃった」

「……フェイト？」

訓練場に謝りながら入ってきたのは、フェイト・T・ハラOWNだった。

「テストロツサは機動六課最速のスピードを持っている。リミッターがかかっているとはいえ、十分お前を混乱させることができるはずだ」

「……というわけらしいから、今日はよろしくね、真司」

「あ、ああ……よろしく」

「では早速、2人とも戦闘態勢に入ってくれ」

「……今日はこの辺で終わりにしよう」

シグナムの言葉により、フェイトは動きを止め、真司は変身を解除してその場に座り込む。

「……参ったな。全然着いていけないぞ……」

まさにスピード地獄だった。フェイトの動きを目で追うのがやっとだった真司は、結局一撃も与えられずじまいだったのだ。

「そんなことないよ。結構惜しい攻撃もあったし、訓練を積みめばすぐに当たるようになると思う」

「とりあえず現在の状態は掴めただろう。今日の感触を忘れるな」

これからまた厳しくなりそうだなと感じながら、  
気を引き締める真司であった。

「ふう、今日も疲れたな……」

休憩所でジュースを買いながら、真司はひとり呟く。



「これは部屋で飲もうかな」

そう思い、自分の部屋に戻っている途中。

「……あれ、なんか落ちてるぞ」

ふと通路に落ちている紙に目がとまり、真司はそれを拾い上げる。

「……内容はわかんないけど、書類みたいだな」

このまま放っておくわけにもいかないだろうと思い、真司ははやくのいるであろう部隊長室に向かう。とりあえず一番偉い人に渡しておけばいいのではないかという思考の結果だ。

そんなわけで部隊長室の前まで移動した真司は、書類を手にとって部屋に入る。

「はやく、ちょっとこれ見てくれるか」

が、真司の言葉は最後まで続かなかった。なぜなら、

「…すう、すう……」

声をかけようとした相手が、机を枕にして椅子に座ったまま眠っていたからだ。

「……可愛い寝顔だな」

普段はよくからかわれているから忘れがちだが、こうして寝息を立てているを見ると、間違いなくはやても年下の少女なのだと感じる。

……同時に、そんな少女が背負っているものの大きさも思い出される。

「（……軍隊の部隊ひとつのトップにいるようなもんなんだよな。普段は元気にしてるけど、きつといろいろ気苦労だつてあるはずだ。そりゃ作業の途中で眠っちゃうはずだよな……）」

こんな場所で眠ったままにさせておくのもよくないが、気持ちよさそうに眠っている姿を見ると、起こすのもなんだか憚られる。

「とりあえず……俺の部屋から毛布でも持ってくるか」

チュンチュンチュン

「う……あれ、私………」

八神はやてが目覚ますと、目に入ってきたのは作業机で、自らは椅子に座っている。

「……って小鳥さえずっとるし！？完全に朝や」

寝てしまったことに気づいたはやてだが、次の瞬間彼女が目にしたものは

「……え？真司君？」

少し離れたところで椅子に座っている城戸真司の姿。

「……へ？ちょ、ちょい待ち？まさか……」

反射的に自らの着ている服を確認するはやて。……特に乱れてはいない。

と、その時。

「ん……ふわあ。…あれ、俺寝ちゃったのか」

「っ！？」

真司が目を覚まし、はやては思わずビクつく。

「…あ、はやて。起きてたんだ」

「あ、あの…真司君？なんでここに……」

恐る恐る尋ねるはやてだが、対する真司はあっけらかんと答える。

「ああ、ちょっと書類みたいなものを拾ったからはやてに届けようと思ったんだけどさ。ここに来てみたらはやてが寝てたんだ。それで、とりあえず俺の部屋の毛布をかけておいて、あんまり長い間眠ってるようなら起こしてベッドに行かせようと思ってただけど…途中で俺も寝ちゃったみたいだな」

「……ああ、そういうこと」

安堵の息をつくはやて。同時に、あっち系の想像をしてしまった自分を恥ずかしいと感じる。

そして言われて初めて、自らの背中にかかっている毛布に気づく。

「…ありがとな。わざわざ毛布かけてくれて」

「礼を言われるようなことじゃないよ。……それよりはやて」

「ん？」

「大変だろうから、困ったことがあったら何でも言ってくれよ！で  
きる限り協力するからさ！」

「……………え？」

いきなりの真司の言葉に面食らうはやて。

しかし、徐々に彼の言いたいことを理解していく内に、自然と顔が  
ほころぶ。

「じゃあ、気が晴れるから一発ギャグをどうぞー！」

「えええ！？ちょ、いきなり言われても……………」

はやての発言を真に受けて、あたふたする真司を見て、彼女は声を  
出して笑う。

「じょーだんやじょーだん。なんかあつたらその時頼ませてもらう  
わ。それより、拾った書類見せてくれん？」

「…なんだ、びっくりした。えーと、書類は……あ、椅子の下に落  
ちてる」

そう言つて真司は書類を手にとろつとする。

「……………ありがとうな」

「？今何か言つた？」

「ううん、何も」

こつそりつぶやいた感謝の言葉は、案の定真司の耳には届かなかつ  
た。

## 第十六話 シグナムのシグナムによる真司のための特訓（後書き）

人生ゲーム回ではやてには散々みんなを振り回す役をさせてしまったので、今回はちょっぴり女の子らしい一面を描きました。

実は今回で第一章は終了です。これからヴィヴィオ登場、そしてナンバーズとの本格的な戦闘が始まっていくため、ここで一区切りということです。

ここまでいかがだったでしょうか。よろしければ、今までの展開等についての評価や感想をいただけるとうれしいです。

では、また次回。



## 第十七話 機動六課のある休日？（前書き）

今回から第二章です。まあ今回はシリアスっぽくないですが。

## 第十七話 機動六課のある休日？

『魔法と技術の進歩と進化は素晴らしいものである。が、しかし！それがゆえに我々を襲う危機や災害も十年前とは比べものにならないほどに危険度を増している！』

なのはやフェイト達隊長陣と朝食をとっていた真司がふとテレビに目を向けると、いかにも屈強そうなごつい男性が演説をしている映像が出ていた。

なんとなく気になったので、隣に座っているフェイトに尋ねてみる。

「フェイト、あのおじさんて誰なんだ？」

「レジアス・ゲイズ中将。時空管理局地上本部の総指令だよ」

「総指令？ということとは…やっぱり偉い人なのか」

「そうだね」

「にしても、このオッサンはまだこんなことを言ってるよ」

「レジアス中將は古くからの武闘派だからな」

レジアスの演説を呆れた様子で眺めるヴィータと、それに答えるシグナム。よくわからないが、どうやらここにいる人間は彼のことをあまりよくは思っていないらしい。

「あのレジアスさんって、なんか問題あることでもしてるの？」

悪徳政治家みたいなものをイメージしながら聞いた真司の質問に答えたのははやてだ。

「いや、一概にどう、っていうわけにもいかん感じやな。実際、レジアス中將が地上の軍備を増強したことで、ミッドチルダの犯罪は減少したわけやし」

「…ただ、ちよつと考え方が極端なんだよね」

はやての言葉を引き継いだなのは、そう言って少し困った顔をする。

「ふーん…いろいろあるんだなあ」

ここに来て日の浅い真司には事情は理解できないが、きっとこの世界でも元いた世界のように様々な考えを持った人物が国などを動かしているということだろう。

「あ、そうだ。真司、すっかり言い忘れてたんだけど……」

何か大事なことを思い出したらしいフェイトが真司の方を向く。

「この前約束した買い物のことなんだけど……今日でいいかな？」

カタッ

「……どうしたんだのは。いきなりフォーク落したりして」

「ふえ！？ な、何でもないよ、にやはは……」

明らかな動揺を見せるなのはにヴィータが反応するが、なのはは笑顔を取り繕ってその場をしのぐ。

一方真司の方はうなずいて、

「もちろんいいよ。シグナム、今日はティアナ達も訓練休みだし、OKだよな」

「構わないぞ。約束していたのだからな」

フォワード陣の訓練は、今朝でめでたく第二段階を終えたようで、今日一日は羽を伸ばすことになっているのだ。そういうわけで、シグナムも快く休息の許可を与えてくれた。

「よかった。じゃあ、30分くらいで出かける準備してくれるかな」

「はい」

というわけで、しばらく経った後。

「ハンカチ持った？IDカード、忘れてない？」

「は、はい……」

キャロと一緒に出かけることになっているエリオに対し、フェイトが最終チェックを行っていた。細かいことまで聞いてくるフェイトに、エリオは何か言いたげな様子だ。

「お小遣いは足りてる」

「フェイト姉さん、僕ももう10歳なんだから大丈夫だよ」

「……姉さん？」

いきなりの発言に面食らうフェイト。だが、すぐにその声がエリオの背後から聞こえてきたことに気づく。

「し、真司さん！？なにしてるんですか！？」

後ろを振り向いたエリオはそこでしゃがんで彼の声真似をしていた者 城戸真司の存在に気づく。

「エリオの心の声を代弁してた」

「代弁って、僕そんなこと思ってたな」

あっけらかんと言う真司に対し、エリオはツッコミを入れようとする。

「思ってるだろ。『姉さん』は冗談だけどさ」

が、それを遮ると、真司は腰をあげながらエリオとフェイトを交互に見つめる。

「『そんなに心配しなくても、僕は大丈夫』ってエリオは思ってた。それは間違っていないと思うけどな」

「そ、それは…そうですね」

「…そうなの？」

こくんとうなずくエリオを見て、フェイトが尋ねる。

「はい…僕も、もうお給料もらっている身ですから……」

「男だもんな。ある程度年取ったら、自分の力でいろいろやってみたいと思うもんなんだ。だから、フェイトもそこまで気にかかる必要はないんだよ」

自身の子供のころを思い出しているのか、懐かしげな表情で真司は語る。

「…そつか。そういうものなんだ。じゃあ、しっかりキャラをエスコートしてあげるんだよ」

「はい！」

小さく頷いた後にフェイトがかけた言葉に、エリオが元気に返事をした時。

「ごめんなさい、お待たせしました！」

支度を整えたらしいキャラが、向こうから小走りでやってくる。



「おっ、似合ってるじゃん」

「かわいいよ、キャロ」

ピンクと白をメインとした、女の子らしい服装をしたキャロに、真司とフェイトが言葉ををかける。

「ありがとうございます」

「サイズは大丈夫？」

「はい！すっごくばっちりです」

うれしそうに服を見せるキャロ。遊びに行けるのだ、小さな子供ならはしゃいで当然だろう。

「……………」

エリオはというと、そんなキャロをばーつと見つめている。キャロの方もそれに気づき、彼の方を見つめ返す。心なしか、2人とも頬が赤く染まっている。

「ひゅー、お二人さん、これはお熱いことで」

「ウエ！？な、何言ってるんですか真司さん!？」

「は、はわわ……」

真司の冷やかしに、ゆでダコのように真っ赤になる2人。

「……真司、あんまりからかっちゃだめだよ」

「ははは、わかってるって。2人とも、楽しんできなよ」

「は、はい………そういえば、真司さんとフェイトさんも買い物に出かけるんですね？」

「……そちらも、楽しんできてくださいね」

照れを隠すためか、多少早口で話題を切り換えるエリオとキャロ。そんな様子を微笑ましく感じながら、真司とフェイトは頷くのだった。

「……お兄ちゃん」

城戸真司がいた、もとの世界。そこに存在する、人間が住んでいるのとは違う、鏡の世界　ミラーワールド。

「真司君は、大丈夫かな」

そこにいる2人の兄妹の妹が、心配そうな顔で兄に尋ねる。

「……歪みは、予想以上に肥大しようとしている。『あのカード』を使わなければ、厳しい事態に陥ることになるだろう」

「でも、あのカードは」

「そうだ。カードデッキとそのカードは、この世界で生まれたもの。異世界に存在していることにより、その力が発現しづらい状態になっている。それが原因で、いまの奴には、切り札のカードを使うことができない」

淡々と現状を語る兄。それを聞く妹は不安を表情に出すが、やがてそれは希望を持ったものに変わる。

「きっと大丈夫だよ。真司君なら……きっと」

## 第十七話 機動六課のある休日？（後書き）

というわけで約束通りフェイトとお買い物です。次回はほぼずっとフェイトのターンとなるのであしからず。ヴィヴィオは次々回あたりから登場です。

第二章はナンバーズとの戦いが主です。よろしければ、これからもこの駄作にお付き合いいただけるとうれしいです。

では、また次回。

第十八話 機動六課のある休日？ キャラ崩壊は免れないのかもしれない（前書

久しぶりの投稿ですが、今回短いです。すみません。やっぱり受験まで1年切ると忙しい……

第十八話 機動六課のある休日？ キャラ崩壊は免れないのかもしれない

「ねえ、ティア」

「ん？なに？」

休日を与えられたということで、スバルとティアナは現在街へ向かってバイクを走らせている。操縦はティアナで、手慣れた様子のハンドルさばきだ。

「ホントは今日、真司さんと出かけたかったんじゃないの？」

「ぶっ！？」

もつとも、そのドライブテクニックはスバルの発した一言で一気に崩れ去ったが。

ティアナが動揺したことにより一瞬車体が揺らいたが、すぐに体勢を立て直す。

「うわっ、危ないよ」

「あ、あんたがいきなり変なこと言うからでしょうが！」

スバルに対して怒鳴るティアナだが、顔を照れで真っ赤にしているためまったく迫力がない。

「でも実際そうなんでしょ？フエイトさんが先に約束取りつけないか  
ったら誘うつもりだったんじゃないの？」

「そ、そんなこと……あるといえばあるけど……」

小さく首を縦に振るティアナに、スバルはさらに追撃をかける。

「やっぱり、今2人が何してるか気になっちゃった？」

「……………」

「え？エンジンの音で何言ってるか聞こえないよー」

「……………よ」



「うーん？なーに？」

さらにからかわれ続けた結果、ティアナは

「あああ！あーそうですよ氣になりますよ！本当は今すぐバイク全力疾走させて真司さん達追っかけたいわよ！！それってストーキングですって？知らないわよそんなもの、我ながらどうかと思うけどこの気持ちはどうしようもないのよコノヤロー！！」

一言で表すと、壊れた。

「ちょっ、ティア！？なんかおかしいよ？なんか大切なものが外れちゃってるよ？落ちて着こっ、ね？」

「そうね、まずは居酒屋にでも行って酔いつぶれるのがいいわね」

「何の話！？私の話のどこを聞いてたの！？ていうかそれ以前に私達未成年だよ！」

実は先ほどのからかいの言葉、はやてから仕込まれたものだったのだが、思った以上の効き目に実践しなければよかったと感じるスバルであった。

一方、機動六課では。

「なのはちゃんどうしたん？さっきからぼーっとして。……さては」

「え？わ、私、別にフェイトちゃんと真司君が何してるかな？なんてこと考えたりしてないよ？」

「すがすがしい自爆っぷりをどうもありがとう」

自ら墓穴を掘ったなのはに、はやてはにやりと笑みを見せる。

「ひょっとして、今日の一件でフェイトちゃんが真司君に惚れる、あるいはその逆、いやあるいは両方が起きてしまうかも……と思って

るん？」

「いや、さすがにそこまでは……だって、一緒に買い物に行くだけだよ？」

額に汗をかきながら、なかば自分に言い聞かせるように首を横に振るのはだが。

「あまーーーーーい！……！」

「ふ、古い！？しかも使い方が違うよはやてちゃん！高速のワゴン車が出っ込んでくるよ！」

「甘いでなのはちゃん。『時々理屈に合わないことをするのが人間なのよ』と、かの有名なお風呂大好き小学5年生も言っとるんやで」

「いやだからそれも使い方間違ってるよ！今度はタイムリーなセリフだけど！もうすぐ映画だけど！」

「あの名言を一字一句正確に再現せんかったら怒るで。ただでさえあのシーンが改変確定で残念やっていうのに……」

「はやてちゃん、どんどん話がずれていつてるよ……」

ツツコミに疲れたのか、なのははだらけた表情でそうつぶやく。それを聞いて、はやても本来の話題を思い出したようだ。

「こほん。……とにかく、恋愛を甘く見たらあかんでなのはちゃん。種は知らず知らずのうちにまかれてるもんや。あとはちよっとイレギュラーな出来事が起きれば……もしかしたらもしかするかもしれない」

「ええ〜っ!? はやてちゃん、それ本当!？」

「ウン」

ズコーッ!と床に滑りこむのは。どうやら本気で2人のデート(みたいなもの)を心配しているらしい。

「ひどいよはやてちゃん。私本当に気にしてるんだから……」

「そんなに心配せんでも、漫画やアニメじゃあるまいし、そう簡単に恋愛感情が芽生えるなんてことはない! 断言する」

「そ、そうかな……」

で、話題の当人達かというと。

「ふーん。エリオやキャロ達にケーキを作ってあげたい、ね」

「うん。いつも頑張ってるから、何かしてあげたくて。でも私、あんまり料理としかしたことないから、真司に力を貸してもらいたいの。料理、上手なんでしょう？」

「いや、俺は餃子を上手に作れるだけで、ケーキなんてこじやれたものはちゃんとできるかどうか……」

フェイトの言葉に、申し訳なさそうに返す真司。

「そうなんだ……………」

……とはいえ、かわいい女の子が困っているのに手助けしない理由はない。

「でも、とりあえずは頑張ってみるよ。2人で力を合わせれば、どうにかなるでしょ」

「…………ありがとう、真司」

うれしそうな笑顔を見せるフェイト。それを見て、真司は新鮮な感覚を覚えていた。

「（例えば、OREジャーナルには令子さんを始め、普通じゃない女性ばかりだったからな）。…フェイト達みたいな純粋な女の子って、やっぱりいいよな）」

その頃、フォワード年長2人組は。

「……ティア、さっきから何食べてるの？」

「ウイスキーボンボン」

「……いや、確かにお酒入ってるけどさ……」

次回に続く。

第十八話 機動六課のある休日？ キャラ崩壊は免れないのかもしれない（後書

というわけでほぼ話が進まずに1話終わりました。すみません、ヴィヴィオは次々回になりそうです。つかフェイトのターンとか言ってたのはなんだったんでしょうかね…次回は絶対フェイトのターンです。

あ、ちなみに改変されたあのシーンとは「いいわ、撃って！」のあたりです。わかる人だけわかってください。というか、新キャラ投入すればいいってもんじゃないと思うんだけどな……見る前から文句言っても仕方ないですけど。てか予告に1カットも出てないってことはミクロス存在抹消ですかそうですか。

感想や評価などあれば、いつでもお気軽にお寄せください。

では、また次回。



第十九話 機動六課のある休日？ フラゲっていつのは知らず知らずのうちに

前回コントしかしていなかったなので、今回は早めに次回投稿せざるをえまい、ということぞ。

第十九話 機動六課のある休日？ フラゲっていうのは知らず知らずのうちに

「……というわけで、とりあえず材料をそろえるところまでは完了  
つと」

デパートで本屋に行き料理本を買う おいしそうでかつ作れそうな  
ケーキを選ぶ 本に書いてあるレシピの材料を購入する、というあ  
る意味お決まりの行程を終えた真司とフェイトは、近くにあった公  
園のベンチに座っていた。

「買い忘れとか、ない？」

「うん、大丈夫だよ。手伝ってくれてありがとう、真司」

軽く頭を下げるフェイトに、真司は頭をかきながら首を横に振る。

「いやいや、これ罰ゲームだからさ。お礼言われる理由なんてない  
よ」

「そうかもしれないけど、本当に助かったから。……エリオやキヤ  
口達、喜んでくれるかな……」

心底うれしそうな顔をするフェイト。きっと、みんなのことを本当に大事に思っているんだろう。今朝のやりとりを見るに、エリオやキャロについては特にその傾向が強いようだ。

「エリオやキャロって、まだ10歳なのにすごいよな。……2人も、親と離れてホームシックになったりしないのかな」

真司としては、勇敢に戦っている少年少女を気づかっただけの何気ない一言だったのだが。

「……………それは」

フェイトの表情が変わり、その目はどこか遠くに向けられる。

「…本人の許可なしに話せるようなことじゃないから、詳しくは言えないけど……色々あって。2人とも、生みの親に会えるような状態じゃないんだ。今は、私が2人の保護者になっているの」

「あ……………そう、なのか」

聞いてはいけないことを聞いてしまった。そう思い、真司は言葉の歯切れが悪くなる。

ティアナもそうだったことを考えると、機動六課のメンバーには辛い過去を背負っている者が多いようだ。うっかり人の心に土足で踏み入るような真似はしたくない。これからは注意するべきだ。

「……だから、なんとかあの子達に寂しい思いをさせないように、普通の子みたいに楽しく生活してほしい。そう思って、頑張ってるつもりだけど……うまくできているかどうか。今朝だって、ちよつとエリオに過保護になっちゃったし」

ぽつりぽつりと、日ごろの不安を吐き出していくフェイト。

「その点、真司はすごいよ」

「え？俺？」

「私よりもずっと短い間しか接していなくても、あの子達は真司を慕っている。ティアナのことだって、真司がいなければ問題がこじれちゃったかもしれない。……私も、あなたみたいに」

「買い被りすぎだよ」

フェイトの言葉を遮り、真司は話し始める。

「エリオ達が心の底で頼っているのは、間違いなくフェイトだと思うよ。俺なんて、まだまだ『近所の面白い大人』くらいの認識だよ。……そもそも、そこまで気負わなくなつて、フェイトの思いやりだけで、あの子達は満足できるんじゃないかな。もつと力抜いていいと思うよ」

「……そうかな」

やはり心配事が残るのだろうか、フェイトの表情は微妙に晴れない。真面目な彼女ゆえ、つい考えすぎてしまうのだろう。

どうしたものかと思う真司だが、急に何かを思いついたようにぽんと手を叩く。

「それじゃ、こうしよう」

妙案だと考えつつ、真司は口を開く。

「フェイトはエリオとキャロのお姉さんみたいなもんだろ？ だったら、俺があの子達のお兄さんになるよ」

「…………え？」

いきなりの突拍子もない発言に、フェイトは一瞬硬直する。

「フェイトは女の子らしくエリオ達を優しく…なんかこう、包み込む？みたいな感じで、俺が男の観点から足りないところを補っていい。どう、いいアイデアでしょ？」

「で、でも……………」

「別にフェイトがひとりで背負わなきゃいけないことでもないんだし。これから頑張るから、よろしく！」

半ば強引に話を持っていった真司は、最後にフェイトに向かって笑いかけた。

「（あれ…………？）」「

フェイトは、城戸真司という青年を高く評価していた。おつちよこちよいなところはあがあるが、純粹に他人のことを思って行動できる点は、なかなか他の人間にはないものだ。

だが、あくまでその評価は客観的なものであつて、それ以上の感情を彼に抱いているわけではなかった。彼女の評価は、真司がなのはやティアナといった『自分以外の者』に向けた優しさによって築き上げられていたのだから。

しかし今、その優しさを己に向けられたその時。

「（…なんだか、変な感じ……？）」

フェイトは、今まで感じたことのないような何かが心に存在することを認識していた。

「そろそろ帰ろうか？」

「ふえ？あ、うん……」

真司の言葉にドキツとしながらも、フェイトは帰途につくためにベンチから腰を上げた。

「帰ったら早速挑戦してみようか」

「そうだね」

先ほどの心の異物は少し経ってなくなったため、フェイトは平静に戻って真司と言葉を交わしていた。

「（さっきのは一体何だったんだろう………ちょっと疲れてるのかな。真司の言うとおり、もう少し肩の力を抜いてみようかな）」

などとフェイトが心の中で考えていたその時。



「突撃！街角のカップルにインタビュー！！」

「……は？」

いきなり目の前に現れた若い女性アナウンサーとカメラマン達に、意図せずフェイトと真司のセリフが被る。

「突然ですみませんが、来週のテレビ番組」

「でカップル

の方に対するインタビューの映像を流させていただきますのでご協力ください！」

「あ、あの、申し訳ないんですけど、俺達は別にカップルじゃ」

「ちなみに拒否権はありません！」

「ないんですか！？」

「というわけでインタビュースタート！カメラ回しまーす」

人の話聞けよ！と内心思いながらも、真司は事態がどんどん進んでいることを感じ、急いでフェイトに耳打ちする。

「フェイト、どうする？このまま走って逃げるって手もあるけど……  
ってあれ？」

ある程度話したところで、真司はフェイトの様子に気づく。

「か、かカップルっ！？かかっ！？」

「なんかおかしくなってる……っ！？」

頬を朱に染め、明らかに混乱している状態のフェイト。カップルと間違えられただけでこうなるということは、余程その手の方面に疎いのだろうと真司は予想する。

「じゃあまず第一の質問！」

予想している間にインタビューが始まってしまった。

「ああもついいや、とりあえずテキトーに答えて」

「A B C Dのどこまでいきましたか？」

「いきなり何聞いてんの！！？何時に放送する気なんですかこのインタビューー！？」

初っ端から危ないというかほぼアウトの内容の質問に思わず突っ込む真司。

「へ？7時からですけどなにか問題でも？」

「ミッドチルダ大丈夫なのコレ！？エリオ達が大人びてるのこれが原因じゃないの！？」

どう答えるべきか真司は戸惑う。…というか、カップルと聞いただけであれだったフェイトは今一体どういう状態に

「Cです」

「えええええ！？」

普通に滅茶苦茶なことを答えていた。

「（ちよっ……フェイトさん？ひょっとして胸の大きさのこと聞かれてるでも思ったの？違うから、この人達もつとひどい話題口にしてるから！）」

「おお。では次の質問。『初めて』はいつですか？」

「（また何てこと聞いてんだこの人は！）」

「先週です……」

「（そしてフェイトはなんで答えるの！？一体何と勘違いしてるのか皆目見当がつかないよ！）」

普段の彼女はどこへやら、完全に冷静さを欠いてしまっているフェイトに困惑する真司。訂正する機会もなく、話がどんどん進んでいってしまう。

「では、お互いのどういうところに惚れたのでしょうか？」

「（なんでここに来て普通の質問なんだ、こういう質問を最初に行

うべきなんじゃないのか？…いや、そもそもああいう質問すること自体が間違ってるんだけど」

ツツコミどころはあるが、初めて出たまともな質問だ。とりあえず、これはフェイトのいいところを言っておけばいいだろうと真司は考える。

「えーっと…美人で、真面目で、優しいところですかね」

本心から思っていることなので、特に言葉に詰まることもなく答える。

一方フェイトは。

「え、惚れたところ……？えと、その、あの……はうつ」

「（フェイト…これはカップルを装ってテキトーに答えようっていう作戦なんだけど。どうしてそこで顔を赤らめるんだ？どうしてそんなにもしもじしてるんだ？）」

……正直かなり可愛い仕草なのだが、真司としてはこの妙な空気に耐えることができない。

「彼女さんの方は照れちゃってますね。では、次が最後の質問です」

よし、と心の中でガッツポーズをする真司。次さえ乗り切れば、このよくわからない空間から解放され

「愛のキスを交わしてください！」

「（ってこれ質問じゃないんだけど……）」

もはやただの要求となったインタビュー。こんな言葉をぶつけられ  
たら、フェイトが……

ぼんっ！

「……………きゅー」

「白目剥いてる！？」

顔は真っ赤、しかもてっぺんからは湯気が出ているフェイトを見て、

もう限界だと感じた真司は。

「さいならっ!!」

「あ、ちょっと待ってください」

インタビュアーの制止の声を振り切り、フェイトを抱えて全力疾走したのだった。

しばらく経った後、2人は再びそこらのベンチに座っていた。

「……フェイト、もう大丈夫?」

「……う、うん」

ゆでだこ状態からは脱却したものの、いまだ若干顔の赤いフェイト。真司の呼びかけに答えられるレベルにはなったが、頭の中はひとつのことではいっぱいだった。

「（真司のことを考えると、胸がドキドキする……もしかして、私……）」

真司のことを、好

「（っ！ないないない！これはその、親しい男の人の数が少ないから、なんかその、アレが……だ、大体、人を好きになるってもっとはつきりわかるものなんじゃないのかな。うん、そうだ、きっとそう……）」

とかなんとかフェイトが結論を出そうとしていたところ。

事件の発生を告げるアラームが鳴り響いた。

「「っ！」「」」



続いて聞こえてきたのはキャロによる通信だった。ロストログア『レリック』を持って地下水道から出てきた少女を発見したというのだ。

「行こう、フェイト」

真司の声に、フェイトはひとまず頭を切り替え、こくりとうなづく。

そうして、2人がともに走り出した時だった。

「うわっ」

曲がり角から人影が飛び出したと思った瞬間、それと真司が衝突した。互いに尻餅をついたが、見たところ大事には至っていないようだ。

……至っていないように、見えたのだが。

「真司………?」

相手の顔を見た瞬間、真司の動きが止まった。

「なっ……………」

うつかりぶつかってしまった相手を見た真司は、信じられないといった表情になる。

「あいたたた……………」

真司とぶつかった箇所である額をさすっているのは、黒髪の少女。

なのはより少し低い背丈に、髪型はツインテール。そして、白い眼帯。

「あの時の、夢の……………」

第十九話 機動六課のある休日？ フラグっていうのは知らず知らずのうちに

ということではやてが立てたフラグを回収しました。一応、フェイトにフラグが立つような雰囲気自体は結構前に作っていたんですが…… やっぱりこういうのは苦手です。

それとラストに謎の少女登場。誰こいつ？と思ったあなた。人生ゲーム回の前篇をご覧ください。あからさまな伏線をはっていますw とうかいつも思うのですが、後書きってどう埋めればいいのでしょうか。何かコーナー的なもの作った方がいいんでしょうかね…… まあいいか。

感想や評価などあれば、いつでも気軽に寄せください。

では、また次回。

## 緊急告知（前書き）

初めに言っておきます。

…… 本当に申し訳ありません。ただ、それだけです。

## 緊急告知

はやて「……本当に突然のことで、誠に申し訳ありませんが、『このままではストーリーが破綻する』など、その他諸々の理由により…『魔法少女リリカルなのはStrikerS』龍の影を纏いし騎士』は、急遽最終回を迎えることとなりました」

真司「……ですが、あまりに突然のことだったので、最終回の脚本が仕上がっていません。そういうわけで、今からみんなで最終回の終わらせ方を考えていこうと思います」

はやて「集まってもらったのは、私と真司君の他に、なのはちゃん、フェイトちゃん、スバル、ティアナ、エリオ、キャラです。ヴォルケンリッターのみんなは、今急用で出かけています」

なのは「まさかこんなことになるなんて……」

フェイト「急すぎるよ……」

スバル「まだやっていないことが山ほどあるのに……」

ティアナ「仕方のないこと…为什么呢うか」

エリオ「終わってほしくないです……」

キャラ「……今はとりあえず、いい最終回を考えましょうよ」

真司「……じゃあ、早速始めようか。誰か意見のある人、いる？」

はやて「はい」

真司「じゃあはやて、どうぞ」

はやて「いろいろ考えたけど……まあ、このくらいが妥当やと思う」

龍騎「チクシヨオオオ！！くらくアットロ！必殺ドラゴンライダーキック！！」

クアットロ「さあ来なさい龍騎！実は私はどっちかって言うと参謀タイプだからそんなに強くないぞオオオ！！」

クアットロ「うわあああ！！こ、このナンバーズ四天王と呼ばれたクアットロが、こんな仮面野郎に……」

ウーノ「クアットロがやられたようね」

ドゥーエ「ふふ……奴は四天王の中でも最弱……」

トーレ「人間ごとくに負けるとは面汚し……」

龍騎「くらくえええ！！」

四天王「ぐああああ」

龍騎「やった、ついに四天王を倒したぞ…これでスカエリッティのいる場所への道が開ける！」

スカエリッティ「くくく…待っていたよ、仮面ライダー龍騎」

龍騎「スカエリッティ！？こ、ここにいたのか…」

スカエリッティ「龍騎、ひとつ言っておくことがある…：君はサバイブのカードがないと私を倒せないと思っているようだが…別になくても倒せる」

龍騎「な、なんだって！？」

スカエリッティ「それとルーシアの母親、メガー又は私が目覚めさせ、その辺の病院に入院させておいた。あとは私を倒すだけだな、ふふふ…」

龍騎「フ、上等だ…俺もひとつ言っておくことがある。なんだか夢で出てきて現実でも出会った謎ありげな女の子がいたような気がしたが、別にそんなことはなかったぜ！」

スカエリッティ「さあ来い龍騎！！」

龍騎「うおおお！」

龍騎の勇気が世界を救うと信じて！ご愛読ありがとうございました。

真司「って思いっきりどこかで見たことあるんですけどおおおお！  
」

はやて「うーん？そーお？」

真司「しらっばくれるな！ていうかクアットロとかウーノとかどう  
からそんな名前出てきたんだよ！？」

はやて「いや、なんだかいきなり電波を受信して…熱でもあるんか  
もしれんなあ」

真司「なら今すぐ病院行ってきて！頭を検査してもらってきてよ！」

エリオ「そうですよ、最終回にまでなってるのにはやてさんは危な  
いネタが多すぎます」

真司「エリオ？」

エリオ「次は僕が意見を言います。こんなはどうでしょう」

まああれからなんやかんやで僕達の戦いは終わりを告げ、僕はキャ



口と一緒に楽しい日々を送っていた。

だがある日、僕の目の前に現れたのは腕だけの怪人！

そして人の欲望から生まれる化け物たちを倒すべく、僕はその腕だけ怪人と手を組むこととなった！

「楽しんで助かる命がないのは、どこでも一緒だな！」

タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ、タトバタ・ト・バ！

メダルを使って変身するライダー、仮面ライダーオーズ！僕の新たな戦いが始まる！

真司「俺達が微塵も出てこないんだけど！ていうかさらつと新たな展開だけ示唆して終わるってただの打ち切りじゃんこれ！しかもまたパクリだし！どっから情報仕入れてきたの！？」

エリオ「だって、僕だって『変身！』とかかつこよく言ってみただけだし……それに一難去って新たな敵、が少年漫画の醍醐味ですよー！」

キャラ「エリオ君……一緒に楽しい日々を送っている、なんて……／／」

真司「……なんか、みんなキャラおかしくない？」

はやて「そりゃまあ、最終回やし、この二次創作の作者もやけにな  
ってるんやろ」

ティアナ「まったく……ここでひとつ、私がまともな意見を出しま  
しょう」

私、ティアナ・ランスターは、私立都築高校に通う高校2年生。唯  
一の肉親である兄を失くしてから、何にでも意地を張って強がるよ  
うな性格になってしまった。

「転校してきた城戸真司です！よろしくお願いします」

そんな折、突然やってきた転校生が隣の家に住むこととなった。最  
初はやたらとかまってくるそいつを煙たがっていた私だけど……

「な、なんなの、この胸の高鳴りは……べ、べつに、あいつのこと  
なんて、なんとも思っていないんだから！」

認めたくない。

だけど、心は自然とあいつに惹かれていく。

「真司……」

いつの間にか。

「ティアナ……」

私達は、恋しちゃってたんだ。

ティアナ「てな感じで、どうでしょう！」

真司「どうでしょうって何！？どこがまともなんだよ、もう完全に今までの設定をなかったことにしてるじゃんこれ！！なんで魔法少女アニメから学園恋愛モノに華麗に転身しちゃってんの！？」

ティアナ「大丈夫です！『学園エヴァ』ならぬ『学園なのは』ですから！」

真司「勝手に新ジャンルを開拓しようとするなあ！…あ、でもすでに学園モノをやっている偉大な作者様もいることにはいる……てなことは置いといて！」

なのは「そうだよティアナ。勝手に世界観を変えて、あまつさえ自分がヒロインになって真司君とラブラブなんて……駄目だよ？（黒笑）」

フェイト「ああ…なのはから禍々しい妖気みたいなものが……」

なのは「最終回っていうのは…こんな感じにするべきだよ」

私の名前は高町なのは。一流企業に勤めるキャリアウーマンだ。今の今まで、男の人との恋愛などには少しも興味を持ったことがなかった。

だけど、ある日の夜の社内で、すべてが崩れ去った。

「高町さん……もう俺、我慢できません」

「き、城戸君……だめだよ、そんな、いきなり……ああっ」

始まってしまった、上司と部下の禁断の愛。

「城戸真司君。君には会社を辞めてもらっ」

「……真司がいなくなるのなら、私も一緒に行く」

愛に溺れていく男と女。

「俺達はただ……互いがいれば、それだけでいい」

果たして2人を待ち受ける運命は！？

真司「重いわあああ……さっきよりひどいよ！なんで悪化してんの！？なんでこんな生々しそうなストーリー展開になるのさ！？」

なのは「だって、ティアナが純情ものだったから、私は大人の恋愛にしよう」と

真司「だからどうして張り合う必要が！？それとなのはは大人の意味を勘違いしてる絶対！」

フェイト「やつぱりもつと普通にすべきだよ。長く厳しい戦いが終わった後と言えば、みんながそれぞれの道へ進んでいくつていうのが定番だと思う」

真司「おお、やつとまともな意見が。たとえばどんな感じに？」

フェイト「『私、本当は魔導士じゃなくて……演歌歌手になりたかったんだ』みたいな感じかな」

真司「それ中の人ネタだろ！声優としてキャリアを積んだり2年連続紅白出たりしてどんどん違う方向に才能を発揮しつつも着実に夢に近づいていつてる人のことだろ！」

フェイト「そこまで言われると、照れちゃうな」

真司「別にフェイトが照れる必要はないんだよ……」

スバル「はいはい！じゃあ、精神世界で自分の存在意義を見出した私がみんなから『おめでとう』の嵐を受けるつていうのはどうでしょう！」

真司「エヴァを引っ張るな！ていうか存在意義なんて難しいこと考えるキャラじゃないでしょスバルは」

スバル「ええ〜？そんなことないですよ。こう見えていろいろ抱え」

キャラ「ったくよお〜、さつきから黙つりやテーマら好き放題言いやがつて…ふざけんな、私の意見聞かなきゃ始まらねえだろうが」

真司「…え？キャラ、キャラさん…？何これ、酔っ払いみたいになつてるんだけど」

エリオ「いや、さつきウイスキーボンボンを食べたら急に」

真司「そうかなるほどウイスキーボンボンか…っておかしいだろ！そんな微量の酒飲んだだけであんなことになるかあ！？」

キャラ「おい！聞いてんのかそこ…！」

真司「は、はい、すみません！（やばい、逆らえる雰囲気じゃない…）」

キャラ「大体なあ、おかしいと思わねーのか。魔法少女だぞ？魔法『少女』なんだよ。だったら若い私が主役張るべきだろーが。エリオと一緒にクロウカード封印するべきだろーが！」

真司「途中からさくらちゃんになつて…？エリオは小狼君なのか、小狼君なのか！？」

キャラ「それなのによお、なんで19歳の年増がメインでどろどろした闇に立ち向かわなくちゃなんねーんだよ。戦闘アニメなのは許せても、これじゃ魔法少女じゃなくて魔法軍人だろうが！」

なのは「なっ…いくら酔ってるからってそれはないんじゃないかな？」

ティアナ「16歳はギリギリセーフよね！きつと！」

フェイト「わわ、みんな落ち着いて……」

わいわい、がやがや。

真司「……あの、なんか收拾つかなくなってるんだけど。肝心の最終回なのに、みんなキヤラ崩壊してめちゃくちゃな力オスになってるんだけど！どうすんのはやて!？」

はやて「しゃーないな。じゃ、次回からまた真面目にやるってことで」

真司「……え？はやて、今なんて」

はやて「え？次回からまた真面目に」

真司「……ちよつと待つて。これ、今回で最終回なんだよな」

はやて「そうやで。第一期は今回で終わり。作者の受験が終わった来年から第二期スタートや。ま、作者が浪人したら別やけど」

真司「はあああああ!??え、いや、だって、このままだとストーリーが破綻するって」

はやて「そんなん最初からやる。今更恐れてどうするんや」

真司「そんなのアリかよ！ていうかこれほとんど騙しじゃん！二次創作に一期も二期もあるかよ！嘘つくんならエイプリルフルにやれよ近いんだし！」

はやて「何を言うとなや。私は嘘ついてるつもりないし……エイプリルフルにやったら、誰も信じてくれんやろ（黒笑）」

真司「最悪だ！なんてこと考えてるんだこの子は……」

はやて「せやけど、実際嘘でもええから最終回でもせんと、1年も間隔開けるのは問題やろ。筋くらいは通さんと、誰からも忘れられてしまうで」

真司「俺には今までのやり取りのどこに筋が通ってるのかわからない」

はやて「とにかく、これにて当作品は長い充電期間に入ります」

真司「強大な敵との戦いや龍騎のパワーアップがこの先控えているので、再開した時にはまた読んでいただけるとうれしい限りです」

全員「では、また次の機会に」



## 緊急告知（後書き）

本当に申し訳ありません……前書きと後書きのこの言葉、印象はかなり変わりましたでしょうか。

本当、こんなにキャラ崩壊させて申し訳ありません。第二期ではこの回はなかったことにするので、どうか許してください。前々から散々言っている通り、高三になるので更新はストップいたします。皆さんのご理解をいただければうれしいです。

では、いつになるかはわかりませんが、また次回。

## 番外編 クロノ・ハラウンが背負うモノ（前書き）

更新停止とか言っていたのですが、GW中で少し時間ができたので続きを投稿します。

といってもタイトル通り今回は番外編。クロノ視点の一人称で描かれます。結構真面目な話だと思います。

もし、クロノがMOVIE 1stでプレシアの心境の変化に気づいていたら。

番外編 クロノ・ハラウンが背負うモノ

「……あれからもう10年経つのか」

あの時はクラウディアの先代の船・アースラに乗っていたことなどを思い出しながら、僕　　クロノ・ハラウンは足を進める。仕事というわけではなく、プライベートである場所に向かっている途中だ。

「あの後もいろいろ大変なことがあったが　　」

やがて目的地に到着した僕はそこで立ち止まり、視線の先にある『ある人物の墓』を静かに見つめる。

「あなたの娘は今も元気だ」

『プレシア・テストロッサ』の文字が刻まれたその墓に、僕は先ほど買ってきた花をゆつくりと供える。

「……………」

……ひとりで墓参りに来たはいいものの、よくよく考えると、特に彼女に話すことはないような気がする。フェイトの最近の様子についてなら今でもたまにここに来ていているらしい本人が話しているだろうし……

というか、そもそもプレシアと僕は犯罪者とそれを追う者という関係で出会い、そして彼女はそのまま死んでいったのだから、話題などなくて当然だ。

……では、なぜわざわざ仕事の合間を縫ってここに足を運んだのか。実を言うと、僕自身もはつきりとはその理由を知らない。ただなんとなく、近くに来たから寄ってみたというより、『寄らなければならぬ』ような気がしたのだ。

「……………罪滅ぼしのつもりか？」

だが、そう考えることもなく結論らしきものは出た。自分の中のあの気持ちに気づいた僕の口から、自然と自嘲するような笑いがこぼれる。

10年前。プレシア・テストロッサはロストログア『ジュエルシード』を利用し、失われた都『アルハザード』にたどり着こうとした。一步間違えれば複数の世界に多大な影響を及ぼしかねなかったこの事件は、後に首謀者の名を取って『PT事件』と呼ばれることとなったのだが、僕はこの事件を追う中でフェイトやなのは達と出会ったのだった。

最後には焦燥に駆られたプレシアがジュエルシードの数が足りないままアルハザードへ向かおうとし、僕たちはそれを阻止するために戦い……結果として、プレシアは虚数空間の中へ落ちていった。一度落ちれば二度と戻ってはこれない場所に、愛する娘とともに。

そういうわけで、遺体は見つかっていないが、生きているとも考えられない。だからここに、何も埋まっていない墓を建てることになった。

「……あるとき」

自分がやったことが間違っていたとは思わない。なくした肉親を取り戻そうとする気持ちは僕にもわかるが、だからといって他人に迷惑をかけるようなことは当然許されない。だからこそ、彼女に罪を償わせなければならなかった。

そう、生きたまま、捕まえなければならなかったんだ。

プレシアが虚数空間に落ちる時、僕は目を見張った。今まで狂気に満ちた表情をしていた彼女の顔が、ほんの一瞬だけ変わったのだ。

たとえるなら、優しい母親のような顔つきに。

それは僕の単なる勘違いだったのかもしれない。プレシアは最後までフェイトを憎み、アリシアと過ごした過去に妄執していたのかもしれない。

…だけど、もしそうでなかったとしたら。もし、あの最期の瞬間、プレシアの心境に変化があったのだとしたら。

もし、その変化が、フェイトにとってとても幸せなものだったとしたら。

「届かなかったのか……？」

自らの右手を見つめながら、僕は虚空に向かってつぶやく。答えがない問いだとわかっていながら、それでも誰かに答えを求めるかのように。

あの時既に僕は傷だらけで、その場にいながら何もできなかった。  
虚数空間に落ちていくプレシアに、手を伸ばすことさえしなかった。

この手が、彼女に届いていたなら。僕に力が残っていて、素早く動いて彼女を助けられたのなら、一体その後どうなったのだろうか。  
……ひよっとしたら、フェイトとプレシアは、本当の意味での親子になれたのだろうか。

……今となつては、その答えは決して出ない。プレシアはあの時死に、二度とフェイトと言葉を交わすことはなかったのだから。

その後、フェイトは僕の母さんとして引き取ることになり、僕とフェイトは兄妹になった。当初はぎこちなさもあつたが、今では普通の仲の良い家族になれていると思う。

でも。

「……………だからって、罪が消えるわけじゃない」

心の中で、僕はこう思っているんじゃないのか？『フェイトと家族として 兄妹としてうまくやっていけている。彼女の心に空いていた穴を埋めることができる』  
だとしたら、とんだ勘違い

いだ。彼女の本当の母親がプレシア・テストロッサであること、そして僕が彼女を生かせなかったことに変わりはない。

きつと僕は、一生この十字架を背負っていくことになるだろう。フエイトに近づけば近づくほど大きくなる、背中にのしかかるこの大きな荷物を

「…………お兄ちゃん？」

「えっ……」

不意に背後からかけられた声に驚いた僕が振り返ると、そこには先ほどからずっと思っていた妹の姿があった。

「フエイト…………」

「母さんのお墓参りに来てくれたんだ。ありがとう」

「…まあ、当然だろう。大事な妹の母親のお墓なんだから」

僕の言葉を聞いたフエイトはふふ、と笑い、手に持っていた花束を



供え、周りの掃除を始める。

「……………」

僕はというと、そんなフェイトの姿を見ながら、再び思考の海に沈んでいた。

「……ん。……ちゃん」

「……………」

「…お兄ちゃん!」

「うわっ」

ぼーっとしていてフェイトの呼びかけに気づかなかった僕は、大きな声を出されて驚いてのけぞる。

「……………変なこと考えてるでしょ」

「……………っ!?!」

だが、直後の彼女の見透かしたような言葉と目つきにさらに驚いた。まさか、僕が何を考えていたのかわかるのか？

「何年お兄ちゃんの妹をやつてると思つてゐるの？何を考えてゐるかは大体顔を見ればわかるよ」

そう言つて少し間をおいた後、フェイトは言葉を紡ぎ始める。

「…母さんが死んだのは、お兄ちゃんのせいなんかじゃない。私が止められなかった…それだけのこと。罪だと思ふ必要なんてないんだよ？むしろ私は感謝してる。私に、温かい家族をプレゼントしてくれたんだから」

ありがとう、と笑顔を見せるフェイト。……まったく、この笑顔には勝てないな。

「……危うく忘れるところだったよ」

死の十字架よりも先に、もっと大切な、背負うべきものがあるじゃないか。目の前にいる妹、母、妻、子、そして大事な仲間達。一番に背負わなくちゃいけないのは、今生きている者なんだ。

なのはほどじゃないが、フェイトも大概無茶をするタイプだ。しっかり支えてやらないと、すぐに背中から滑り落ちてしまいそう。

「……重いな」

「えっ！？お、重いつて…た、確かに最近ちよつと体重が増えたけれども、そんな、ストレートに言わなくても……」

僕の言葉を勘違いしたらしいフェイトがあたふたし始める。こういうところは、まだまだ子供のままだ。

「そういう意味じゃないよ」

「……え？じゃ、じゃあどういつ……」

大切な荷物ほど重くて、背負うのが大変だ。でも、だからこそ背負いがいがある。

などという恥ずかしいことを言えるはずがない。ここは適当にごまかしておこう。

「さあね」

「さあねって……ちゃんと教えてよ」

納得がいかない様子のフェイト。……まあ。

「フェイトにいい夫ができれば、少しは軽くなるかな」

……僕としては、本当に軽い気持ちで冗談を言ったつもりだったが。

ボンッ

瞬間、フェイトの顔がゆでだこのように真っ赤に染まった。

「お、おおおお、おっと!?!」

……あれ?なんだこの反応は。

「……フェイト、まさか」

「ち、違っよ！私があの人に片思いしているだけで……あ」

僕の妹は良くできた妹だ。こうして聞きもしないことを勝手にしゃべってくれるのだから。

「フェイト……兄として、僕はそのあたりの事情は詳しく知っておきたいんだ。わかるだろう？」

笑顔を取りつくろってフェイトに優しく声をかける。ちょっと顔が引きつっているような気もするが、まあ大丈夫

「わ、私そういえば用事があつたんだ！じゃあまたねっ！」

「あ、待て！」

僕が認めた男でないと、交際することなど許しはしない！

逃走を図ったフェイトを追いかけるべく走り出した僕は、ちらりと墓に自分が供えた花を見た後、またフェイトの方に視線を移す。

僕が供えた花は、白いエリカ。

花言葉は、『幸せな愛を』。

## 番外編 クロノ・ハラオウンが背負うモノ（後書き）

というわけで番外編でした。え、花言葉って地球の文化じゃね？って思ったそのあなた。細かいことは気にしない。ほら、クロノは地球で生活していた時もあるわけだし……

珍しくシリアスな雰囲気でしたが、最後は結局コメディ調になりました（笑）だってこうしないとオチ作れないし……

フェイトの『あの人』とはもちろん真司のことです。なので、この話は本編の現時点より少し後に入ることになります。

なんでクロノの話を書いたかというと、一言で言えば僕がクロノ大好きだからです。ぶっちゃけなのはキャラの中じゃなのはもフェイトも差し置いて一番好きです。

本編のプロットでも後半はクロノが結構出張ってくる予定なんです……あいつ六課にいないから出しづらい！でも後半からいきなり出番増えるのもなんだかなあ……あ、じゃあ番外編で出せばいいんだ！……というアホみたいな結論に至り、この話を書いたというわけです。

番外編なので本気で本編の話ではない無印（というか劇場版）のエキピソードを採用。もしクロノの勘が鋭くて、プレシアの気持ちになんとか気づいていたら、という設定で書いてみました。

感想などあれば、どうぞ気軽に送ってくださいるとうれいす。

では、今度こそいつになるかわかりませんが、また次回。

第二十話 機動六課のある休日？ てかもう休日じゃないのかもしれない（前書

気分転換に続き書いてみました。



第二十話 機動六課のある休日？ てかもう休日じゃないのかもしれない

夢に出てきた、顔も知らない女の子。あの夜に目が覚めた直後は眠かったというのもあってさして気にも留めていなかったのだが、その後も彼女の顔は不思議なほどはつきりと真司の脳裏に焼き付いていた。それでもその子がどこの誰なのかは本当に覚えがなかったため、今まで特に行動を起こしたわけではなかったのだが。

「……………」

その少女が今、現実に関自分の目の前に存在している。彼女は一体何者

「あ、あの……私の顔、何かついてたりします？」

「えっ？」

……淡いエメラルドの瞳に疑問の色を浮かべた少女から放たれた一言で、真司の頭は一気に冷やされた。

考えてみれば、こちらが勝手に夢で彼女の姿を見ただけなのだ。道を歩いている時にふと目に入ったその容姿がなんとなく記憶に残っ

ていて、無意識のうちに夢に現れた　　なんのことはない、少し不思議なだけのどこにでもありそうな話ではないか。

「（こっちに来てからアニメみたいな展開が多すぎて、ついついそっちの方に頭がいつちゃってたな。こういうなんでも大げさに捉えちゃうのが巷で流行りの中二病ってやつか。これから気をつけないと）」

勝手に脳内で始まりかけたシリアスな妄想を打ち切り、真司は尻餅をついたままの姿勢から立ち上がる。

「ううん、なんでもないよ。ぶつかってごめん、怪我とかない？」

「あ、はい、大丈夫ですけど…」

少女の方も立ってスカートをぱんぱんとふるいながらそう答える。

「えっと…そうだ。あっちの方は危険なことになるかもしれないから、近づかないようにね。それじゃー！」

「あっ………」

くると回れ右をして走り始めた真司を少女が呼びとめようとするが、聞かないふりをしておいた。確かに少し気にはなるが、今はキヤロ達と合流するのが先決だ。

「ごめんフェイト、時間取らせちゃって」

「ううん、それはいいんだけど……さっきの子、知り合いなの？」

「えっと……まあ、中二病には気をつけろってことだよ」

「??.」

夢がどうこうと説明するのもなんとなく面倒だったので、テキトーにごまかして真司は現場へと向かっていく。

「あつ、フェイトさん、真司さん！」

連絡を受けた場所に到着すると、エリオが少し安堵した声で呼びかけてきた。

「この子がさっき言ってた……」

「ロストロギアを持っていた女の子だね」

真司の言葉をフェイトが引き継ぎ、2人は泥やすで汚れてしまっているその女の子を見つめる。顔立ちは整っていて、こんな格好をしていなければいいところのお嬢様みたいだと言ってもいいくらいかもしれない。

「こんな可愛い子が、なんでこんなところに……」

「今のところはなにもわからないけど、とりあえず色々調べてみないと」

真司が素直な感想を口にする一方、フェイトはすでに仕事モードに移行済みだ。

その後、その時間を置かずにティアナとスバルが駆け付け、続いてなのはとシャル、リインがやって来た。

「…うん。大丈夫、特に体に異常はないし、危険な反応もないし…心配ないわ」

この手の分野に詳しいシャルがそう判断したことで、一同もほつと胸をなでおろす。

しかし、ほどなくして複数箇所にガジェットの出現が確認され、真司はフォワードの皆とともに地下水路へ行くことになった。

はやてから指示を受け、それぞれが動こうとしているさなか、真司は先ほどから少し気にかかっていたことを尋ねる。

「ところでティアナ、さっきからちょっと顔が赤いような気がするんだけど……」

「えっ？あ、いや、それは……」

「それはここに来る前ウイスキーボンボンを鼻血が出るほど」

「ああー……っ！……い、今何か言ったスバル？なんにも言っていないわよね！」

スバルが答えようとしたのを露骨に遮るティアナを見て、真司の興味は増していく。

「いや、明らかに何か言ってたよ。スバル、悪いけどもう一回」

「ど、どうでもいいじゃないですかそんなこと！それより、真司さんの方はどうだったんですか、フェイトさんのデート！」

無理やり話を逸らそうとするところを見ると、よほど話したくないことらしいので、真司もこれ以上の追求はあきらめる。

「別に買い物しただけ……って、それ以前にデートじゃないっての。なあフェイト」

「……………」

「なんで無言なの！？ちょっと前からのその微妙な態度はなに！？」

なぜか顔をうつむけるフェイト。彼女の反応を見て真司をジト目でにらむティアナ。

「ほらみんな、今はそういう話をしてる場合じゃないでしょ？」

ここでののはがもっともな注意をする。助かった、と思った真司だが。

「……ね？真司くん？」

「…あの、なのはさん？なんで俺の方をそんなにらんでるの？」

「なんでだろうね」

結局あんまり助かっていなかった。

場所は変わって地下水路。なのは達と別れ、今ここにいるのは真司とフォワードの4人＋フリードだ。

途中、ティアナがスバルの姉である『ギンガ・ナカジマ』と通信で会話して、彼女と合流することになったようだ。真司もいつだったかスバル本人から姉に関する話をされたことがあり、いつか会ってみたいと思っていたのだが、こんなところで会えるとは正直意外だと感じていた。

「どんな人なんだろうなあ」

「すっごく強い人だから安心してください!」

そう胸を張って言うスバルの様子からすると、おそらくかなり姉を慕っているのだろう。そして強いというのもほぼ間違いないだろう。これだけ強い妹がそう言っているのだから。

「スバルのお姉さんがどんな人かはもうすぐわかるとして……気に



なるのはさっきの女の子のことだよな」

半ば独り言のように真司がつばやいた直後、それに答えるかのようなタイミングで驚くべき事実が通信によって告げられる。

なにやら知らない単語が耳に入ってくる中で、真司がはつきりと認識したのは『人造魔導師』という単語。

スバルによると、その言葉の意味するところはこうだ。

「優秀な遺伝子を使って人工的に作り出した子供に、投薬とか、機械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力を持たせる。…それが、人造魔導師」

「…そんなことまでできるのか、この世界って」

「でも、倫理的な問題もありますし、今の技術じゃどうやっても色々な部分で問題が生じるんです。コストも合わないし……だから、よっぽどどうかしてる連中じゃないと手を出さないんですけど」

「

動体反応確認。ガジェットドローンです。

ティアナの言葉を遮るように、キャロのデバイスが敵の襲来を告げる。

「っ！来た！」

ガジェットには魔力を阻害するAMFというバリアのようなものが搭載されているらしい。だが、

Sword Vent

「らあっ！！」

『龍騎』は、魔力云々ということにはまったく関係ない。スバル達と協力しつつ、さほど苦勞することもなく敵のせん滅は完了した。

「ふうっ……」

シグナムが仕事でない時などにちよくちよくフォワード陣の練習に混ぜてもらっていたのが少しは功を奏したようだと思ふ。真司は思う。一応、足を引っ張らない程度には連携ができたためだ。……もっとも、4人が彼に合わせてくれているところが大きいのだろうが

ドガアアアン!!

「のわあっ!?!」

そんなことを考えていたさなか、突然真司の真後ろの壁が轟音とともに崩れた。あまりに不意を突かれたために、思わず足を滑らせてしまう。

「遅くなつてごめん……つて、あれ?」

土煙の向こうから現れた少女の言葉が、目の前で格好悪く尻餅をついている仮面の騎士を視界にとらえたところでストップした。

「ギン姉!」

「ギンガさん!」

「スバル、ティアナ。……えっと、それで、こちらの方は?」

スバルとティアナに挨拶をした彼女      ギンガは、再び真司に視線を戻す。

「ギン姉、この人は城戸真司さんって言って、民間協力者として一緒に戦ってくれてるんだよ」

「ど、どうも…城戸真司です」

「はじめまして。ギンガ・ナカジマです。……あの、驚かせてしまったみたいですみません。壁を通るのが最短ルートだったので」

「いやいや、別に全然大丈夫だよ。それにしてもさすが姉妹って感じだね。スバルとそっくりだよ（主にゴーカイさが）」

「そうですか？ ギン姉と似てるだなんて照れるな」

「……スバル。多分ここはあんまり喜ぶところじゃないわよ」

素直にうれしがるスバルに、ティアナが冷静にツツコミを入れていた。

第二十話 機動六課のある休日？ てかもう休日じゃないのかもしれない（後書

謎の少女（ヴィヴィオじゃない方）はすぐに再登場しますので安心してください。今回は顔見せだけでしたが。ちなみにイメージＣＶは名塚佳織さんってことにしています。有名な声優さんなので知っている方も多いのではないでしょうか。

感想などあれば、毎日目を通してはいるのでお気軽にお寄せください。

さて、次回はいつになるのでしょうか！（オイ

いや、だって一日の半分くらいは勉強せざるをえないし……

## 第二十一話 声（前書き）

前書きを何に使うのか？それはとっても難しいことだと思うのです。で、色々考えた結果がこれです！

『雑談コーナー』！

つまりこの作品の登場人物たちがあるネタに対して雑談をするわけです。……え、意味不明？そうですよ……まあ、続けてほしいという声があれば続けます（ないと思うけど）

（お題『魔法少女まどか マギカ』について）（ネタバレ含みます）

はやて「最近魔法少女でもこないなひどい目に遭うんやな……気をつけよ」

フェイト「魔法少女アニメに新しい風を吹き込んだ作品だね」

真司「それはリリカルなのはと同じだと思うけど。だって魔砲少女だし」

はやて「せやけどアニメ1期の8ヶ月前にガチ戦闘系魔法少女もののプリキュアがスタートしとったしなあ……」

なのは「新しい風というと、カードキャプターさくらとかもそうだよね。いわゆる『萌え』の魔法少女文化を拡大させた要因だし」

真司「そういえば、桜ちゃんの衣装はただのコスプレだったんだよね」

フェイト「NHKって本気出すとすごいんだね」

はやて「関係ないけど、この作品の作者は初代プリキュア1話の变身シーンで初めて性的興奮を覚えたとか」

スバル「ねえティア。なんだか話があさっての方向に向かってない？」

ティアナ「仕方ないわね。ここは私達フォワードが代わりに語りましょう」

キャラ「……悲しいお話ですね。結局最後はあんなことになって」  
エリオ「特撮ファンからは『龍騎＋剣＋ネクスス』と評されることが多い気がしますよね。決してパクリというわけじゃなくて、それらの要素をうまくまとめてるって意味ですけど」

スバル「まどかと剣崎さん、どちらの方が悲惨なんだろう……」

ティアナ「どっちもとても辛いと思うけど、自分自身で選んだ道なんだから後悔はしていないと思うわよ。……それにしても、深夜アニメとはいえ、あんな可愛い絵柄であんな残酷なストーリーを展開するなんてね……」

エリオ「……それを言ったら、日曜朝のスーパーヒーロータイムで『俺のことを好きにならない人間は邪魔なんだよ！』とかやってる平成ライダーも十分……」

ティアナ「え？……いいやでも最近はやえ気味だし！Wは正統派ヒーローものだったし、オーズは主題歌からして軽快な……え？終盤に来て鬱展開？」

## 第二十一話 声

ギンガも加わりさらに戦力アップした真司達のグループは、その後も現れるガジェットを倒しながら奥へ進んでいった。

「あつ、ありがとうございました！」

そこでキャラが目的のケースを発見し、後は戻るだけと思われたその時。

「きゃあつ！？」

突然キャラに魔力弾が襲いかかる。姿を消していた敵が攻撃してきたのだ。

現れたのは、黒い装甲を纏った竜。さらにその隙を突かれ、こちらもさきほどまでいなかったはずの少女にケースを取られてしまった。

「くそっ」

ドラグセイバーを握りしめ、真司は竜の方へ走り込むが、直前でずるりとかわされてしまう。



ドンッ！

「がつ……」

直後、竜の蹴りが真司に命中する。なんとかこらえたものの、重い衝撃が体を支配する。

「速くて力持ちって、そりゃないだろっ」

思わず素直な言葉が口について出てくるが、真司は再び敵に攻撃を仕掛ける。スバルとギンガも加わり、徐々にこちらが優勢に

ドガアアアアン！！

不意打ちと呼べるタイミングで鳴り響いた轟音により、真司達は思わず耳をおさえて動きを止めてしまう。

「な、なんだあれ？リインの色違いか？」

なぜか小さな花火を打ち上げているその小さい生物は、自分のことをアギトと言つて竜（ガリユーという名前らしい）と紫の髪の少女（ルール…？）に話しかけている。

「オラオラ、お前らまとめて、かかつてこいやあ！」

その言葉とともに、アギトが紫の炎を飛ばす。すんでのところで回避した真司達だが、間を置かずに土煙の向こうからガリユーが突っ込んでくる。

ガキーン！

「やっぱ男はドラゴンでしょー！」

ガリユーの刃を止めたのは真司だ。パワーがある敵と相手をするには、装甲の硬い自分が適任だと感じたため、真っ先に引き受けたというわけだ。

「はあっ！」

続いてスバルもガリユーの相手に回り、2対1での戦闘が始まる。アギトとルールの方も気になるが、そっちは仲間に任せて、真司は目の前の敵に集中する。

「（相手の動きをよく見て……）」

狙うはシグナムから教わったカウンター。相手の攻撃の勢いを利用して、逆に重い一撃を浴びせる戦法。

スバルとともにガリユーの攻撃に耐えつつ、真司はチャンスを探る。

「（　　今だ！）」

向こうが腕を振り上げた瞬間の隙を狙い、真司はドラグセイバーを

ドガアアン！！

「えっ……」

思わず音のした方を見ると、通路を壊してやって来たらしいヴィータとリインの姿があつて。

ヴィータは既にガリユーに向かってハンマー型のデバイス<sup>㉔</sup>グラールファイゼン<sup>㉕</sup>を構えて急接近していて。

少し距離を取っているスバルはいいとしても、今まさに斬撃を入れようとしていた真司はほぼガリユーと密着していて。

「吹っ飛ばえええええ！！！」

「のわああああ！！！」

ドゴオオオン！！

⌋  
⋮  
⌋

ヴィータのバワフルな一撃はガリユーに命中。一方、間一髪で避けた真司は彼女の方をじっと見つめる。

対するヴィータも真司を見つめて。

「……おう、待たせたな」

「殺す気かあああ!!?」

微塵も悪びれる様子のないヴィータに全力全開でツッコむ真司。

「何言つてんだ。ちゃんと避けられたんだから別にいいだろ」

「ギリギリだったろ!当たってたら俺も今頃壁にめり込んでたよ!」

「もしそうなら、所詮お前はそこまでの人間だったってことだ」

「なんかかつこよく言ってるつもりかもしれないけど全然意味わかんないからな!」

「いいじゃねーか、男が細かいことに突っ込むなって」

「そつは言ってもなあ!」

「あ、あの……敵、逃がしちゃったんですけど……」

2人の口喧嘩に割って入るのをためらいながら、エリオが控えめな声で言う。

「「なんだって!!」」

同時に驚き、互いの顔を見て。

「「お前のせいだ!!」」

声をはもらせて理不尽なことを言い合う真司とヴィータだった。「息ぴったりだね」とはこの2人のやりとりを初めて見たギンガの言葉である。

その後、崩れ始めた地下水路からスバルとギンガのウイングロードで脱出し、一同の見事な連携によりあれよあれよという間に目標の捕獲は完了した。

「……展開が速すぎて何もできなかった」

まだまだ素人同然の真司はその間ほとんど棒立ちだった。やっぱりプロは違うよなあとか一種の感動を覚えつつ、何かできることはないかと考えるも、特に思いつきもしない。

「取り調べの邪魔するわけにもいかないし……そういえば、なのは達は大丈夫かな」

と、彼が漠然と別行動中の仲間のことを考えていたその時だった。

『……て』

「？」

誰かの声が聞こえたような気がした真司は周りを見るが、みんな捕まえた少女たちの方を向いていて、こちらに声をかけた様子はない。

それに今の声は、まるで

『……………きて』

そつ。まるで、頭の中に直接響いているかのようなようだ。

「な……………なんなんだ？」

『……………こっち…きて』

壊れかけのラジオから出るようなノイズ交じりの声。辛うじて声の主が女性だということがわかるくらいだ。

…それでも、真司にはなぜか、その声が言う『こっち』がどの方向



を指しているのかなんとなく理解できた。

「……行ってみるか」

この場は自分がいなくても大丈夫だろうし、何より気がかりだということで、真司は声の導く方へ動き始めた。

「で、ここまで来たんだけど……」

謎の声に従ってたどり着いたのは、とある廃ビルの屋上だった。だが、辺りを見回しても、特に何かあるというわけでもない。

「…一体君は誰なんだ？」

先ほどから声の主と会話しようとして試みているもののうまくいかず、ただ向こうから声が聞こえてくるだけだ。

『……あ……ない……』

「え？」

相変わらずノイズが入っていて、一回ではなかなか意味を理解することができない。

『……あぶない』

「危ない？なにが？」

次に聞こえてきた言葉に、真司の動きが一瞬止まる。

『へりが、危ない』

「真司がいない？」

「はい、気づいたら姿が消えてて……」

一方その頃、捕らえた少女から情報を聞き出そうとしていたヴィータは、真司がいつの間にかいなくなっているということをティアナから告げられていた。

「何かあったんでしょうか？」

「わからねえ。もしかしたらこいつの仲間に……おい、どうなんだ」

厳しい表情で目の前の紫の髪の少女を睨みつけるも、向こうはまったく動じていない。その様子を見て、ヴィータはさらに不審感を強めた時だった。

「…逮捕は、いいけど」

今まで何を言っても無反応だった少女が口を開き、言葉を紡ぎ始める。

「大事なヘリは、放っておいていいの？」

「っ!？」

その言葉に、全員が息を詰まらせる。

「あなたはまた、守れないかもね」

その瞬間、保護した少女やシャル達が乗っているヘリに向けて、強力な砲撃が発射された。ヘリの姿が見えないような位置にいる以上、助けに入るのが間に合うはずもない。

そんな、全員の頭が一瞬真っ白になったさなか。

『えっ………龍騎!？』

通信から聞こえてきたのは、予想外の人物の乱入を知らせるものだ

った。

遡ること、ほんの少し前。

ドラグレッダーに乗った真司は、全速力でヘリへ向かって突き進みつつ、次に使うカードを取りだしていた。

「っ！もう発射されるのかよ！？」

遠目に見える魔力の収束が一段と大きくなったのを見て、真司は焦る。確かにこのタイミングならヘリと砲撃の間に割って入ることはできるが、そこから攻撃に移れる時間がほとんどない。

ゆえに、『ファイナルベント』のカードをあきらめ、違うカードを挿入する。

## Strike Vent

右腕にドラグクローが装着され、ドラグレッダーに口に炎が溜めこまれていく。

そして、ヘリの前にようやくたどり着いたところで、砲撃が発射された。

「だあああっ!!」

真司も腕を前に突き出し、『ドラグクローファイヤー』を発動させる。

次の瞬間、炎と魔力がぶつかり合い、周囲の空気が大きく震え始める。

「ぐっ……………」

…押されている、と感じる真司。事実、向こうの光線はじりじりと

こちらに近づいてきている。

「くそっ……………」

負けるわけにはいかない。今の自分の背中には、ヘリに乗る人たち全員の命が乗っかっているのだから。

「踏ん張ってくれ、ドラグレッダー!!」

渾身の力を込めながら、彼はドラグレッダーに叫ぶ。

「ウオオオオン!!」

そして、それに呼応するかのように赤き龍が雄たけびを上げると。

「っ!!…炎が……………」

炎の中に黒い稲妻が走った瞬間、威力を増したそれが砲撃を押し返していき

ぶつかり合っていた2つの攻撃は、轟音を上げて互いに打ち消し合

った。

「はあっ、はあ……………」

息を切らしながら、真司は今しがた炎の中に見た黒い光がなんだったのかについて思いを馳せる。

が、それも一瞬のこと。

「ドラグレッダー。ごめん、もうちょっとだけ頑張ってくれ」

そう言うと、ドラグレッダーはこちらに目配せをしてから再び動き始める。まるで『これが終わったらたらふく食わせる』とでも言っているかのように真司には感じられた。

「わかった。はやてに頼んでみるよ」

今日ははやても戦ってるみたいだから魔力をたくさん分けてもらえるかはわからないけど、と付け加えて、彼は砲撃が飛んできた方向を見据える。

戦いは、まだ終わっていない。



## 第二十一話 声（後書き）

……雑談コーナー必要なんでしょうか。よろしければ「続けてほしい」とか「書くだけ無駄」とか感想で伝えてくださるとうれしいです。

さて、本編の方はちょっとだけストーリー進行。アニメ本編とは違ってなのはは砲撃に間に合わなかったことで解釈してください。あと謎の声は真司が電波になったわけではありません（笑）

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第二十二話 眼帯少女の正体（前書き）

そこそこ好評だったみたいなので、雑談コーナーは不定期でやっていきたいと思います。今回は後書きでオリキャラのプロフィール的なものを書くのでお休みです。

## 第二十二話 眼帯少女の正体

「……………やっぱり駄目だったか」

すぐに駆けつけたなのはとフェイト、そしてはやてとともに砲撃してきた人物2名を捕まえようと奮闘した真司（というかほぼドラグレッダー）だったが、やはり先ほどの撃ち合いで疲労が溜まっていたのだらう、ドラグレッダーの動きは鈍ってしまっていた。さらに敵側に救援が入ったせいで、最終的にはなのは達も相手を取り逃がしてしまったのだった。

「それにしても、相手が全員女の子って……………なんかやりにくいなあ」

へりを撃ち落とそうとまでした連中なのだから、おそらくまた戦うことになるだらう。今回真司が直接戦ったのはあの竜っぱいモンスターだけだったが、次は

「……………いやいや。悪いことする奴に男も女もないよな。ちゃんと捕まえないと」

そんなことを考えながら、真司はとりあえず地上に降りて変身を解き、なのは、フェイトと合流する。

「逃げられちゃったな」

「うん……でも、ヘリを守れたのは真司くんのおかげだよ。ありがとう」

「でも、どうして砲撃に間に合ったの？」

スバル達と一緒に行動してたはずなのに、と不思議そうに尋ねてるフェイト。

「ああ、それは……」

「おー！本物の魔導師さんだ。初めて見たなあ」

真司が説明しようとした瞬間、少し間の抜けたような声がある場所に響く。

「えっ？……って、君は！」

そこにいたのは、ロストログアが見つかったという連絡をキャロにもらい、現場に向かおうとした時にすっかりぶつかってしまった

「どーも、またお会いしましたね」

真司の夢に出てきた、白の眼帯をつけた少女だった。

「なんでこんなところに……」

「なんでと言われましても、私の家がこの辺ですし、ついでに言う  
と面白そうなことがあったら首を突っ込まざるを得ないのでホイホイ  
様子を見に来た次第なのですよ」

「あ、ああ……そうなんだ。まあ、もう騒ぎは収まったからいいん  
だけだね」

なんだか活発そう、という印象を受けるその子の顔を見ながら、真  
司は気になっていることを言うべきかどうかを考える。

「あの子、真司くんの知り合いなの？」

「えっと、さっき真司が道でぶつかった子なんだけど……」

フェイトがなのはに説明している間に、とりあえず聞いてみるかという結論に達した彼は、少女に向かってあることを尋ねた。

「……ところでさ。俺、城戸真司っていうんだけど……前にどこかで会ったこととかってないかな？……って思ったり思わなかったりして」

「それは質問ですか？独り言ですか？」

「あ、ああ……一応質問」

その言葉を聞いた彼女は、しばらく無言で真司を見つめる。

「……………」

もしかして、という予感が真司の頭によぎる。

「…………ふっ」

すると、彼女はおもむろに携帯を取り出して。

「あ、もしも管理局ですか？ちょっと変な人にナンパされてしまつて……」

「ちょっと待つてえええ！！？」

自分が痴漢の現行犯になろうとしていることに気づいた真司は、あわてて声を張り上げる。

「なんですかペド紳士さん」

「城戸真司なんだけど！ほとんど名前が原形とどめてないんだけど！というか管理局はやめ」

「かけてませんよ」

「……え？」

「だから、管理局になんてかけてません。時報を聞いていただけです。使い古されたネタですよ？」

あっけらかんと言う少女に、真司はやられた、と額に手を当てる。

「やめてくれよ、寿命が縮むくらいびっくりしたんだから……」

「あははは、大げさな人ですね……。まあ、それはそうとして、私があなたと会ったのは派手にぶつかってしまったあの時が初めてです。ナンパがうまくいかなくて残念でしたな」

「……ああ、そう（初めからそれだけ言ってくればよかったのに、しかもナンパじゃないし）」

はやてもそうだが、最近年下にからかわれることが多い気がする。

「それに、管理局にわざわざ電話しなくても、あなたの後ろのお姉さんに捕まえてもらった方がよさそうですし」

「？」

彼女の言葉の真意がつかめないまま、後ろを振り向くと。

「……そうかあ（ににに）真司くん、ナンパなんてするんだあ……（ににに）」



「なんか恐ろしいモノが降臨している!?!」

張り付いた笑顔が恐怖でしかない、高町なのはがこちらを見ていた。フェイトは隣で「いつものなのじゃない……」とか言いながらおろおろしている。

「なんだかよくわからないけど恐ろしいことになってますねえ」

「なんだかよくわからないけど多分君のせいだと思うんだ俺は!」

「ああ、そういえばそろそろばん塾の時間だったような気がするようなしないような」

「どっちだよ!?!ってか事態をややくしくしたまま帰るつもり!?!」

「ちなみに私のこの眼帯は趣味ですっ!海賊です!派手にいくぜ!」

「別に聞いてないよ!気になってはいたけれど!」

完全に向こうのペースで会話が進み、真司はぜえぜえ息を切らしな

がらツッコミを入れる始末。それでも一応ついさっき尊い命をひとつならず救った戦士だったりする。

「そういうわけで、私は帰らせていただくのですが」

「……いただくのですが？」

もうどうでもいいという感じで真司が聞くと、彼女はにこりと笑みを浮かべる。

「シホです」

「へ？」

「ですから、私の名前。シホ・ジンキッドっていいです。ナンパとはいえ、そちらの名前を教えてもらった以上こちらにも教えるのがスジってモンでしょう」

「ああ、それはご丁寧にどうも……って、だからナンパじゃないって」

「シホちゃんかシホ様かご主人様かシホ大宇宙神様と呼んでください」

「じゃあシホちゃん、よろしく」

「む。ペドさんはつまらない人ですね」

「城戸だよ」

疲労により真司のツツコミがローテンションになったことで、その少女　シホは少し残念そうな顔つきになる。

「仕方ないですね。また会ったらキレのいいツツコミを期待します。では！」

そう言っで軽く頭を下げると、彼女は走って帰っていった。

「はあ……疲れた」

色々気になることもあるし、早いところ六課に帰りたいとため息をつく真司だったが。

「すごいね真司くん。今日会っただけの人にナンパして、あんなに

仲良さそうに話ができるなんて。私びっくりしちゃったなあ（満面の笑み）」

まだ問題は解決していなかった。

「なのは……あの、これにはわけが」

「結構軽い男だったりして」

「がはっ！」

真司のピュアな心（本人談）に冷たい言葉の矢が突き刺さる。思わず本当によろめきながら、真司は『これじゃまるで浮気したことを彼女に攻められる彼氏の図じゃないか……』とか心の中で考えていた。一方なのは同じようにことに思い至っており、『彼氏彼女かあ……にやはは』と、最終的に怒ってんだか喜んでんだかよくわからない表情になっていた。乙女心は複雑である。

「なのは……わけがわからないよ」

ちなみに、ひとり蚊帳の外なフェイトがこの展開についていけなかったのは言うまでもない。

一方、元気に走り去ったシホは、急に足を止め、まだ真司達がいるであろう場所の方を振り返る。

「城戸…真司、か。ふふっ」

そうつぶやいた彼女の顔つきは、どこかうれしそうだった。

## 第二十二話 眼帯少女の正体（後書き）

ペド…「ペドフィリア」の略。幼児・小児に対する性的嗜好を持っていること。簡単に言いかえればロリコン。

紳士…普通はジェントルマンの意味だが、「変態」などという単語と組み合わせることですごい変態を意味する言葉になる。今回はもちろん後者の意味。

つまりペド紳士とはロリコンですごい変態ってことですね。

というわけでプロフィールいつてみよー！

シホ・ジンキッド

年齢：16

性別：女

身長：158cm

体重：よんじゅうつわなにをやるやめ（ry

特徴：黒髪ツインテール、瞳の色はエメラルド。右目に白い眼帯をつけている。

趣味：不明

本人より一言：「ゴージャーっておもしろいですよね！」

……自分でも書いてて思ったんですけど、なんだコイツ。途中から完全に僕の手を離れて勝手にセリフを話し始めましたよ。本当は今回でドラグレッダーの黒い稲妻に関して考察を入れてヴィヴィオのところに行く直前あたりまで進めようと思ってたのに終わってみれば7割以上無駄な漫才で構成されていたよ！

ま、なにはともあれ、これでようやく僕の作品にもオリキャラが登場したというわけです。活動報告などでも出番が多くなることでしょう。…あ、名前が変なのは気にしないでください。いろいろデキトーに考えた結果ですの。

次回はヴィヴィオのところまで行ければいいなあ……

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第二十三話 進化と謎と（前書き）

久しぶりにアクセス解析を見たら、そろそろPVが40万に到達するようです。総合評価も900間近だし、その時まだ夏休みが終わってなければティアナ（と真司）メインの特別短編でも書こうかな……



## 第二十三話 進化と謎と

機動六課に帰還した後しばらくして、はやてに呼ばれ部隊長室に入った真司を待っていたのは、なのは達3人の隊長陣だった。

「さて、早速真司くんから話を聞こうと思うんやけど……その前にはやての目を細める仕草に、彼は何かよくない話があると直感的に感じた。

「結果的にへりを救ったにしろ、連絡なしでの単独行動をしたことに関しては叱つとかなあかな」

「あ……それについては反省してる」

勝手に隊を離れたせいで、ヴィータ達を心配させたのは事実なので、真司は申し訳なさそうに顔を下に向ける。

「みんな捕まえた子達の方を気にしてたから、なんか言いだしづらくて。一応、向こうから通信が入ったら説明しようと思ってたんだけど……」

「…その通信機が壊れてたことに気づかなかったんだね」

途中から言葉を引き継いだなのは、彼はその通りですと言つように小さく頷く。

民間協力者とはいえ、真司も機動六課の一員である以上、当然作戦時にはみんなと連絡が取れるよう通信機が手渡されていたのだ。だが、手首についていたその通信機は、地下水路でのガリューとの戦闘中に壊れてしまっていた。それを知らないまま、真司はひょこひょこひとりで声に従って行ってしまったというわけだ。

「まさかあのドラゴンの鎌の餌食になつてたなんてな」

「真司、報告によるとそれは召喚虫だったらしいんだけど」

「……え、そうだったの？」

てつきり竜同士の対決だと思っていた真司は、フェイトの言葉に啞然とする。

「……まあ、試作品を渡しとったこっちにも責任はあるし、今日はこれ以上言わんけど…次からは気をつけてな」

「はい」

「それじゃあ、そろそろ本題にはいるか。……真司くん、なんでへリが襲撃されることがわかったのか、詳しく説明してくれん？」

\*

「頭の中から声が聞こえた、か……」

一通り真司が説明を終えると、3人はそれぞれ思案の表情を見せる。

「ひょっとして、みんなが使ってる『念話』ってやつなのかな？」

自分なりに考えてたどりついた推論を口にする真司だが、はやては首を横に振る。

「念話を行うためには、自分と相手の両方がある程度の魔力の資質を持つことが最低条件や。真司くんにはミッドチルダに来てすぐの

時に検査をしたんやけど、資質はゼロやった」

「仮に何らかの方法で真司くんに念話を送れたとしても、問題は誰がそれをやったか、だね」

「あの時へりを狙っている人物がいたことを知っていて、しかもそれを真司に伝えることができた人物……今のところは検討もつかないね」

なのは達でも、あの声に関することはほとんどわからないようだ。

「ドラグレッダーの黒い稲妻みたいなやつのもよくわかんないしなあ」

「あ、それについては私が原因かもしれん」

「え？」

はやての言葉に首をかしげる真司。なのはとフェイトも同様だ。

「今のドラグレッダーの餌は私の魔力やろ？ひよつとしたらそれによつてあの子の体に変化が起きてるのかもってことや」

「つまり、はやてちゃんの魔力を吸収してパワーアップしてる。そういうことでいいのかな」

「……でも、このまま魔力を与え続けて悪影響が出ないのか、ちょっと心配だね」

「うーん……あいつも自分の害になるようなものは食べないだろうし、大丈夫なんじゃないかな。今のところは、新しいドラグレッダー、『ドラグレッダーV2』の誕生ってことで」

「ちょい待ち。『超ドラグレッダー人3』の方がよくない？」

「何段踏み飛ばしてるんだよ！？しかも無理やり過ぎるし！」

はやての命名に明らかな不備があることを指摘する真司。それを聞いて、彼女も考えを改めたようで

「しゃーない。『超ドラグレッダー人2』で我慢しよか。髪が伸びたら3ってことで」

「訂正するところそこじゃないだろ！？」

とりあえず『人』という単語を外すよう説得する真司だった。

「……『全力全開ドラグレッダー』とかどうかな」

「私は『ソニックドラグレッダー』がいいと思うんだけど……」

結局、ドラグレッダーの新名称は保留のままとなった。

「ああフェイト、ちょっといいかな」

途中から命名合戦になっていた話し合いが終わった後、フェイトは

真司に呼び止められた。

「真司。…あ、もしかしてケーキのことかな」

「そうそう。こんなことになっちゃって今日は作れなかったけど、どうするっ」

「えっと、どうしようかな……」

先ほどまですっかり忘れていたが、今日は真司を誘ってケーキの材料を買いに行っていたのだった。その後テレビ番組のインタビューに会って、そこで

「……………」

カアア、と顔全体が熱くなっていくのがわかる。

「………… フェイト？ 顔赤いけど大丈夫？」

「えっ！？ い、いや、なんでもないよ？ ち、近いうちに作りたいと思うから、時間が取れたらその時言っね。そ、それじゃっ」

それだけ言つと、フェイトはすぐさまくると回れ右をして早足で逃げるように去っていく。

「（どうしちゃったんだろ、私……）」

自分の行動が理解できない。どうして真司と2人きりになると恥ずかしくなるのだろう。

「（……本当に、変な感じ）」

「……行っちゃった」

なにやら様子のおかしかったフェイトは、一通り言うことを言った



後どこかへ行ってしまった。何か悪いことしたかな？と考える真司だが、特に思い当たる節はない。

「……ニヤニヤ」

「……シャーリー。いつの間にいたんだ。ついでにどうしてニヤニヤしてるんだ」

微妙な距離を取ってこちらを眺めていたシャーリーに声をかけると、彼女は相変わらずニヤニヤしたままで歩み寄ってくる。

「真司さんも罪な男だねえ」

「……どういうことだよそれ」

「それは教えない。見てて面白いから」

彼女の言葉の意味がまったく理解できず、真司は頭に？マークを浮かべる。

「まあ、それはそうとして。あの通信機、やっぱり壊れちゃったみたいだね」

「ああ、ごめんな。折角作ってくれたのに」

「謝ることないよ。私の腕が甘かったただだから。他のみんなの通信機はバリアジャケットにある程度守られてるし、万一壊れても念話ができるけど、真司さんは違うからね。もっと強度の高いものを用意しないと」

グツと拳を握るシャーリー。どうやらやる気満々のようだ。

「じゃあ、お願いするよ」

「了解。……あ、そうそう。もうひとつ作ってるものがあるんだけど、もうすぐ見せられると思うわ」

「もうひとつ？それって」

「秘密。それじゃあね」

秘密ばかりで何も教えてくれないなあと思いながら、真司はシャーリーを見送った。

「ふう……なんだか気になることばっかだな」

あの時間こえたノイズ交じりの声や、今日戦った女の子達のこと。フェイトの様子がおかしいことも気がかりのひとつであるし、そして。

「……あの子、大丈夫かなあ」

路地裏でロストログアを持って倒れていた、小さな女の子のことを考えながら、真司は自室へ戻っていった。

## 第二十三話 進化と謎と（後書き）

今回は特にストーリー上の動きはありませんでした。たまには一呼吸置かないとね！いつもほとんど話が進んでない気がするけど！

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第二十四話 侵されざる聖域（前書き）

ちよびちよび書きためていた最新話が5000文字ほどに達したので、とりあえず投稿します。

ようやっつとヴィヴィオとの出会い。

## 第二十四話 侵されざる聖域

地球人から見れば『近未来都市』と言って差し支えないであろうミッドチルダの道路を疾走する車が1台。

「でも、本当に俺も行っているの？その聖王教会ってところが管理してる病院に」

隣に座っているなのはに、真司は不安そうな顔つきで尋ねる。ちなみに車の操縦はシグナムが行っている。

例のレリックを持っていた女の子は、現在『聖王教会』という教会の方で保護しているらしいと聞いた真司が、「様子が気になるなあ」とつぶやいたところ。

「なら、真司くんも来る？今から迎えに行くんだけど」

「え？いいの？」

という次第で今に至る。女の子のことを心配していた真司にとっては、早く彼女に会えるのは喜ばしいことなのだが、どうにも『聖王教会』などというなんともすごそうな名前に尻すこみしてしまっている状態だ。

「全然大丈夫。真司くんは小さい子のお世話とか上手そうだし、むしろ来てくれた方がありがたいよ」

「ならいいんだけど」

そんなに子供の相手ができるわけでもないけどな、と付け加えつつ、とりあえず安心する真司。

「しかし、検査が済んで、何かしらの白黒がついたとして、あの子はどうなるんだろうな」

「当面は六課が教会で預かるしかないだろうね……」

シグナムが発した言葉に、歯切れ悪くなのはが答える。

「（確か、人造魔導師…だったよな）」

そんな2人のやり取りを見た真司は、地下水路でスバルから聞いた話を思い出す。

初めから魔導師になるべくして生まれ、そのための処置を施されてきた、文字通り『作られた存在』。倫理的な問題はもちろんあるだろうし、いろいろ警戒されそうだというのは真司でも理解できた。

「（……でもまあ、普通の子だってお父さんとお母さんが人体錬成して生まれるわけだし、普通に接すればいいよな）」

多少全年齢推奨ではないことをイメージしながら、彼がそう結論づけた時。

「騎士シグナム。聖王教会、シャツハ・ヌエラです！」

通信機から聞こえてきたのは、真司には覚えのない声。話し方からして、かなり焦っているのは明らかだ。

「どうされました？」

「すみません、こちらの不手際がありまして……検査の間にあの子が姿を消してしまいました」

「「「！」「」」」



それを聞いた途端、3人とも表情を変える。が、真司がただ驚いているだけなのに対し、なのはとシグナムの顔つきは厳しいものだ。そんな2人を見て、彼も遅れて事態の深刻さに気づく。

「そうか、あの子は人造魔導師だから」

「誰かが利用しようとして、危害を加えるかもしれない。そういうことだね」

真司の言葉を引き継ぎ、なのはがうなづく。確かに、あんな小さな女の子が誘拐でもされたら大変だろう。

「とにかく、病院へ向かうぞ」

シグナムの言葉とともに、運転する車のスピードが上がった。

「申し訳ありません！」

病院に着いた真司達を待っていたのは、先ほど通信を行ったシスター・シャツハであり、彼女は開口一番に謝罪の言葉を口にした。

「状況はどうなってますか？」

「はい。特別病棟とその周辺の封鎖と避難は済んでいます。今のところ飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません」

「外には出られないはずですよね？」

「はい」

なのはとシャツハの会話を聞きながら、やっぱり手当たり次第に探すことになりそうだなと真司は考える。

「とりあえず、2手にわかれて探してみる？」

真司がそう提案したところ、なのはは首を縦に振る。どうやら同じ意見らしい。

「それじゃあ、私と　　あつ」

そこまで言ったところで、なのはは真司を見つめるシャツハの視線に気づいた。

「紹介がまだでしたね。こちら、現在民間協力者として機動六課に協力してもらっている城戸真司さんです」

「あつ……、ど、どうもはじめまして。城戸真司です」

「こちらこそはじめまして。聖王教会所属、シャツハ・ヌエラと申します。……では、あなたが件の『龍騎』だったのですね」

「は、はい、そうですけど……っていうか、俺ってなんか噂になったりしてるんですか？」

シャツハの言葉を聞いた真司は、素直に浮かんだ疑問を口にする。

「はい、有名だと思いますよ。一部では『機動六課の隠し玉』と呼

ばれているそうです」

「……知らなかった」

「私も色々お話ししたいことがあるのですが、それはまた今度にしましょう」

「今はとりあえず、あの子を探さなきゃいけませんね」

ひとまず会話を打ち切り、4人は消えた女の子を搜索を始める。

「……さて。とうとう俺の秘奥義を使う時が来たみたいだな」

「……秘奥義？」

搜索隊その1・真司&なのはチーム。

搜索隊その2であるシグナムとシャッハと別れてすぐに、真司が意味ありげな笑みを浮かべていた。

「ああ。使っのは中1以来だな。それ以来かくれんぼなんてやってなかったからな。」

「?…あ、もしかして秘奥義って人を見つける方法のこと？」

「そうそう。それでも俺、子供のころは『かくれんぼのバカ真司』と言われて恐れられていたんだよ。」

「にやはは……そうなんだ。」

『そんなもの、誰が恐れるんだろう』という言葉は胸の奥にしまい、なのははとりあえず笑っておく。……そもそも、恐れている相手の名称に『バカ』は入れないだろう、多分。

「……うっつのはな、相手の視線を考慮することが大事なんだ。だから」

そう言ってしゃがみこんだかと思うと、真司はそのままうつぶせになって体を地面につける。

「これで探す」

そうして、草むらの中をほふく前進で進み始めた。小さな木も多く植えてあるので、確かに小さな子の視線に合わせるのは間違いではない……のだが、その体勢ではむしろ視線が低すぎるのでは？ なのは感じる。

「待つて真司くん、服汚れちゃうよ?」

「へーきへーき。このくらいどうってこと　　いてっ」

「どうしたの?」

なのはが呼びかけるが、しばらくたつても返事がない。現在、真司が草をかきわけて進んでいたため、彼女からは彼の足しか見えていない状態だ。

「真司くん?」

少し不安になり、なのはが真司の上半身があるであろう場所に進むと

\*

時間は少し巻き戻る。

「へーきへーき。このくらいどうつてこと」

女の子を探そうと草むらをほく前進で進んでいた真司は、服が汚れてしまうというなのはの声を聞き、体を前に進めながらもものは立っているであろう方向に顔を向けて返事をしようとしたのだが。

「いてっ」

よそ見をしていたせいで、前方にあった何かに気づかずぶつかってしまっ。

「（……？なんだこれ）」

驚いて顔を前に向けた真司だが、視界はどういうわけかほとんど白一色になっていた。目に映っているのは……白い布のようなもの。真司の頭はこれにぶつかったらしい。

そして少し目を横に向けると、そこにはきれいな肌の色

肌のふとももがあった。

「ひゃうっ」

なにやら上の方で子供のおびえる声が聞こえたかと思うと、太ももと白い布がもぞつと動く。

「（……え？あれ？待って、待て待て。俺が今見てるのって、まさか（）」

そうあってほしくないと願いつつ、真司は体を後ろへ後退させ、ゆっくりと顔を上げていく。



そこにいたのは、明らかにおびえた目つきをしている、真司達が探していた小さな金髪の女の子。よく見ると左目と右目で瞳の色が違うが、今はそんなことはどうでもよくて。

……服がめくれて無防備にさらされている彼女のふとももと白いパンツが、真司の精神を地獄へ叩き落とした。もしかしてももしかしなくても、今しがた彼が頭を突っ込んでいたのは、いたいけな女の子の『聖域』であつたことを認識したからだ。

「あ、あのう、えつと……これはその、あの……」

とりあえず何かを言わなければ、と脳内で口にするべき言葉を検索する真司。だが、脳の大半が「ちよつ、ええええええ!!?!?」という言葉で覆い尽くされた大混乱状態であるため、まともな答えは返って来ない。

⌋  
⋮  
⌋  
⌋

とその時、女の子が何かを言おうと口を開いた。相変わらず目はおびえたままだが、もしかするとこちらの言わんとすることを察してくれたのかと淡い期待を抱く真司。

「へ……」

自分の気持ちを表す言葉を探すような様子を見せる女の子。真司は黙って言葉を待つ。

「……………へん、たい」

純粋な女の子が一生懸命絞り出して発したその言葉を聞いた真司の心は、地獄からさらに下の未知なる領域に突き落とされた。

「がはっ……………」

なまじ正直なかわいらしい子供からの言葉の矢がどれだけ鋭く深く真司の心を抉ったかは、今さら言うまでもないだろう。

\*

「真司くん、どうしたの」

草むらをかきわけて進んだ先でなのはが見たのは、まるでこの世の  
終わりともいような表情でがっくりとひざをついてうな垂れて  
いる真司と、そんな彼の姿を見て多少おびえている様子の件の女の  
子の姿だった。

さっぱりわけがわからない。

「……………えっと、これは一体どういう状況？」

とりあえず思ったことをそのまま口にして、なのはは真司に説明を  
求めたのだが。

「……………最低だ、俺……………クズだ、ゴミだ……………いや、二酸化炭素吐き  
出す分ゴミよりもタチが悪いじゃないか……………」

「……………あ、あの、真司くん？聞こえてる？」

ぶつぶつと呪詛のように自虐の言葉を並べ続ける真司。目から光が消えているような気もする。……ここまできると、さすがに本気で心配になってくる。

「真司くん？何かあったのなら話してくれないかな。そんなに自分を卑下しないで」

「最低だ……なのはのパンツならともかく、こんな小さな子のパンツに頭を突っ込むなんて……」

本当に卑下するほど最低だった。

「なっ………！?!？」

なのはの動きが固まり、みるみる顔が真っ赤になっていく。

「なっ、なななな、なにを言ってるのかな真司くんは！わ、わわ私のパンツ見るのも十分最低だよ………あっ、でも別に、ゼツタイ見られたくないってわけじゃなくて、物事には順序というものがある、ちゃんと段階を踏んだ後なら……むしろ見られたい……って、そうじゃなくって！つまり……」

「ああ、最低だ……………」

「きれいさっぱり全部無視してる!？」

混乱して相当とんでもないことを口走っていたのだが、そんなのはの言葉をすべてスルーして落ち込み続けている真司。しばらくは放っておいた方がいいのかもしれない。

そう思つて、一旦真司から視線を外してみると。

「……………??？」

緑色の右目と赤色の左目で不思議そうに彼女達を見ている女の子が目に入った。

「（そうだった……………この子を探してたんだよね）」

真司とのやり取りですっかり忘れてしまっていたが、『病室を抜け出した女の子を見つける』という目的は達成できたようだ。

「（あれ……………おびえていない?）」

女の子が病室からいなくなったという話を聞いた時、なのははその理由を『いきなり知らない場所に連れて来られて怖くなったのではないか』と推測していた。実際、なのはが最初にここに来た時は、彼女は真司を怖がっているようなそぶりを見せていた。それが今は、『この人たちは何をしているんだろ？』というようにものに変わっている。……漫才のようなかけあいを見せられて、心象が変わったのかもしれない、となのはは考える。

……ともかく、怖がられていないほうがこちらにとってもありがたいことには変わらない。

「じめんね。びっくりさせちゃったかな」

ゆっくりと女の子に近づき、なのはは彼女の服についている汚れを優しく払う。

「はじめまして。高町なのはっていいます。お名前、言えるかな」

「……ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオ……いいね、可愛い名前だ」

この出会いが、彼女達にどれだけの影響を与えるものになるのかは、まだ誰も知る由がなかった。

## 第二十四話 侵されざる聖域（後書き）

というわけでいつも通り話が前に向いて進みませんでしたw丸1話かけてヴィヴィオと会うまでしか進まないなんて……

そしてなのはもキャラ崩壊。ギャグシーンだとみんなのキャラがかしくなるのはもうどうしようもないのかもしれない。タイトルもシリアスっぽくしておいて中身を見て『聖域』の意味に呆れかえった読者様も多いことでしょう。

今回の冒頭で真司が下ネタに近い発言をしていましたが、R-15指定くらいはした方がいいのでしょうか？でもまあ最近の子はませてるから問題ないような……

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。ちなみに今の目標は50万PV&総合評価1000ptです。どちらも僕にとっては大台となるものです。

では、いつになるかわかりませんが、また次回。

P・S・タイトルの元ネタはあるカードゲームのとあるカードの名称なのですが、わかった人はいますでしょうか？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1868n/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～龍の影を纏いし騎士～

2011年11月30日18時54分発行